

千歳市

梅川4遺跡(2)

— 一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成21年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



調査状況（平成19年度）



調査状況（平成20年度）



板状岩偶



IV群土器

例 言

1. 本書は、一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成19・20年度に千歳市梅川4遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、第Ⅱ黒色土層（当報告書呼称ではⅤ層あるいは包含層）についての報告書であり、第Ⅰ黒色土層の報告については次年度以降となる予定である。梅川4遺跡においては2冊目の調査報告書となる。
2. 調査・整理は、当財団の第1調査部第3調査課が3年度（平成19～21年度）にわたり担当した（Ⅰ章調査体制参照）。
3. 本書の執筆は、主に鈴木・鎌田・新家・影浦が担当し、遺構調査担当者がそれぞれの遺構の事実記載を行った。文責は各項目文末に示した。編集は新家・影浦が行った。
4. Ⅳ章の自然科学的分析は、炭化材樹種同定をバリノ・サーヴェイ株式会社、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。
5. 調査の実施にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご協力いただいたことをここに記し、感謝申し上げます。

国土交通省北海道開発局札幌開発建設部用地課、同部千歳道路事務所、千歳市教育委員会、千歳市埋蔵文化財センター

高橋 理、田村俊之、豊田宏良、松田淳子、大谷敏三、上屋真一、森 秀之、長町章弘、大林千春、乾 哲也、奈良智法、天方博章、山田和史、工藤 肇、赤石慎三、仙庭伸久、秋山洋司、石井 淳、藤井誠二、柏木大延、小針大志、野月寿彦、田中 亮、榎田朋広、平野 祐、稲垣和幸、佐藤一志、石橋孝夫、工藤義衛、下野直章、菅野修広、角田隆志、大島直行、青野友哉、石川直章、石神 敏、乾 芳宏、嶋井康夫、松田宏介、川内谷修、森岡健治、長田佳宏、藪中剛司、齋藤大朋、小野寺聡、葛西智義、杉浦重信、澤田 健、石井淳平、友田哲弘、長谷山隆博、松田 猛、石川 朗、高橋勇人、小野哲也、村本周三、原 靖寿、武田 修、小林 敬、八重柏誠、坪岡 始、熊谷 誠、高倉 純、守屋豊人、大沼忠春、福田裕二、平山禾都、野村 崇、神 康夫（順不同・敬称略）

記号等の説明

1 遺構名について

平成19・20年度現地調査時は、複数課が調査を担当していたため、便宜上調査区をA・B・Cの3地区に分けていた。当初は、第Ⅰ黒色土層（Ⅲ層）から検出した遺構名の頭に「U」を、第Ⅱ黒色土層（Ⅴ層）から検出した遺構の番号の頭に「L」を付していた。

本報告では、各地区の遺構番号を統一するため、遺構名を当初の遺構調査時の番号から通し番号に置き換えた。よって調査当時の番号とは大きく異なる名称の遺構がある。その際、第Ⅱ黒色土層（Ⅴ層）から検出した遺構の遺構名の「L」をはずし、代わりに「V」を付けた。次年度以降に刊行予定の、第Ⅰ黒色土層（Ⅲ層）から検出した遺構には、名前の頭に「Ⅲ」を付して区別した。

遺構のうち、土器集中が2番から始まっているのは、第Ⅰ黒色土層中で見つかった土器集中を1番としたためである。

遺構の名称表現に以下のアルファベットを使用した。

住居→VH 住居にともなう柱穴→HP 住居にともなう焼土→HF
土坑→VP Tビット→VTP 焼土→VF

2 遺構図等について

遺構平面図・断面図の縮尺は40分の1である。調査区内の土層柱状図の縮尺は100分の1である。例外も含め、図面にはそのつど縮尺を表すスケールを付した。

平面図の天方向は、N-77°50'-Wである。平面図には北を示す方位印を付した。

遺構平面図中の「+」は、5m方格の大グリッドラインの交点で、傍らのアルファベット・アラビア数字が発掘区（グリッド）名である。

遺構平面図内の「・」付き小アラビア数字は、その地点の標高（m）を表す。

遺構図中の、破線 - - - - - は、輪郭線がオーバーハングや他の遺構の下に隠れていることを表し、一点鎖線 - · - · - · - は掘り揚げ土、攪乱、風倒木等の範囲を示すのに使用した。

3 遺物図について

遺物図の縮尺は、復元土器・拓影土器片・礫石器が3分の1、剥片石器・石製品が2分の1である。岩偶は等倍で図示した。例外を含め、図には全て縮尺のスケールを付した。

また、個々の遺物図右下のゴシックアラビア数字は掲載番号であり、本文中のゴシックアラビア数字と対応している。後続する小文字のアルファベットがある場合は、同一個体を示す。

遺物の計測値は、「長さ（最大長）×幅（最大幅）×厚さ（最大厚）、重さ」を記した。欠損しているものは現存長の数値を（丸括弧）でくくった。

石器の実測図中で、たたき痕は $\sqrt{\quad}\sqrt{\quad}$ 、すり痕は $\left\langle \leftarrow \right\rangle$ で表した。

4 写真図版について

写真図版の縮尺は統一していない。遺物写真中の遺物右下のゴシックアラビア数字は、遺物図の掲載番号を示す。

目次

口絵

例言・記号等の説明

目次

挿図目次・表目次・写真図版目次

I 調査の経緯

1 調査要項	1
2 調査にいたる経緯	1
3 調査の経過	1
4 本書の内容	2

II 調査の方法

1 調査範囲	3
2 掘削など	4
3 測量と記録	5
4 資料整理	6
5 記録類と遺物の収納・保管	7
6 遺物の分類	7

III 遺跡の環境

1 位置	9
2 周辺の遺跡	9
3 土層の区分	9

IV 第Ⅱ黒色土層の遺構とその遺物

1 住居跡	19
-------	----

引用参考文献

写真図版

報告書抄録

2 土坑	23
3 Tピット	27
4 焼土	29
5 土器集中	29
6 遺構出土の遺物	48

V 包含層（第Ⅱ黒色土層）出土の遺物

1 土器	57
2 石器・石製品	89

VI 自然科学的手法による分析

1 千歳市梅川4遺跡出土炭化材の樹種	115
2 梅川4遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	118

VII 成果と問題点

1 まとめ	123
2 道央部における北筒Ⅱ式（トコロ6類） の型式幅について	126

挿 図 目 次

II 調査の方法

図 II-1 発掘区の設定	3
---------------	---

III 遺跡の環境

図 III-1 周辺の遺跡	10
図 III-2 遺跡の位置と調査範囲	12
図 III-3 土層柱状模式図	16
図 III-4 調査区土層柱状図	17

IV 第II黒色土層の遺構とその遺物

図 IV-1 遺構位置図(1)	20
図 IV-2 遺構位置図(2)	21
図 IV-3 住居跡(1)	30
図 IV-4 住居跡(2)	31
図 IV-5 住居跡(3)	32
図 IV-6 住居跡(4)	33
図 IV-7 土坑(1)	34
図 IV-8 土坑(2)	35
図 IV-9 土坑(3)	36
図 IV-10 土坑(4)	37
図 IV-11 土坑(5)	38
図 IV-12 土坑(6)	39
図 IV-13 Tビット(1)	40
図 IV-14 Tビット(2)	41
図 IV-15 Tビット(3)	42
図 IV-16 Tビット(4)・焼土	43
図 IV-17 土器集中	45
図 IV-18 住居跡出土の土器(1)	49
図 IV-19 住居跡出土の土器(2)	50
図 IV-20 土坑出土の土器(1)	51
図 IV-21 土坑出土の土器(2)	52
図 IV-22 土器集中の土器	53
図 IV-23 遺構出土の石器	54

V 包含層(第II黒色土層)出土の遺物

図 V-1 包含層出土遺物分布図	58
図 V-2 包含層出土土器分布図(1)	59
図 V-3 包含層出土土器分布図(2)	60

図 V-4 包含層出土土器分布図(3)	61
図 V-5 包含層の土器(1)	63
図 V-6 包含層の土器(2)	64
図 V-7 包含層の土器(3)	66
図 V-8 包含層の土器(4)	68
図 V-9 包含層の土器(5)	69
図 V-10 包含層の土器(6)	70
図 V-11 包含層の土器(7)	72
図 V-12 包含層の土器(8)	74
図 V-13 包含層の土器(9)	75
図 V-14 包含層の土器(10)	77
図 V-15 包含層の土器(11)	78
図 V-16 包含層の土器(12)	79
図 V-17 包含層の土器(13)	80
図 V-18 包含層の土器(14)	81
図 V-19 包含層の土器(15)	82
図 V-20 包含層の土器(16)	83
図 V-21 包含層出土石器分布図(1)	91
図 V-22 包含層出土石器分布図(2)	92
図 V-23 包含層出土石器分布図(3)	93
図 V-24 包含層の石器(1)	96
図 V-25 包含層の石器(2)	97
図 V-26 包含層の石器(3)	98
図 V-27 包含層の石器(4)	99
図 V-28 包含層の石器(5)	100
図 V-29 包含層の石器(6)	101
図 V-30 包含層の石器(7)	102
図 V-31 包含層の石器(8)	103
図 V-32 包含層の石器(9)	104
図 V-33 包含層の石器(10)	105
図 V-34 包含層の石器(11)	106
図 V-35 包含層の石器(12)	107
図 V-36 包含層の石製品	108
図 V-37 岩偶出土状況	109

VI 自然科学的手法による分析

図 VI-1 暦年較正年代グラフ(1)	121
図 VI-2 暦年較正年代グラフ(2)	122

Ⅶ 成果と問題点

- 図Ⅶ-1 岩偶の類別 ……………125
- 図Ⅶ-2 北筒式編年細別模式図（部分）
……………126
- 図Ⅶ-3 江別市萩ヶ岡遺跡の地層断面図
……………128

- 図Ⅶ-4 江別市萩ヶ岡遺跡の層別種別
土器頻度 ……………129
- 図Ⅶ-5 古い属性を残す北筒式 ……………136

表 目 次

I 調査の経緯

- 表Ⅰ-1 第Ⅱ黒色土層 検出遺構数一覧
…………… 2
- 表Ⅰ-2 第Ⅱ黒色土層 出土遺物点数
一覧 …………… 2

Ⅲ 遺跡の環境

- 表Ⅲ-1 祝梅川水系の遺跡調査結果一覧
…………… 11

Ⅳ 第Ⅱ黒色土層の遺構とその遺物

- 表Ⅳ-1 Tピット覆土土層注記 …………… 44
- 表Ⅳ-2 検出遺構一覧 …………… 46
- 表Ⅳ-3 遺構出土遺物点数一覧 …………… 47
- 表Ⅳ-4 遺構出土掲載土器一覧 …………… 55
- 表Ⅳ-5 遺構出土掲載石器一覧 …………… 55

V 包含層（第Ⅱ黒色土層）出土の遺物

- 表Ⅴ-1 包含層出土土器点数一覧 …… 57
- 表Ⅴ-2 包含層出土掲載土器一覧 …… 85
- 表Ⅴ-3 包含層出土石器点数一覧 …… 90
- 表Ⅴ-4 包含層出土掲載石器等一覧 …110

Ⅵ 自然科学的手法による分析

- 表Ⅵ-1 梅川4遺跡の樹種同定結果 …115
- 表Ⅵ-2 梅川4遺跡放射性炭素年代
測定試料一覧 ……………119
- 表Ⅵ-3 梅川4遺跡放射性炭素年代
測定結果 ……………120

Ⅶ 成果と問題点

- 表Ⅶ-1 北筒Ⅱ式（トコロ6類）属性
対比一覧 ……………132

写真図版目次

口絵 1

- 調査状況（平成19年度）
調査状況（平成20年度）

口絵 2

- 板状岩偶
Ⅳ群土器

Ⅵ章

- 図版Ⅵ-1 梅川4遺跡の炭化材 ……………117

図版 1

- H9区第Ⅱ黒色土層調査状況
H～K35区第Ⅱ黒色土層調査状況

図版 2

- C地区東側メインセクション
C地区西側メインセクション
B地区メインセクション

図版 3

- VH-1 検出状況
VH-1 HF-1 土層断面

VH-1 HP-1 土層断面
VH-1 炭化材出土状況
VH-1 HP-3 土層断面
VH-1 HP-4 土層断面

図版 4

VH-2 検出状況
VH-2 HF-1 土層断面
VH-2 炭化材出土状況
VH-2 粘土出土状況
VH-2 HP-1 土層断面
VH-2 HP-3 土層断面

図版 5

VH-3 土層断面
VH-3 完掘
VH-3 HF-1 土層断面
VH-3 床面土器出土状況
VP-1 土層断面
VP-1 完掘
VP-2 土層断面
VP-2 完掘

図版 6

VP-3 土層断面
VP-3 完掘
VP-4 完掘
VP-5 土層断面
VP-5 遺物出土状況
VP-5 完掘
VP-6 土層断面
VP-6 完掘

図版 7

VP-7 土層断面
VP-7 完掘
VP-8 土層断面
VP-8 完掘
VP-9 土層断面
VP-9 完掘

図版 8

VP-10 土層断面
VP-11 土層断面
VP-11 完掘
VP-12 土層断面
VP-12 完掘
VP-13 土層断面
VP-13 完掘

図版 9

VTP-1 完掘
VTP-2 土層断面
VTP-3 土層断面
VTP-4 完掘

図版 10

VTP-5 土層断面
VTP-5 完掘
VTP-6 土層断面
VTP-6 完掘
VTP-7 土層断面
VTP-7 完掘

図版 11

VF-1 土層断面
VF-2 土層断面
土器集中3 検出状況
土器集中2 検出状況

図版 12

C9区第Ⅱ 黒色土層土器出土状況
R10区第Ⅱ 黒色土層板状岩偶出土状況
H35区第Ⅱ 黒色土層土器出土状況
I38区第Ⅱ 黒色土層土器出土状況
M43区第Ⅱ 黒色土層土器出土状況
R35区第Ⅱ 黒色土層土器出土状況
N・O43区第Ⅱ 黒色土層土器出土状況

図版 13

VH-2 の土器

VH-3の土器

図版14

VH-3の土器

図版15

VP-4の土器

VP-10の土器

VP-5の土器

VP-5の土器

VP-5の土器

図版16

土器集中2の土器

土器集中3の土器

VH-1の土器

VH-2の土器

VP-4の石器

図版17

包含層の土器(1)

図版18

包含層の土器(2)

図版19

包含層の土器(3)

図版20

包含層の土器(4)

図版21

包含層の土器(5)

図版22

包含層の土器(6)

図版23

包含層の土器(7)

図版24

包含層の土器(8)

図版25

包含層の土器(9)

図版26

包含層の土器(10)

図版27

包含層の土器(11)

図版28

包含層の石器(1)

図版29

包含層の石器(2)

図版30

包含層の石器(3)

図版31

包含層の石器(4)

図版32

包含層の石器(5)

図版33

包含層の石器(6)

図版34

包含層の石器(7)

図版35

包含層の石器(8)

図版36

包含層の石製品

I 調査の経緯

1 調査要項

事業名	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
事業受託者	財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	梅川4遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-03-59）
所在地	北海道千歳市祝梅2047-57ほか
調査期間	平成19年4月3日～平成20年3月31日（発掘期間5月8日～10月27日） 平成20年4月3日～平成21年3月31日（発掘期間5月7日～10月31日） 平成21年4月1日～平成22年3月31日
調査面積	平成19年8,655㎡、平成20年13,550㎡
調査体制	第1調査部 部長 越田賢一郎 第2調査部 部長 西田 茂

平成19年度	平成20年度	平成21年度
第1調査部第2調査課	第1調査部第3調査課	第1調査部第3調査課
課長 遠藤 香澄（発掘担当者）	課長 鈴木 信（発掘担当者）	課長 鈴木 信
主査 菊池 慈人	主査 鎌田 望（発掘担当者）	主査 菊池 慈人
主任 芝田 直人	主査 菊池 慈人	主査 新家 水奈
主任 酒井 秀治	主任 新家 水奈	
第1調査部第3調査課	主任 影浦 覚	
課長 鈴木 信（発掘担当者）	主任 芝田 直人	
主任 宗像 公司（発掘担当者）	主任 酒井 秀治	
主任 阿部 明義		

2 調査にいたる経緯

梅川4遺跡に関する登載等の経緯・埋蔵文化財調査にいたる経緯については、(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第253集『千歳市 梅川4遺跡(1)』（平成20年3月発行）に詳細が記されている。大概は以下である。

「梅川4遺跡」の初出は『千歳市における埋蔵文化財(上)』千歳市教育委員会（昭和54年3月発行）であり、平成18年3月以降に当センターは札幌開発建設部が計画・実施している「道央圏連絡道路」事業のうち、一般国道337号新千歳空港関連工事に関わり受託事業者となった。

3 調査の経過

(1) 発掘経過

これまで、当センターは平成18年度に6,350㎡を調査・整理・報告し、平成19～20年度にかけて22,205㎡を調査・整理し、平成21年度は整理・報告を行った。

平成19年度の発掘経過に関しては(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第253集『千歳市 梅

川4遺跡(1)』(平成20年3月刊行)に詳細が記されているので、平成20年度について記す。

4月1日～5月9日：現場準備・開所式

5月12日：第Ⅰ黒色土層上面精査開始

6月10日：第Ⅱ黒色土層に対して25%調査を開始

9月18日：第Ⅰ黒色土層調査終了

10月21日：第Ⅱ黒色土層調査終了。

最終調査面積は13,550㎡、稼働日数は109日(雨天休3日・G8サミットにかかわる休止4日)、労働災害1件であった。

(2) 整理経過

平成19年度：出土遺物の破片接合・復元を行い、それと並行して報告書『千歳市 梅川4遺跡(1)』(北理調報第253集)を刊行した。

平成20年度：平成20年10月30日整理作業開始、出土遺物の破片接合・復元、実測、遺構素図作成・図版製作、年代測定・炭化材樹種同定の成果を得る。

平成21年度：平成21年4月1日整理作業開始、出土遺物の実測・墨入れ、図版作成、写真撮影・写真整理を行い、報告書『千歳市 梅川4遺跡(2)』(北理調報第269集)を編集・刊行した。

4 本書の内容

本書は、平成19～20年度に調査した千歳市梅川4遺跡の第Ⅱ黒色土層(当報告書呼称のV層)についての報告を行う。本文中の「包含層」は第Ⅱ黒色土層を指す。遺構と土器・石器等の遺物、自然科学的分析について報告する。Ⅰ章では、調査に至る経緯とこれまでの調査の経過について説明する。Ⅱ章では、当遺跡の調査の工程を概説、調査方法と遺物や図面・写真などの記録類の取り扱いについて説明する。Ⅲ章では、遺跡の位置・立地とその環境について触れる。Ⅳ章では、遺構・遺物に対する事実報告で、遺構としてのあり方と遺物について報告する。Ⅴ章では、包含層出土の遺物について報告する。Ⅵ章では、自然科学的分析による報告を掲載する。Ⅶ章では、遺物について若干の考察を行う。写真図版では、現地調査における調査状況や土層・各遺構の状況、出土した遺物を掲載する。

今回報告する梅川4遺跡の第Ⅱ黒色土層(包含層)から検出された遺構および遺物の概略は以下の表の通りである。(鈴木)

表Ⅰ-1 第Ⅱ黒色土層 検出遺構数一覧

住居跡(VH)	土坑(VP)	Tピット(VTP)	焼土(VF)	土器集中
3	16	7	2	2

表Ⅰ-2 第Ⅱ黒色土層 出土遺物点数一覧

	土器	石器	土製品	石製品	自然遺物	計
遺構	1,133	252	—	—	3	1,388
包含層	38,280	167,497	14	9	19	205,819
計	39,413	167,749	14	9	22	207,207

II 調査の方法

1 調査範囲

(1) 発掘区の設定

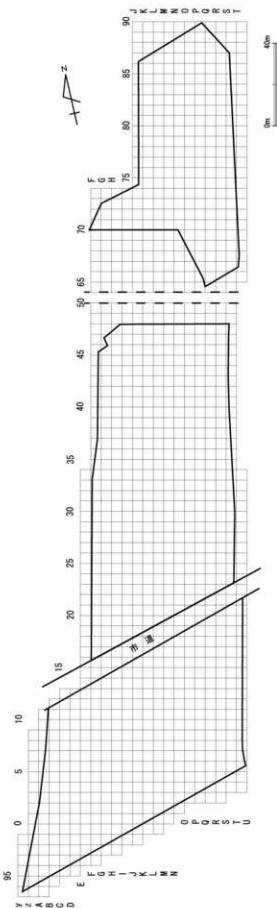
現地調査の基本図は、札幌開発建設部の「一般国道337号新千歳空港関連工事の用地平面図1,000分の1」を使用した。

発掘区すなわちグリッドは平成18年度に行った現地調査の際に設定したものを踏襲した（北埋調報第253集）。工事予定範囲のほぼ中央を通る基準線上のSP4400とSP4500を結んで基軸を設け、さらにこの線上のSP4400でこの基軸と直交する線を設けて、この二本の線を基準とした。この基軸をMと呼称し、基軸に5mごとに平行する線をアルファベットで表記して西側をL、K、J…A、z（小文字）、y（小文字）、東側をN、O、P…U、Vとした。また、STA4400を通り、Mラインに直交する線はアラビア数字で表記して37とした。この線と平行する線は5mごとに南側を36、35、34…0、99、北側を38、39、40…90とした。これらの交点に杭を打ち、5×5m方眼に区画した西南端の杭を発掘区の呼称とした。各方眼はアルファベットと数字の組合せにより呼称した（例：M20）。アルファベットと数字の間にはハイフン（-）は入れずに、遺構名の表記とは区別した。さらに必要に応じて5×5m方眼を2.5m四方に分割し反時計回りにa・b・c・dと呼ぶ小発掘区（小グリッド）を設置した。これらはM20a、M20bなどとグリッド名を併せて呼称する。

また、当初は複数課が現地調査に当たっていたため、便宜的に調査区を北側から、A・B・Cの3地区に分けて調査を行った。

(2) 座標値

20mおきに基準杭を設けた。平面直角座標系第12系における主な基準杭の世界測地系X・Y座標値及び緯度、経度は以下のとおりである。



図II-1 発掘区の設定

C 2	X = -130037.682	Y = -45873.924
	北緯42° 49' 41.0187"	東経141° 41' 20.1082"
K 2	X = -130046.577	Y = -45834.926
	北緯42° 49' 40.7389"	東経141° 41' 21.8278"
G10	X = -130003.132	Y = -45845.530
	北緯42° 49' 42.1446"	東経141° 41' 21.3482"
K10	X = -130007.579	Y = -45826.031
	北緯42° 49' 42.0046"	東経141° 41' 22.2081"
S10	X = -130016.474	Y = -45787.032
	北緯42° 49' 41.7248"	東経141° 41' 23.9278"
K30	X = -129910.083	Y = -45803.793
	北緯42° 49' 45.1691"	東経141° 41' 23.1587"
S30	X = -129918.978	Y = -45764.794
	北緯42° 49' 44.8892"	東経141° 41' 24.8784"
K42	X = -129851.585	Y = -45790.450
	北緯42° 49' 47.0678"	東経141° 41' 23.7290"
S42	X = -129860.480	Y = -45751.451
	北緯42° 49' 46.7879"	東経141° 41' 25.4488"

平面直角座標系第12系における3級水準点の世界測地系X・Y座標値及び緯度、経度は以下のとおりである。

H20-NO 1	X = -130055.749	Y = -45812.744
	北緯42° 49' 40.4464"	東経141° 41' 22.8072"
H20-NO 2	X = -129986.220	Y = -45768.986
	北緯42° 49' 42.7091"	東経141° 41' 24.7135"
H20-NO 3	X = -129914.388	Y = -45758.694
	北緯42° 49' 45.0393"	東経141° 41' 25.1456"
H20-NO 4	X = -129868.499	Y = -45748.722
	北緯42° 49' 46.5286"	東経141° 41' 25.5713"

また、図中の北方向については、そのつど方位記号を用いて示した。

2 掘削など

(1) 掘削

掘削作業には主に移植ゴテ、ねじり鎌を使用した。遺構・遺物の検出状況に応じて、竹筥や竹串を使用して遺構・遺物を傷つけないように配慮して掘削した。精査・清掃の際には炉箒、ブラシ、エアブラシ等を併用した。移植ゴテでは掘ることが困難な場所や、遺構・遺物の見られない範囲、攪乱等ではスコップ等を併用した。

遺構は降雨による流水や乾燥により崩壊し易いため、ジョウロや噴霧器で適度に散水し、コンパネやブルーシートをかけるなど、乾燥や降雨対策をとって調査を進めた。黒色腐植土は水分を含むと滑

りやすくなるため、排土場に至る道や通路には細粒火山灰を撒いたり、歩み板や麻袋を敷いて転倒防止に努めた。

(2) 埋め戻し

平成19年度の調査終了後、平成20年度の調査予定範囲に接する部分の壁面には、冬季間の土壤凍結・融解による崩落を防ぐために、重機により法面を作って養生した。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

20mごとに委託設置した基準杭をもとに5×5m方眼の交点に測量杭を設置して平面測量の基準とした。基準杭にはそれぞれの杭に打たれた釘の標高を記入し、この標高を水準測量の基準とした。水準測量にはオートレベルと1mm目盛アルミ製スタッフを用いて基準杭の標高と測量対象の比高を直接観測した。平面測量は測量杭を基準とした手測りによる。

遺構の実測図はB3版セクションフィルムに、基本的に1/20の縮尺で記録した。遺物出土状況の詳細図については1/10の縮尺を用いた。掲載時にはさらにそれぞれを50%縮小している。

(2) 現場での撮影

a 撮影方法

発掘現場での写真撮影には6×7サイズカメラを使用し、デジタルカメラで補助記録を行った。撮影対象は遺構・遺物の検出状況、調査状況などである。記録保存のため、同一カットの絞りを変えて複数コマ撮影し、1セットとした。撮影の際にはブレやボケを防ぐために三脚・レリーズを使用した。

b 撮影機材

撮影機材はMamiya RZ67PRO II、フィルムはフジネオパンアクロス100-120・フジRDP III 120を使用した。フィルムの使用頻度や収納スペースの観点から、ほとんどを6×7サイズで行うこととした。スライドは必要に応じて6×7サイズリバーサルフィルムより作成した。

c 撮影データ

現場での撮影データ（カットNo・撮影日・被写体名・被写体詳細または出土層位・撮影方向・フィルム種類・撮影者）は撮影者が野帳に記入し、記録とデジタルカメラによる撮影の統合を行い写真台帳とした。

(3) 遺物等の取り上げ

a 出土遺物

遺物の取り上げ方法は、5m方眼内での出土位置と標高を記録して取り上げる点取り上げと、5m方眼・出土層位で一括して取り上げる一括取り上げがある。遺構出土遺物やあるまとまりをもって出土した遺物、旧石器等は点取り上げ、それら以外の包含層出土の遺物は一括で取り上げた。

b 土壌等

剥片・微細剥片が集中する部分では範囲を記録して土壌ごとに取り上げた。土壌に含まれる多量の剥片・微細剥片は整理作業において土壌水洗選別により取り出した。

4 資料整理

(1) 図面等

遺構や遺物出土状況の原因は訂正などの作業を行った。訂正・変更があった場合はその箇所が確認できるように原因に書き込んでいる。その後、原因から1mm方眼紙に鉛筆で素図を作成した。

(2) 出土遺物

出土した遺物は、現場調査と平行して現地で水洗・乾燥・分類・遺物カードの添付・遺物台帳の作成、および注記作業を行った。注記は、以下のように行った。

	遺跡名	遺構名	層位	遺物番号
注記例 遺 構 :	ウ4.	VP-5.	フクト8.	6
	遺跡名	グリッド名	層位	遺物番号
包含層 :	ウ4.	L10.	V.	3

土器の分類は19年度調査分を鈴木・遠藤が、20年度調査のV層出土分を影浦が行なった。石器の分類および掲載石器の抽出は、19年度調査分を遠藤・宗像が、20年度調査のV層出土分を新家が担当した。報告書作成に当たり、兩年分のV層出土遺物点数の集計、台帳変更、掲載土器・石器の取りまとめ、実測指示、表作成、原稿執筆は新家・影浦が行った。掲載土器および石器の室内撮影は菊池が行った。

(鎌田)

(3) 室内での遺物撮影と現像

a スタジオ撮影

撮影は光量の安定性、色再現の忠実性などの理由からストロボを用いて行った。土器片や石器などは、トヨ無影撮影台を使用し、俯瞰撮影を行った。その際、撮影対象の傾きを、発泡スチロールや脱脂粘土などで調整した。

復元土器は撮影台に白い背景紙を垂らして立面撮りを行った。現場での撮影と同様、同条件（ライティング・露出など）で2コマ撮影し、1セットとした。

撮影機材は、ストロボには2400W/Sのジェネレータ（コメットCB2400）を2、3台、発光部（CL-25H）を2～4灯使用した。カメラはトヨビュー45GXとマミヤRZ67プロ、フィルムはフジネオパンアクロス100-120、フジRDPⅢ120を使用した。

b 現像

カラーリバーサルフィルムの現像は外注している。モノクロフィルム現像は、自動現像機（ILFORD ILFOLAB FP40）での自家処理で行っている。モノクロ写真の焼付けも自家処理し、写真図版用の写真を作成した。

(菊池)

5 記録類と遺物の収納・保管

今回の報告に関する図面等・写真・出土遺物は2010年3月現在、北海道立埋蔵文化財センターで保管している。図面等は全てA2版図面ファイルに調査年度・北埋調報番号・遺跡名をつけて収納している。写真フィルムは1コマずつ番号を付し、フィルム種類ごとの順番でアルバムに収め、これに基づいて写真台帳を作成した。またアルバムは全ての調査・整理作業が終了した後、特別収蔵庫に保管される。土器・石器等の出土遺物は遺物台帳、収納台帳とともにコンテナに収納した。復元した土器個体は、大きさに見合うダンボールに梱包し、コンテナとともに遺跡名・調査年度・北埋調報番号等の情報を記したラベルを貼った。(新家)

6 遺物の分類

(1) 土器

土器は縄文時代早期に属するものから順次ローマ数字で表記した。中分類をアルファベット(小文字)で表し、小分類をアラビア数字で表した。当センターの道央部における分類に準拠している。

I群：縄文時代早期に属する道央部の縄文土器

- a類：早期前半。貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。それらと併行関係にある土器群。
 テンネル^{テンネル}・睨式^{こしほぼ}、虎杖浜式^{トラカサ}、アルトリ式等。
- b類：早期後半。縄文、燃糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などが施された土器群。
 b-1類 東銅路Ⅱ式に相当するもの。
 b-2類 東銅路Ⅲ式、コッタロ式に相当するもの。
 b-3類 中茶路式に相当するもの。
 b-4類 東銅路Ⅳ式に相当するもの。

II群：縄文時代前期に属する道央部の縄文土器

- a類：前期前半。胎土に繊維を多量に含み厚手で縄文が施された丸底・尖底の土器群。
 a-1類 美沢3式、花積下層式、美々7式、綱文式に相当するもの。
 a-2類 春日町式、静内中野式に相当するもの。
- b類：前期後半。円筒土器下層式に相当するもの。植苗式^{ウツボ}、大麻Ⅴ式。

III群：縄文時代中期に属する道央部の縄文土器

- a類：中期前半。円筒土器上層式および併行関係にあるもの。およびそれらに後続する土器群。
 a-1類 円筒土器上層a式、フゴッベ貝塚2式・3式。
 a-2類 円筒土器上層b式・C式、サイベ沢Ⅱ式。
 a-3類 サイベ沢Ⅲ式、見晴町式^{ミハルマチ}、萩ヶ岡1式・2式。
- b類：中期後半。天神山式^{テンジヤマ}(萩ヶ岡3式)、柏木川式^{カシノガハ}、北筒Ⅱ式、ノダツ^{ノダツ}Ⅱ式、煉瓦台式等。

IV群：縄文時代後期に属する道央部の縄文土器

- a類：後期前葉。余市式^{ヨイチ}・タブコブ式^{タブコブ}・入江式^{イライ}等の土器群。
 a-1類 余市式の一段階に相当するもの。

- a-2類 タブコブ式に相当するもの。
- a-3類 入江式に相当するもの。
- b類：後期中葉。ウサクマイC式、手稲式、鯨潤式、エリモB式等の土器群。
 - b-1類 ウサクマイC式。
 - b-2類 手稲式。
 - b-3類 鯨潤式。
- c類：後期後葉。堂林式、三ツ谷式、御殿山式等の土器群。
 - c-1類 堂林式。
 - c-2類 「三ツ谷式」併行。
 - c-3類 御殿山式。

V群：縄文時代晩期に属する道央部の縄文土器

- a類：晩期前葉。大洞B式、大洞BC式、東三川I式に相当するもの。
- b類：晩期中葉。大洞C₁式、大洞C₂式、美々3式に相当するもの。
- c類：晩期後葉。大洞A式、大洞A'式、タンネットウL式に相当するもの。

VI群：統縄文時代に属する道央部の土器

VII群：擦文時代に属する道央部の土器 (影浦)

(2) 石器・石製品

分類に使用している器種の名称、および掲載順は以下のとおりである。

剥片石器群：細石刃、石鎌、石槍・ナイフ類、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、U剥片、R剥片、楔形石器、石核、原石、剥片

磨製石器群：石のみ、石斧・石斧片、擦り切り残片、石斧原材、研磨石材

礫石器群：たたき石、扁平打製石器、北海道式石冠、すり石、矢柄研磨器、石鋸、砥石、石皿、台石、原石、加工痕のある礫、礫・礫片

上記以外の石製遺物については、石製品(岩偶、垂飾、軽石製品、オロシガネ状石製品など)と分類した。

分類後の石器は遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは分類器種ごとに台帳を作成し、点数を集計した。

(3) 自然遺物

炭化材、ベンガラなどが出土している。炭化材は、遺構から採取した試料を中心に、樹種同定と放射性炭素年代測定の実行を行った(VI章参照)。(新家)

III 遺跡の環境

1 位置

梅川4遺跡は千歳市祝梅2047-57ほかに所在する。千歳市は北海道の西部、石狩地方の南端を占め、北は恵庭市、南は苫小牧市に接している。遺跡は千歳市街南東隅に位置する。また、遺跡はJR千歳駅から約3キロ離れた祝梅川源頭部右岸にある。祝梅川は遺跡から約0.5km下流で梅川と合流し、約3.5km下流で千歳川と合流する（図III-1）。

2 周辺の遺跡

祝梅川水系にある遺跡は、左岸に祝梅川遺跡・祝梅川矢島遺跡・祝梅堅穴遺跡・メムセ遺跡・アンカリト-8遺跡、右岸に祝梅川小野遺跡・梅川1~4遺跡・祝梅川山田遺跡・祝梅川上田遺跡・アンカリト-1~7・9遺跡がある（図III-1）。（影浦）

3 土層の区分

(1) 観察項目と記載順序

土層の観察にあたっては、『土壌調査ハンドブック』（日本ペドロジー学会編 1985）の基準に従った。また、これを参考にして、必要な項目を設けた。本書に掲載した土層注記の主な観察項目と記載順序は以下のとおりである。

a 層位名

自然地層の層名はローマ数字、遺構覆土など人為的な層はアラビア数字で示した。

b 土色

マンセル表色系に準じた『新版標準土色帖』（小山・竹原 2004）による土色名、色相（色み）、明度（色の明暗）、彩度（色みの強さ、あざやかさ）を記号及び数値で表現する方法で示した。

c 土性区分

土性は細土（2mm未満）の鉾質部分を構成している、粗砂（粒径2.0~0.2mm）、細砂（粒径0.2~0.02mm）、シルト（粒径0.02~0.002mm）、粘土（<0.002mm）の粒径組成のことであり、砂、シルト、粘土の重量%の違いにより区分する。それに加えて、採取した小土塊に可塑性が最大になるように適量の水を加え、親指と人差し指の間でこねて、砂の感触の程度、粘り具合、どの程度まで長くのばせるかなど、手触りと肉眼観察による「野外土性」で判定した。土性区分とその基準は以下のとおりである。本書では軽埴土・シルト質埴土・重埴土を合わせて埴土とした。

粘土含有量15%以下

砂土：S (Sand)

粘土0~5%、シルト0~15%、砂85~100%

ほとんど砂ばかりで粘り気を全く感じない。

壤質砂土：LS (Loamy Sand)

粘土粘土0~15%、シルト0~15%、砂85~95%

砂壤土：SL (Sandy Loam)

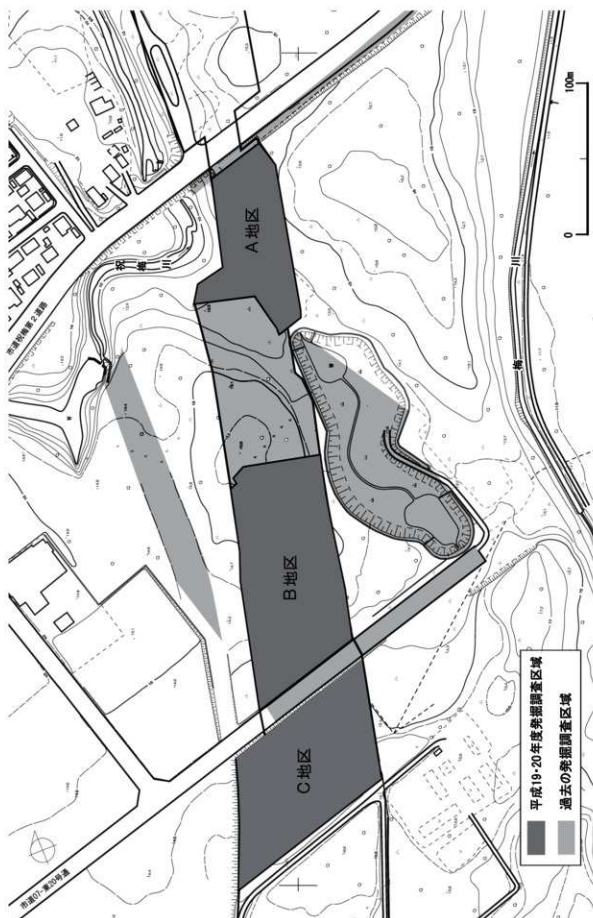
粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%



図Ⅲ-1 周辺の遺跡

表Ⅲ-1 祝梅川水系の遺跡調査結果一覧

時代	土器型式など	遺跡名	遺 構	報 告
旧石器時代		祝梅川上田	ブロック2か所(砂下型礫石片核と乱型礫石片核の共存ブロック、乱型礫石片核のブロック)	平成18年度調査・北理調報28
		祝梅川上田	ブロック3か所	平成20年度調査
		祝梅川小野	礫石片3点、磨器1点、石刀1点	平成19年度調査・整理中
縄文早期	早期?	祝梅川上田	土坑1基	平成18年度調査・北理調報28
	縄文尖底?	梅川3	住居跡2軒・土坑12基	千歳市教育委員会 昭和61年
縄文時代前期	植苗式	祝梅川小野	住居跡5軒と土坑 住居跡2軒・土坑群(積石中)	平成19年度調査・整理中 平成20年度調査・整理中
	縄文時代中期	柏木川式 北筒式?	梅川4 A 梅川4 C	土器集中1か所 土坑11基・焼土5か所・Tビット2基
後葉		梅川4 A	住居跡1軒	平成19年度調査・本報告
中期		祝梅川山田 梅川4	住居跡2軒 土坑1基	千歳市教育委員会 千歳市教育委員会 平成15年
中期?		祝梅川上田	土坑1基 アンカリー7	平成18年度調査・北理調報28 平成20年度調査・整理中
縄文時代後期	中期～後期?	祝梅川小野	Tビット15基(溝形・小判形)	千歳市教育委員会
	タプロコ式	梅川4 祝梅川小野	土器跡1か所 住居跡2軒	平成19年度調査・整理中 千歳市教育委員会
	ウツマイ式	梅川4 祝梅川小野	住居跡1軒 土坑	千歳市教育委員会 平成15年 平成19年度調査・整理中
	手船式	祝梅川小野	住居跡2軒	平成20年度調査・整理中
		梅川3	住居跡4軒・土坑1基	千歳市教育委員会 昭和61年
	後期	梅川4 A	土器集中1か所	平成19年度調査・本報告
	中葉	梅川4 A	平地住居跡2軒	平成19年度調査・整理中
	中葉～後葉	祝梅川小野	住居跡2軒	平成20年度調査・整理中
	晩期	祝梅川小野	土坑・焼土・集石等	平成20年度調査・整理中
	縄文時代晩期	クネットウ式	梅川3	土坑7基
祝梅川小野			住居跡2軒・土坑58基・土器集中6か所	平成19年度調査・整理中
祝梅川小野			土坑18基	平成20年度調査・整理中
梅川1			焼土8か所	平成20年度調査・整理中
梅川3			住居跡6軒・土坑痕6基・土坑53基	千歳市教育委員会 昭和61年
梅川4		建物跡1棟・土坑6基	千歳市教育委員会 平成14年	
梅川4		土坑痕1基・土坑16基・土器集中1か所	千歳市教育委員会 平成15年	
梅川4		住居跡1軒・土坑155基	平成19年度調査・北理調報253	
梅川4 A		住居跡1軒・土坑437基・土器集中2か所・石器類集中6か所	平成18年度調査・整理中	
梅川2		土坑8基・Tビット2基(小判形)・焼土166所・フレクダ集中6か所・道跡1条(縄文時代後期中葉1期)	平成18年度調査・北理調報28	
不明	梅川4	Tビット1基	千歳市教育委員会 平成14年	
	梅川4 A	土坑、Tビット(小判形)4基、焼土2か所	平成19年度調査・整理中	
	梅川4 B	土坑5基、Tビット1基	平成20年度調査・本報告	
	梅川4 C	土坑2基	平成20年度調査・本報告	
	祝梅川小野	住居跡3軒・土坑48基・柱穴31か所、焼土12か所・Tビット6基(溝形4基、小判形2基)	平成19年度調査・整理中	
縄文時代	祝梅川矢島	土坑1基	千歳市教育委員会 平成15年	
	祝梅川上田	焼土穴か所(うち1か所は早期末の可能性)	平成18年度調査・北理調報28	
縄文時代	祝梅川上田	Tビット2基(小判形)・焼土106所・石器集中1か所	平成20年度調査	
	アンカリー9	土坑1基・焼土3か所	平成20年度調査	
縄文時代	初頭	祝梅川矢島	土坑1基	千歳市教育委員会 平成15年
	後北式～北大式	祝梅川山田	土坑5基	千歳市教育委員会
縄文文化期	梅川2	焼土1か所・集石1か所	平成18年度調査・北理調報28	
	梅川3	住居跡2軒	千歳市教育委員会 昭和61年	
	梅川4 B	集石1か所	平成19年度調査・整理中	
	祝梅川小野	住居跡2軒・焼土2か所・集石3か所	平成19年度調査・整理中	
	祝梅川小野	住居跡3軒	平成20年度調査・整理中	
	祝梅川上田	灰集中1か所、焼土2か所、道跡1か所	平成18年度調査・北理調報28	
アイヌ文化期	梅川1	建材集中1か所	平成20年度調査・整理中	
	梅川2	住居跡2軒・小柱穴21か所	平成18年度調査・北理調報28	
	梅川3	土坑痕3基	千歳市教育委員会 昭和61年	
	梅川4	創建建物跡4軒・土坑痕1基・焼土200か所・柱穴653か所・道跡3条	千歳市教育委員 平成15年	
	梅川4	創建建物跡1軒・集石1か所	千歳市教育委員 平成15年	
	梅川4 B	道跡・柱穴32か所、焼土546所、貝集中(カワシユガイ)	平成19年度調査・整理中	
	梅川4 B	住居跡10敷軒(積石中)、柱穴301か所、焼土886所、灰集中2か所、貝集中216所(カワシユガイ)、骨集中3か所、道跡数条	平成20年度調査・整理中	
	梅川4 C	道跡・柱穴11か所、焼土146所、貝集中(カワシユガイ)	平成19年度調査・整理中	
	祝梅川小野	平地住居跡3軒・灰集中2か所、柱穴206か所、道跡1条	平成19年度調査・整理中	
	祝梅川小野	道跡数条・焼土・灰集中・骨片集中・燧石中・柱跡等(積石中)	平成20年度調査・整理中	
祝梅川上田	住居跡11軒・灰集中3か所、焼土12か所、小柱穴255か所	平成18年度調査・北理調報28		
祝梅川上田	建物跡痕・土坑痕1基・土坑1基・小柱穴1929所・集石96所・灰集中17か所・貝集中1か所・道跡3条	平成20年度調査・整理中		
祝梅川	集石1か所	千歳市教育委員会		
アンカリー7	平地住居跡1軒・建物跡2棟・土坑痕1基・焼土・燧石穴遺構1基・柱穴255か所・焼土86所・貝集中16所	平成20年度調査		
祝梅川上田	土坑3基・集石4か所	平成18年度調査・北理調報28		
祝梅川上田	乱型遺物の住居跡2軒・焼土496所・フレクダ集中1か所	平成20年度調査		



図Ⅲ-2 遺跡の位置と調査範囲

砂の感じが強く、粘り気はわずか。粘土細工で棒にはできない。

壤土：L (Loam)

粘土0～15%、シルト20～45%、砂40～65%

ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土が同じくらいに感じる。

粘土細工で鉛筆ぐらいの大きさにできる。

シルト質壤土：SiL (Silt Loam)

粘土15～25%、シルト45～100%、砂0～55%

砂はあまり感じないがサラサラした小麦粉のような感触がある。

粘土含有量15～25%

砂質埴壤土：SCL (Sandy Clay Loam)

粘土15～25%、シルト0～20%、砂55～85%

埴壤土：CL (Clay Loam)

粘土15～25%、シルト20～45%、砂30～65%

わずかに砂を感じるがかなり粘る。

粘土細工でマッチ棒ぐらいの太さにできる。

シルト質埴壤土：SiCL (Silt y Clay Loam)

粘土15～25%、シルト45～85%、砂0～40%

粘土含有量25～45%

砂質埴土：SC (Sandy Clay)

粘土25～45%、シルト0～20%、砂55～75%

軽埴土：LiC (Light Clay)

粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%

ほとんど砂を感じないで、よく粘る。

シルト質埴土：SiC (Silt y Clay)

粘土25～45%、シルト45～75%、砂0～30%

粘土含有量45%以上

重埴土：HC (Heavy Clay)

粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%

砂を感じないで、非常によく粘る。

d 粘着性

土壌を親指と人差指の間で圧して引き離すときの付着する性質である。水分状態によって変化するが、当該土壌の粘着性が最も高まったときの状態によって次のように区分した。

なし：NS (Non Sticky)

土壌がほとんど指に付かない。

弱：SS (Slight Sticky)

一方の指に付着するが、他方の指には付着しない。指を離したときにのびない。

中 : S (Sticky)

両指頭に付着する。指を離すと多少糸状にのびる傾向を示す。

強 : VS (Very Sticky)

指頭に強く付着する。指を離したときに糸状にのびる。

e 堅密度

土層断面を親指で押したときのへこみの程度から次のように区分した。

すこぶるしょう : VL (Very Loose)

ほとんど抵抗なく指が貫入する。

しょう : L (Loose)

指が土層内にたやすく深く入る。

軟 : S (Soft)

はっきりと深い指の跡が容易にできる。

堅 : H (Hard)

強く押ししても指の跡がわずかしかなかった。

すこぶる堅 : VH (Very hard)

強く押ししても指の跡が残らない。

固結 : EH (Extremely Hard)

移植コテによってやっと土壌を削れる。

f 層界

i, 層界の明瞭度

次の層までの移り変わる距離（層界の幅）を基準として次のように区分した。

画然 : < 1 cm

明瞭 : 1 ~ 3 cm

判然 : 3 ~ 5 cm

漸変 : 5 cm

ii, 層界の形状

次のように区分した。

平坦 : ほとんど平坦

波状 : 凹凸の深さが幅より小

不規則 : 凹凸の深さが幅より大

不連続 : 層界が不連続

g 礫・バミスの混入状況

土壌への礫やバミスの混入状況については、礫の大きさ・形状・風化度合い、バミスの名称・径(mm)、礫・バミスの混入面積割合(%)を記載した。

h 土層の混在状態

土層の混在状態の表記は、基本土層記号などを用いて次のように表した。記号と面積割合(%)の数値との相関関係については北埋調報第188集『千歳市 オルイカ1遺跡』に拠った。

A+B: AとBがほぼ同量混じる (Aが55%以上45%未満、Bが45%以上55%未満)

A>B: AにBが少量混じる (Aが80%未満、Bが20%以上45%未満)

A>>B: AにBが微量混じる (Aが80%以上、Bが20%未満)

(2) 基本層序

基本土層模式図(図Ⅲ-3)のとおりである。本遺跡の主な土層堆積状況をF22-F23、F27-F28、F38-F39、U7-U6、U13-U14区の土層柱状図で示した(図Ⅲ-4)。テフラの名称等は『火山灰アトラス』(東京大学出版会 1992)に拠った。

I 層: 表土・耕作土など

I' 層: 耕作土の上に発達した腐植土層

II 層: 樽前a降下軽石層(Ta-a)／元文4(1739)年旧暦7月14日に降下。平均層厚50cm。
砂質テフラを主体とし、3～4単位の軽石・火山灰の堆積層が確認できる。
上部は耕作により削平される。重機で除去。

III 層: 腐植土層

黒色(10YR1.7/1)。樽前c降下軽石・岩片を母材とする黒色シルト質。層厚10～20cm。

近世アイヌ文化期～縄文時代晩期後葉の遺構・遺物を包含する。

新千歳空港関連調査の「第I黒色土層」(IB層)に相当する。

樽前c降下軽石層(Ta-c)を約20%含み、密で均質、しまりは中程度で粘性がやや強い。下端層界は漸進的でやや不明瞭である。

IV 層: 樽前c降下軽石層(Ta-c)／縄文時代晩期後葉、2,300～2,500年前降下

褐色～暗褐色(10YR4/4～3/3)、粒径0.2～2mm、層厚10～15cm。

樽前c₁降下軽石層(Ta-c₁)と樽前c₂降下軽石・スコリア層(Ta-c₂)の間に厚さ数センチの灰褐色砂質ローム層がある。過年度の試料の分析によりTa-c₁とTa-c₂のあいだには数十年から百年程度の時間間隔があったと考えられている(北埋調報第253集)。下端層界は明瞭である。

V 層: 腐植土層(本書では「第II黒色土層」、「包含層」と呼称)

上位は黒色(10YR1.7/1～2/1)、粒子が細かく密で均質、しまりは中程度で粘性はやや強い。中・下位は黒色～黒褐色(10YR1.7/1～2/2)、粒子が細かく密だが、下位はやや不均質で安定しない。しまりはやや弱く、粘性が強い。層界が波状になるところも多い。層厚30～40cm。

縄文時代晩期後葉～早期の遺構・遺物を包含する。

新千歳空港関連調査の「第II・III黒色土層」(II・III B層)に相当する。

志庭a降下軽石層上部のローム層を母材とする黒色シルト質腐植土層。

V' 層: V層+En-aバミス。F25～F28区で観察される。

VI 層: 漸移層

暗褐色～褐色(10YR3/4～4/6)、層厚は10～15cmだが不安定。

縄文時代早期～後期旧石器時代の遺構・遺物を包含する。

恵庭a降下軽石層上部暗褐色ローム質土・樽前d₁・d₂降下軽石・恵庭a降下軽石層を母材とするV層とⅦ層の漸移層で層界は漸変する。しまりは中程度で粘性は強い。黒色土やロームのほかEn-aを10～20%含み不均質である。

Ⅶ層：ローム質土層

黄褐色(10YR5/6～5/8)、層厚15～30cm。

恵庭a降下軽石(En-a)が風化作用によってローム化した層。

Ⅶ層との層界は明瞭、しまりは強く粘性に富む。En-aを20～50%含み、密で均質である。

Ⅷ層：恵庭a降下軽石層(En-a)

後期旧石器時代前半、15,000～17,000年前に降下。層厚2m以上。

上部は非常に硬くしまる。

Ⅷ-1：明黄褐色～黄褐色(10YR6/8～5/8)

硬質ロームと径5～30mmの軽石をやや不均質に含み、下部は粒径が小さく非常に密である。

下端層界やや明瞭、極めてしまり強く硬い。

Ⅷ-2：黄橙色～明黄褐色(10YR7/8～6/8)

上部は密で硬質、下部はやや粗で不均質。

下端層界はやや不明瞭。軽石の表面が鉄分により赤色化している部分がある。

Ⅷ-3：黄褐色(10YR5/6～5/8)

径2～5mmの軽石>径10～30mmの軽石。しまりは強く均質だが、隙間が多く粗である。

径1mm程度の砂を多く含み、最下層は薄層をなす。

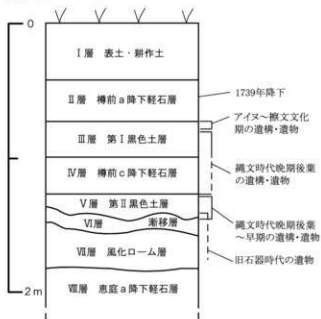
なお、Ⅸ層は柱状図には図示していないが以下の通りである。

Ⅸ層：シルト質粘土層

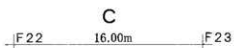
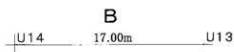
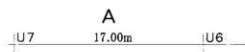
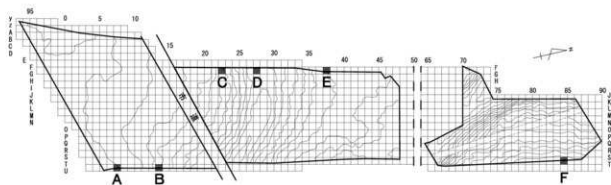
褐色～にぶい褐色(7.5YR4/4～5/4)。しまり中～やや強で均質。

(3) V層検出の赤褐色～暗赤褐色土のまとまりについて

B地区の沢地形部分を中心に赤褐色～暗赤褐色土のまとまりを多数検出した。いずれもV層中位の風倒木痕の黒色土中にあり、平面形や大きさの規格性はない。土の粘性・硬さは周囲の黒色土と変わらない。断面観察では、層界が波打ちあるいは不明瞭なものが多い。片側に潜り込む状態のものもある。周囲に炭化物や遺物の分布は見られない。昨年度の報告書(北埋調報第253集)Ⅵ章-2にある「擬似焼土」である。これらは、地下水の上昇や雨水の浸透・蒸発などの水分の挙動が他の場所と異なる条件のもとに土壌の風化・酸化作用により土色が変わったものと推定されている。(鎌田)



図Ⅲ-3 土層柱状模式図



図III-4 調査区土層柱状図

Ⅳ 第Ⅱ黒色土層の遺構とその遺物

第Ⅱ黒色土層から検出された遺構は、平地住居跡2軒、竪穴住居跡1軒、土坑16基、Tピット7基、焼土2か所、土器集中2か所である。時期は、平地住居は縄文時代後期中葉、竪穴住居は中期後半と考えられ、土坑は中期のものが多く、土器集中は後期中葉のものである。

遺物は、中・後期の土器片のほか、石鏃、石槍・ナイフ類、たたき石などが出ている。

なお、遺構の記述中、遺構の規模を示す計測値（単位m）は次の順で記した。

平地住居跡 柱穴間の遺構確認面の長径×短径

竪穴住居跡 遺構確認面の長径×短径/床面の長径×短径/深さ

土坑・Tピット・柱穴 遺構確認面の長径×短径/底面の長径×短径/深さ

焼土 遺構確認面の長径×短径×厚さ

土器集中 長径×短径（おおよその範囲）

1 住居跡

VH-1（図Ⅳ-3・4・23、表Ⅳ-2・3・5、図版3・16）

位置 K-85・86 立地 標高10.60～10.90m、祝梅川河岸の肩部付近にあたる
平面形 おおむね正方形（柱穴配列）規模 2.62×2.38m（柱穴間距離）

調査 K86区の包含層調査において、焼土および柱穴と見られる円形の黒色土を検出した。竪穴住居跡を想定して調査したが、土層断面観察では壁面の立ち上がりは確認できなかった。Ⅳ層上面まで掘り下げ、半截により柱穴確認を行った結果、炉と4本主柱穴・その他の柱穴・土坑で構成される平地住居跡と認定した。柱穴のうち1基は調査区外にあるものと想定される。また柱穴の配置と覆土の状況から、建て替えが行われたと推定される。遺物は床面付近とみられる位置から炭化材が出土し、遺構上位の包含層からⅣ群b類およびⅣ群c類土器がやや多く出土した。出土した炭化材の樹種は、トネリコ属とコナラ節が同定された（Ⅳ章1参照）。

付属遺構

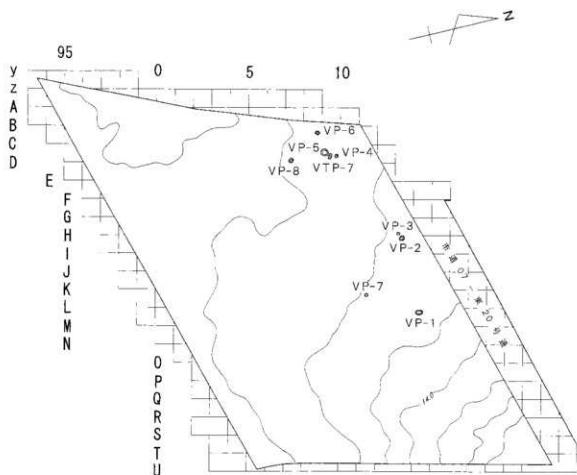
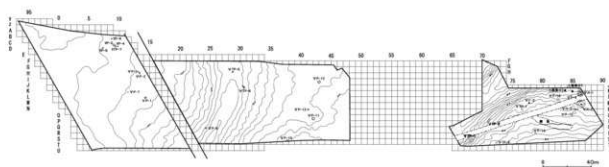
焼土 HF-1 Ⅳ層上面で検出した。住居跡のほぼ中央に位置する。平面形は円形に近い楕円形で、被熱層は最大12cmを測る。中心部は明度の高い赤褐色で、周縁部は漸遷する。強く被熱している様子がうかがえる。上面付近にわずかに炭化物を含む。

柱穴 HP-1～11 土坑2基・柱穴9基を検出した。HP-1は住居跡の南東部に位置するほぼ円形の土坑。上面から炭化材が出土した。住居の時期以前のものである可能性があるが、関連するものとして掲載した。HP-2-3-7とHP-10-3-4は大型の柱穴で、主柱穴と考えられる。HP-2-7の掘り方がやや崩れていることや覆土の状態から、前者が古く後者が新しいと推定される。HP-5-6は住居内、HP-8-9は住居外にあるが、用途は不明である。HP-11は浅い楕円形の土坑である。

時期 住居跡の構造が類似するVH-2の出土遺物などから、縄文時代後期中葉と思われる。なお、出土した炭化材2点の放射性炭素年代測定結果は、3,470±30、3,450±30という数値である（Ⅳ章2参照）。

（阿部）

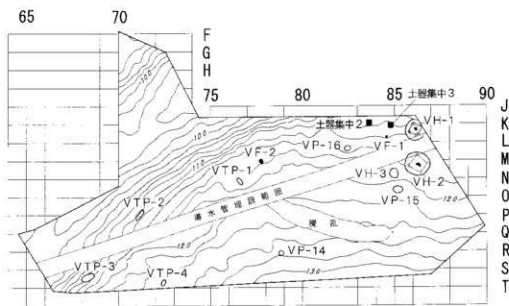
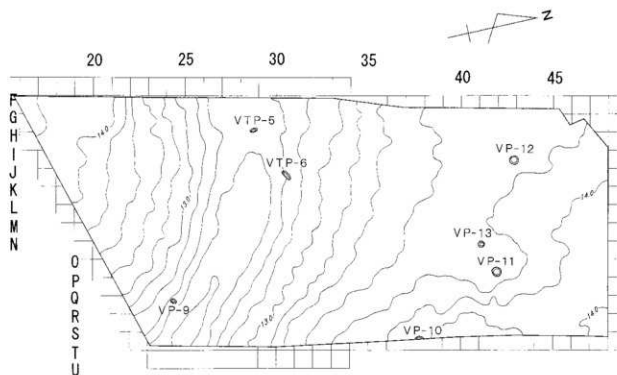
掲載遺物 石器：図Ⅳ-23-1 石鏃。



○● : 土坑(P)

0m 40m

図IV-1 遺構位置図(1)



- ○ : 土坑(P)
- ┌ : 住居跡(H)
- : 焼土
- : 土器集中

0m 40m

図Ⅳ-2 遺構位置図(2)

VH-2 (図Ⅳ-5・18・23、表Ⅳ-2～5、図版4・13・16)

位置 L86、M85・86 立地 標高11.30mの平坦面
 平面形 おおむね正方形(柱穴配列) 規模 3.75×3.50m(柱穴間距離)

調査 M86区の包含層調査において、焼土および柱穴と見られる円形の黒色土を検出した。竪穴住居跡を想定して調査したが、土層断面観察では壁面の立ち上がりは確認できなかった。Ⅵ層上面まで掘り下げ、半截により柱穴確認を行った結果、炉と4本主柱穴・その他の柱穴で構成される平地住居跡と認定した。遺物は床面より上位からⅣ群b類・Ⅳ群c類土器片などが少量出土し、床面付近の壁際と考えられる位置で炭化材が出土した。なお炭化材2点の樹種は、トネリコ属と同定された(Ⅳ章1参照)。

付属遺構

焼土 HF-1 中央付近に位置する。北東寄りに強い被熱層をもつ円形の焼土があり、南西寄りに弱い被熱層が拡大している。いずれも浅いくぼみを設けた上で焼成が行われており、上面はやや赤みを帯びた黒色土が覆っている。

柱穴 HP-1～6 HP-1～4は径30～40cm、深さは50cm前後を測り、坑底が平坦で掘り方をもつなど同様の構造である。方形を成し、主柱穴とみられる。HP-4はⅢ層の遺構ⅢP-55が重複しており、上半部が切られている。HP-5・6は補助的な柱穴と考えられるが、径20cm前後とやや大型である。

時期 出土土器や住居跡の構造から、縄文時代後期中葉と思われる。なお、出土した炭化材2点の放射性炭素年代測定結果は、3,520±30、3,410±30という数値である(Ⅳ章2参照)。(阿部)

掲載遺物 土器：図Ⅳ-18-1～3、石器：図Ⅳ-23-1 石槍・ナイフ類。

VH-3 (図Ⅳ-6・19、表Ⅳ-2～4、図版5・13・14)

位置 M84・85 立地 標高11.50～11.60mの平坦面
 平面形 ほぼ楕円形 規模 2.80×2.35/2.66×1.96/0.54m

調査 Ⅲ層の遺構ⅢP-124の調査において、壁面や坑底の状況からⅤ層以下に遺構があることが想定された。Ⅵ層上面に達したところで検出した。掘り下げたところ、平坦な底面と焼土、壁面の立ち上がりを検出し、住居跡と認定した。南東端部には約100×60cmほどの楕円形の浅い落ち込みがある。また北西端部は外側に張り出し、径40cmほどの円形の落ち込みがあり、その肩部から大型土器片が重なって出土した。周囲からも少量の遺物が出土している。柱穴は検出されなかった。なお東側の一部はⅢP-124の大部分が重複し、住居跡の底面を一部掘り込んでいる。

土層 覆土を8層に分層した。北西端部の落ち込みにしまりの弱い黒色土が堆積し(8層)、ロームを多く含む暗褐色土が壁面から床面を覆う(7層)。中位～上位は黒色土を主体とし、中位(4～6)は軽石の密度がやや高い。

付属遺構

焼土 HF-1 住居跡中央部にあり、54×35cmで楕円形を呈する。浅いくぼみに3cmほどの被熱層をもつ。赤褐色を呈し、やや硬質である。焼土上面から、30cmほど大型土器片が割れた状態で出土した。

時期 出土土器から、縄文時代中期後半柏木川式期とみられる。(阿部)

掲載遺物 土器：図Ⅳ-18-1a～1c、Ⅳ-19-2～4。

2 土坑

VP-1 (図Ⅳ-7、表Ⅳ-2・3、図版5)

位置 L14 立地 標高14.15m前後の平坦面

平面形 楕円形 規模 1.82×1.24/1.41×0.85/0.38m

調査 M層上面で黒色土の楕円形のまとまりを検出した。短軸方向で半截したところ、壁の立ち上がりが確認できた。底面はやや凹凸があり、壁は長軸方向で急角度に立ち上がり全周で明瞭である。

土層 11層に分層した。1層はV層を主体とした自然堆積層である。2～11層はV層・M層に恵庭aローム・軽石が混じる土であり、埋め戻しである。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代中期頃と判断できる。(遠藤)

VP-2 (図Ⅳ-7、表Ⅳ-2・3、図版5)

位置 G・H13 立地 標高14.15m前後の平坦面

平面形 円形 規模 1.17×1.17/0.80×0.74/0.23m

調査 M層上面で灰黄褐色土の円形のまとまりを検出した。南北方向に軸を取り半截したところ浅い土坑であることがわかった。底面は平坦で壁の立ち上がりは全周で緩やかである。

土層 4層に分層した。1層はM層が主体、2～4層はM層に恵庭a軽石層がわずかに混じる。いずれも自然堆積であろう。

時期 周辺から出土した遺物から縄文時代中期頃と判断できる。(遠藤)

VP-3 (図Ⅳ-7、表Ⅳ-2・3、図版6)

位置 G13 立地 標高14.15m前後の平坦面

平面形 円形 規模 0.74×0.72/0.62×0.50/0.25m

調査 VP-2の西側に近接してある。M層調査中に黒褐色土の円形の落ち込みとして検出した。底面は平坦である。底部の平面形は不整形で、壁は全周で急角度に立ち上がる。

土層 6層に分層した。1層はM層を主体とし、2～6層はM層に恵庭a軽石が混じる土で、混入の度合いが異なる。いずれも自然堆積であろう。

時期 周辺から出土した遺物から縄文時代中期頃と判断できる。(遠藤)

VP-4 (図Ⅳ-7・20・23、表Ⅳ-2～5、図版6・15・16)

位置 C9 立地 標高14.20m前後の平坦面

平面形 楕円形 規模 0.90×0.73/0.50×0.13/0.56m

調査 M層を掘り下げている段階で、恵庭a軽石が混じる黒褐色土の楕円形のまとまりを検出した。底部の平面形は細長い溝状で、短軸方向の壁は一部段状となっている。壁面の崩落によるものと見られる。また坑口部も崩落により大きく広がっている。最下部(10層)にV層である黒褐色土の堆積があることおよび近接しているVTP-7と規模、長軸方向がほぼ同じであることから小型のTピットである可能性がある。

土層 10層に分層した。1層と最下層(10層)はV層(黒褐色土)を主体とした自然堆積層。中位～下位は恵庭ローム層を主体とした土で、全体的に締まりがなく軟らかい。開口部や壁面の崩落土であろう。

時期 周辺から出土した土器から縄文時代中期末葉北筒式の時期に近い頃と判断できる。(遠藤)

掲載遺物 土器：図Ⅳ-20-1、石器：Ⅳ-23-1・2 たたき石。

VP-5 (図Ⅳ-8・20、表Ⅳ-2~4、図版6・15)

位置 C8・9 立地 標高14.30m前後の平坦面

平面形 隅丸方形 規模 1.99×1.82/1.49×1.45/0.30m

調査 包含層(V層)調査中、V層中位で縄文時代中期の土器片がまとまった状態で出土した。土器片を取り上げながらさらにⅣ層上面まで掘り下げ周辺部を精査したところ、径2mほどの円形に近い黒褐色土の広がりを検出した。東西方向に軸を取り半截したところ浅い土坑であることがわかった。底面は平坦で中央部がやや窪む。壁の立ち上がりは全周で緩やかで皿状を呈する。土器片は8層中のほぼ全域から出土している。また土坑底面中央から南側壁面にかけては炭化物が分布し、土器片の広がりと重なる(図Ⅳ-8)。柱穴や焼土は検出されていないが、形状等から判断し小型の住居跡の可能性もある。

土層 11層に分層した。1層はV層主体の自然堆積層。1~8層は恵庭aローム層が主体の軟質土、4層と8層は炭化物が混入する。土器片は8層中から集中して出土している。

時期 覆土から出土した土器から判断し、縄文時代中期末葉北筒式の時期と考えられる。(遠藤)

掲載遺物 土器：図Ⅳ-20-1~4。

VP-6 (図Ⅳ-9、表Ⅳ-2・3、図版6)

位置 B8 立地 標高14.28m前後の平坦面

平面形 長円形 規模 1.02×0.80/0.53×0.49/0.39m

調査 Ⅳ層上面で灰褐色土の長円形のまとまりを検出した。短軸方向で半截したところ壁の立ち上がり確認できた。底面は皿状で壁は短軸方向で急角度に立ち上がるが、北東側の長軸方向は緩やかである。

土層 9層に分層した。1~4層は恵庭aローム層とV層が不均一に混じる軟質土で、1層と4層にはわずかながら樽前d₂火山灰が混入する。

時期 周辺から出土した遺物から縄文時代中期頃と判断できる。(遠藤)

VP-7 (図Ⅳ-9、表Ⅳ-2・3、図版7)

位置 K11 立地 標高14.60m付近の平坦面

平面形 円形 規模 0.74×0.68/0.38×0.32/0.25m

調査 Ⅳ層上面で確認。壁が明瞭に立ち上がる。遺物は出土していない。

土層 V層起源の1層。自然堆積である。

時期 周辺の出土遺物から縄文時代中期と推測できる。(新家)

VP-8 (図Ⅳ-9、表Ⅳ-2・3、図版7)

位置 C7 立地 標高14.60m付近の平坦面

平面形 楕円形 規模 1.10×0.93/0.69×0.60/0.33m

調査 Ⅳ層上面で確認。坑底はやや平坦でない。遺物は出土していない。

土層 1～4層。V・Ⅳ層起源のものにEn-aの軽石が少量混入する。1層は自然堆積。2～4層は埋め戻しか。

時期 周辺の出土遺物から、縄文時代中期と思われる。(新家)

VP-9 (図Ⅳ-10、表Ⅳ-2・3、図版7)

位置 Q24 **立地** 標高12.20m付近の緩斜面

平面形 楕円形 **規模** 1.33×0.88/1.14×0.54/0.48m

調査 Ⅳ層上面で確認。確認面は小判形のTヒットに似るが、開口部に向かってすり鉢状に開く。浅い土坑であった。

土層 1～5層。1・2層はV層起源の自然堆積。3～5層はV・Ⅳ・En-a軽石が混ざり合い、埋め戻しの可能性がある。

時期 周辺の出土遺物より、縄文時代中期と思われる。(新家)

VP-10 (図Ⅳ-10・21、表Ⅳ-2～4、図版8・15)

位置 S37・38 **立地** 標高14.20m付近の緩斜面

平面形 円形? **規模** (2.74)×(1.12)/ (2.00)×(0.80)/0.56m

調査 V層調査中、調査区外にかかる半円形の黒色土の落ち込みを検出。平坦な底と明確な壁の立上りを持つ。規模や形状は小さな住居と仮定し、調査を進めた。しかし、内外に柱穴や焼土がなかったため、小型版のVP-13を検出した時点で、VP-10～13の4基を、住居跡ではなく土坑と認定した。坑底と覆土から土器片・礫片が数点出土している。

土層 一番上にV層が載る。1～7層はいずれも自然堆積。1層はV層よりも腐植が発達した黒味が強い。2・3・5・6層はV・Ⅳ層・En-a軽石が混ざり合う。4・7層は崩落土と思われる。堆積状況がVP-11～13に似る。

時期 坑底から出土した2点の縄文時代中期北筒式土器片と同時期と思われる。(新家)

掲載遺物 土器：図Ⅳ-21-1。

VP-11 (図Ⅳ-10、表Ⅳ-2・3、図版8)

位置 O41 **立地** 標高13.80m付近の平坦面

平面形 円形 **規模** 2.47×2.36/1.96×1.70/0.50m

調査 V層包含層調査中、円形の落ち込みを検出。中央にベルトを残し掘り下げたところ、平坦な坑底面と明確に立ち上がる壁を確認した。坑底と覆土から、土器片数点と礫等が出土した。内外に焼土や柱穴はなかった。

土層 堆積はVP-10・12・13と似る。最上位にV層があり、1層はV層より腐植が発達した黒味の強い層である。2層はⅣ層のロームブロック、3層はV層起源、4・5層は崩落土、6層はⅣ層のローム起源である。

時期 坑底より出土した土器片により、縄文時代中期北筒式に相当する時期と考えられる。(新家)

VP-12 (図Ⅳ-11、表Ⅳ-2・3、図版8)

位置 I42・43 **立地** 標高13.80mの平坦面

平面形 円形 **規模** 2.31×2.16/1.73×1.60/0.53m

調査 N層(Ta-c)除去後、V層が若干凹んでいるのを検出。ベルトを残して掘り下げ、平坦な坑底と明確に立ち上がる壁を確認。VP-10・11・13に類する土坑と判断した。坑底から土器片、黒曜石の剥片、覆土から泥岩の剥片、礫が出土した。内外に焼土、柱穴はなかった。

土層 最上位にV層があり、その下を2層に分層した。いずれも自然堆積である。

時期 出土した土器片から、縄文時代中期北筒式土器に相当する時期と思われる。(新家)

VP-13 (図Ⅳ-11、表Ⅳ-2・3、図版8)

位置 N41 **立地** 標高13.60mの平坦面

平面形 円形 **規模** 1.60×1.42/0.91×0.70/0.31m

調査 M層上面で確認。半載し掘り下げたところ、規模は一回り小さいが、VP-10～12に似る土坑と判断した。覆土から土器片が1点出土した。内外に焼土や柱穴はなかった。

土層 3層に分層。1層はV層よりも腐植が発達した黒味の強い自然堆積層。2・3層は崩落土である。

時期 出土土器片から、縄文時代中期北筒式土器の時期に相当すると考えられる。(新家)

VP-14 (図Ⅳ-11、表Ⅳ-2・3)

位置 R78 **立地** 標高12.50m前後の平坦面

平面形 ほぼ円形 **規模** 1.58×1.57/1.35×1.32/0.42m

調査 M層上面で円形の黒色土のまとまりを確認した。半載し掘り下げたところ、平坦な底面と壁面の立ち上がりを確認し、土坑と判断した。

土層 4層に分層した。V層を主体とする上位の1・2層は自然堆積と考えられる。下位の3・4層はロームや軽石をやや不均質に含む。

時期 縄文時代晩期後葉以前であるが、詳しい時期は不明である。(阿部)

VP-15 (図Ⅳ-12、表Ⅳ-2・3)

位置 N85 **立地** 標高11.80m前後の平坦面

平面形 おおむね楕円形 **規模** 2.66×1.90/2.36×1.56/0.33m

調査 M層上面で検出した。土層観察用のベルトを十字に残して掘り下げたところ、平坦な底面を検出し、緩やかな立ち上がりを確認し、土坑とした。北側はやや張り出している。H-3に近い位置にあり、形状・規模が近似している。しかし炉や柱穴は確認できなかった。H-3と同時期に存在した可能性があり、作業場や倉庫などとして利用された竪穴状遺構と考えられる。

土層 4層に分層した。下位(4層)や壁際(3層)ではやや軽石を多く含むものの全体的に均質的で、すべて自然堆積と考えられる。

時期 H-3と同時期の、縄文時代中期後半柏木川式期とみられる。(阿部)

VP-16 (図Ⅳ-12、表Ⅳ-2・3)

位置 L82 **立地** 標高11.40m前後の平坦面

平面形 楕円形 **規模** 1.40×1.13/0.90×0.70/0.50m

調査 N層(Ta-c)除去後、L82・83区においてV層が凹み周囲にEn-a軽石が広がる範囲を4か所検出した。土層観察用のベルトを残し、半載あるいは4分割して掘り下げたところ、3か所は

下位の層が逆転した大型の風倒木と判明した。残る1基は、平坦な底面を検出し壁面がやや急に立ち上がり、土坑と認定した。

土層 覆土を2層に分層した。上位はⅤ層を主体とし、軽石を少量含んでおり、自然堆積と考えられる。下位は黒色土が主体であるが、ロームがやや不均質に混じる。また、土坑周囲に軽石を多く含んだ掘上土とみられる堆積が5～10cmみられる。

時期 検出層位から縄文時代晩期と考えられる。(阿部)

3 Tピット

VTP-1 (図Ⅳ-13、表Ⅳ-1～3、図版9)

位置 N76 **立地** 標高11.50m前後の平坦部

平面形 長楕円形 **規模** 1.83×0.90/1.54×0.53/0.86m

調査 Ⅳ層上面にて約8×7mの範囲で軽石混じりの黒色土を検出した。竪穴住居等の遺構を想定して、観察用の溝を設定し掘り下げた。中央部付近のみにくぼみが現れ、半截したところⅣ層中にまで掘り込みが及び、形状からTピットと判断した。杭穴などの付属施設は確認されなかった。なお北東側では、ⅢP-252の一部がこのTピットを切っている。

土層 覆土を9層に分層した。最下層は暗褐色土で、以上は軽石主体の褐色土と軽石混じりの黒色土との互層になっている。また一部壁面崩落の跡が見られる。また上述の通り、周囲に掘上土が広く分布する。

時期 縄文時代晩期後葉以前であるが、詳しい時期は不明である。(阿部)

VTP-2 (図Ⅳ-13、表Ⅳ-1～3、図版9)

位置 O・P70・71 **立地** 標高10.90～11.10m、台地肩部の緩斜面上

平面形 長楕円形 **規模** 3.66×0.78/3.22×0.32/1.30m

調査 Ⅳ層上面で細長い黒色土の大きなまとまりを検出した。短軸にて半截したところ、Ⅳ層上面からさらに1m以上の深さとなり、狭長で平坦な底面を検出した。大型のTピットと判明した。壁面は急な立ち上がりで、崩落は少ないものと思われる。杭穴などの付属施設は確認されず、遺物は出土していない。

土層 覆土を8種13細分した。下位～中位はⅣ層の軽石を主体としたしまりのない層。粘質の黒色土の薄層と互層を成している。上位は黒色土を主体とし軽石が少量混じる。

時期 縄文時代晩期後葉以前であるが、詳しい時期は不明である。(阿部)

VTP-3 (図Ⅳ-14、表Ⅳ-1～3、図版9)

位置 S67・68 **立地** 標高10.90～11.30m、緩斜面上

平面形 長楕円形 **規模** 3.65×1.62/3.22×0.56/1.30m

調査 Ⅳ層上面で検出した。短軸にて半截したところ、Ⅳ層上面からさらに1m以上の深さとなり平坦な底面を検出し、Tピットと判断した。長軸両端部はオーバーハンクしている。短軸の断面形状はバケツ形で上位が大きく開口しており、壁面の崩落部分が大きいものと思われる。

土層 覆土を10種24細分した。下位～中位はⅣ層の軽石を主体とした層で、粘質の黒色土の薄層と互層を成している。中位は、壁面付近に崩落土と思われるしまりのない軽石層が多くみられる。上位は黒色土を主体とし軽石が少量混じる。

時期 縄文時代晩期後葉以前であるが、詳しい時期は不明である。(阿部)

VTP-4 (図Ⅳ-14、表Ⅳ-1～3、図版9)

位置 S72 **平面形** 楕円形 **規模** 1.40×1.16/1.00×0.44/1.38m

調査 Ⅲ層上面において、長軸約1.4mの楕円形の黒色土の拡がりを検出した。A-Bを土層観察用の断面として設定後、西側を半載し、断面観察の結果、Tピットと判断した。また、確認面の一部はⅢ層の遺構であるⅢP-476の底部に切られていた。

坑底は平坦、壁は外上方向き。構築面は坑底付近に堆積した黒色土からV層中と推測される。なお、坑底には杭穴と考えられる直径約5cm、深さ約10cmの小穴が2か所検出された。

土層 1～3・5・6層は流れ込み、他は壁の崩落等による堆積。

時期 縄文時代晩期後葉以前であるが、詳しい時期は不明である。(宗像)

VTP-5 (図Ⅳ-15、表Ⅳ-1～3、図版10)

位置 G2 **立地** 標高12.50mの緩斜面

平面形 楕円形 **規模** 1.80×0.84/1.25×0.35/1.14m

調査 Ⅳ層上面で長径約1.8mの楕円形をした黒色土の拡がりを検出したため、A-Bを土層観察用の断面として設定し、南側を半載した。土層観察の結果、Tピットと判断した。

長軸方向はN-2.5°-Wである。坑底は平坦で、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、坑口部付近で外へ広がるY字形である。構築面は覆土中にTa-c火山灰を含まないため、V層中と推測される。

土層 1層がV層の堆積、6層が壁の崩落による堆積、2～5・7層は流れ込みによる堆積である。

「古束分類」によると底面の長短比が4以下で杭跡がないことから、C1型に分類される。

時期 周辺の遺物から縄文時代中期に相当する時期と考えられる。(酒井)

VTP-6 (図Ⅳ-15、表Ⅳ-1～3、図版10)

位置 J30 **立地** 標高12.50mの緩斜面

平面形 細長い楕円形 **規模** 3.04×0.93/2.68×0.20/1.60m

調査 Ⅳ層上面でV層の落ち込みを風倒木と誤認し、削平した。短軸で半載し、坑底が細くすばまるタイプのTピットであることがわかった。杭穴や遺物はなかった。

土層 11層に分層。1層はV層起源の自然堆積層。上部を削平した。8層と10層は筋状に入るV層起源の層。他の層は全体にEn-a軽石やⅣ層のロームが入る。

時期 周辺の遺物から縄文時代中期北筒式土器に相当する時期と考えられる。(新家)

VTP-7 (図Ⅳ-16、表Ⅳ-1～3、図版10)

位置 C9 **立地** 標高14.25m前後の平坦面

平面形 長楕円形 **規模** (1.50) × (0.74) / 0.75 × 0.22 / 0.74m

調査 Ⅳ層上面で黒褐色の楕円形の落ち込みを検出した。半載したところ深さは1mに満たないが、土層堆積状況や形態から小型のTピットであると判断した。底面は凹凸が著しく底部の平面形は溝状である。長軸上の北西側坑口部は攪乱を受けており、また南東側の坑口部は大きく広がっている。後者は崩落によるものであろう。

土層 16層に分層した。1層と最下層(16層)はV層(黒褐色土)を主体とした自然堆積層。中位

は恵庭aローム層を主体とした黒色土の混じる締まりのない軟らかい土である。開口部や壁面の崩落土であろう。また、9層と13層にはわずかながら、樽前d₂火山灰が混入していた。15層は恵庭a軽石層が主体である。

時期 このTピットよりも古い西側の攪乱層から縄文時代中期末葉の北筒式が出土していることから北筒式土器の時期よりも新しいものと考えられる。(遠藤)

4 焼土

VF-1 (図Ⅳ-16、表Ⅳ-2・3、図版11)

位置 K84 **立地** 標高11.00m前後の平坦面

平面形 おおむね円形 **規模** 0.50×0.44×0.07m

特徴 やや明度の高い均質な焼土。周辺から遺物が多く出土している。

時期 周辺出土遺物から、縄文時代後期中葉とみられる。(阿部)

VF-2 (図Ⅳ-16、表Ⅳ-2・3、図版11)

位置 L・M77 **立地** 標高11.30m前後の平坦地

平面形 おおむね楕円形 **規模** 0.98×0.79×0.17m

特徴 木根跡とみられる、径2mに近い大きなくぼみ上にある。焼土の周囲は、ロームや軽石を多く含んだ黒色土が広がる。焼土中央部の上位から炭化材片が多量に出土した。中位～下位は均質的で明度が高く、長時間にわたり焼成されたものとみられる。なお炭化材3点の樹種は、トネリコ属・ハンノキ属の2種が同定された(Ⅴ章1参照)。

時期 周辺出土遺物から、縄文時代中期後半～後期中葉と思われる。なお、出土した炭化材1点の放射性炭素年代測定結果は、3,520±30という数値である(Ⅴ章2参照)。(阿部)

5 土器集中

土器集中2 (図Ⅳ-17・22、表Ⅳ-2～4、図版11・16)

位置 K84 **立地** 調査区北部、標高11.10m前後の平坦面

特徴 V層中位にて出土した。1.0×0.7mほどの範囲から188点の土器片が出土した。分布は平面的であるが、10cm程度の高低差がある。3～5cm角の土器片が主体で、10cm角程度のもも少数みられる。手稲式の複数個体の破片とみられる。

時期 縄文時代後期中葉である。

掲載遺物 土器：図Ⅳ-22-1 (阿部)

土器集中3 (図Ⅳ-17・22、表Ⅳ-2～4、図版11・16)

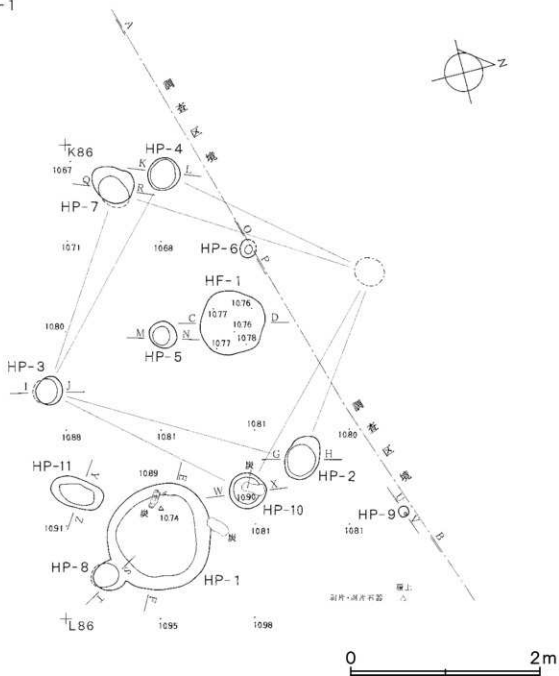
位置 J・K83 **立地** 調査区北部、標高11.00m前後の平坦面

特徴 V層中位にて出土した。1.2×0.9mほどの範囲から281点の土器片が出土した。分布は平面的であるが、15cm程度の高低差がある。土器集中2より破片が細かく、3cm角の土器片が主体で、10cm角程度のもも少数みられる。手稲式または鯉淵式の複数個体の破片とみられる。

時期 縄文時代後期中葉である。

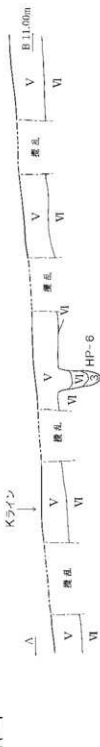
掲載遺物 土器：図Ⅳ-22-1 a～2 (阿部)

VH-1



図IV-3 住居跡(1)

VH-1



HP-1



HP-1



HP-2



HP-3



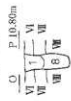
HP-4



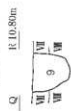
HP-5



HP-6



HP-7



HP-8



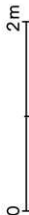
HP-9



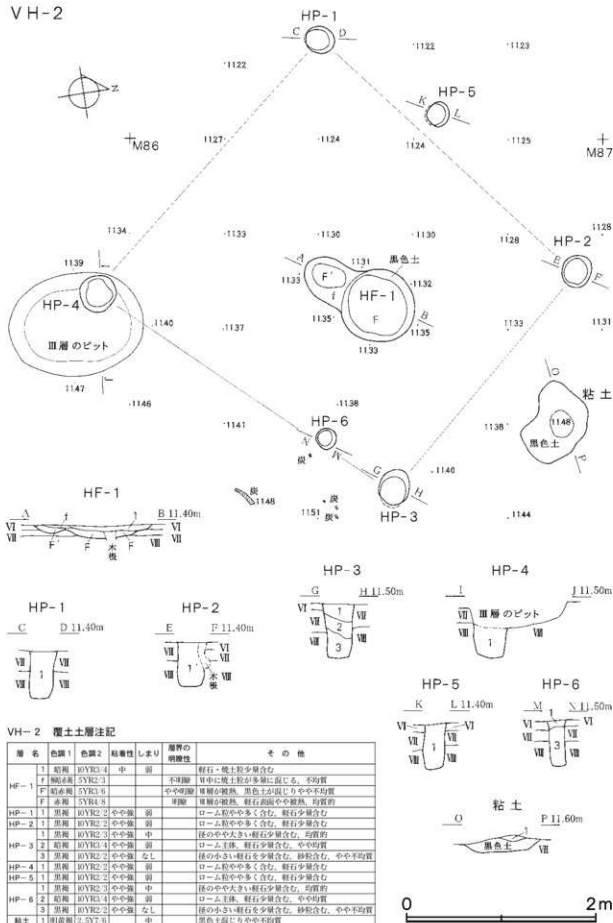
VH-1 層土層注記

層名	色層1	色層2	採取箇所	層厚の 明瞭性	その他
HP-1 F	IVB4.5	IVB4.5	IVB4.5	中	やや明瞭 黒色土や不分明に混じる。酸化物わずかに含む
HP-1 E	VI	明瞭	明瞭	明瞭	軽石が顕著。均質的。
HP-1 D	VI	明瞭	IVB4.5	中	軽石わずかに含む。灰化材料含む
HP-1 C	VI	明瞭	IVB4.5	中	軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-1 B	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石わずかに含む
HP-1 A	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-2 4	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-2 3	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-2 2	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-2 1	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-3 6	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-3 1	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-4 1	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-5 8	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-6 8	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-7 9	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-8 1	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-9 1	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-10 1	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-10 2	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-10 3	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む
HP-11 1	VI	明瞭	IVB4.5	中	V>VI, 軽石5~10mmの軽石を多量に含む

図IV-4 住居跡(2)



VH-2

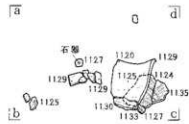
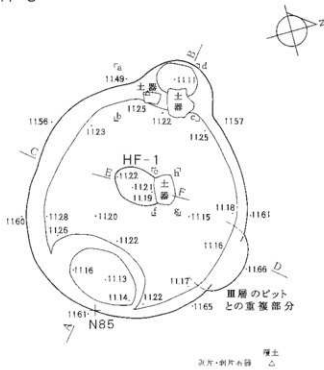


VH-2 覆土層注記

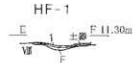
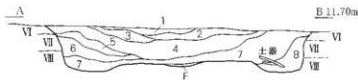
層名	色調1	色調2	粘着性	しまり	層厚の 明瞭性	その他
HP-1	1	黒褐色	中	弱		軽石・焼土粒少量含む
	f	黒褐色	弱	不明瞭		層中に焼土粒が多数に混入、不均質
HP-2	F	黒褐色	弱	不明瞭		層厚が不均質、軽石が混入、不均質
	F	黒褐色	弱	不明瞭		層厚が不均質、軽石が混入、不均質
HP-1	1	黒褐色	中	弱		層のやや大きい・軽石少量含む、均質的
HP-2	1	黒褐色	中	弱		層のやや大きい・軽石少量含む、均質的
HP-3	2	黒褐色	中	弱		層のやや大きい・軽石少量含む、均質的
HP-3	3	黒褐色	中	弱		層のやや大きい・軽石少量含む、均質的
HP-4	1	黒褐色	中	弱		層のやや大きい・軽石少量含む、均質的
HP-5	1	黒褐色	中	弱		層のやや大きい・軽石少量含む、均質的
HP-6	1	黒褐色	中	弱		層のやや大きい・軽石少量含む、均質的
粘土	1	明褐色	中	弱		黒色土に混じりや不均質

図IV-5 住居跡(3)

VH-3



S = 1:20

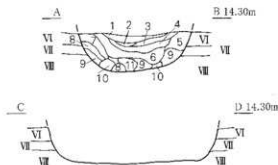
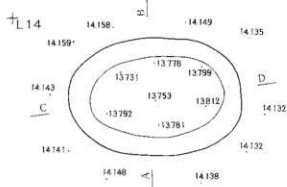


VH-3 覆土土層注記

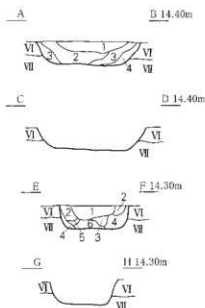
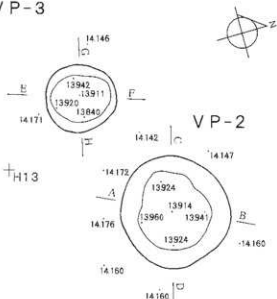
層名	色調1	色調2	粘着性	しまり	層界の明瞭性	その他
1	黒	10YR1.7/1	中	中	V	軽石わずかに含む
2	暗褐	10YR3.4/4	中	やや弱	M+重	径のやや大きい軽石を少量含む
3	黒褐	10YR3.2/2	中	中	V>重	軽石少量含む
4	黒	10YR1.7/1	中	中	V>重	径5~20mmの軽石を10%含む。土層下部に多い。やや不均質
5	暗褐	10YR3.3/3	やや強	やや弱	M+重	径5~10mmの軽石を10~20%含む。Ta-d含む
6	黒褐	10YR2.3/3	やや強	やや弱	M>重	径5~20mmの軽石10~20%含む。やや不均質
7	暗褐	10YR3.3/3	やや弱	やや弱	M+重	径5~20mmの軽石10%程度含む。やや不均質
8	黒褐	10YR3.2/2	やや強	やや弱	V+重	軽石少量含む
1	黒褐	7.5YR3.2/2	やや強	やや弱	やや明瞭	焼土粒や多量含む。不均質
HF-1	F	赤褐色	5YR4.6/6	やや弱	やや明瞭	焼土が焼熱。軽石の表面から内部の一部が焼熱

図IV-6 住居跡(4)

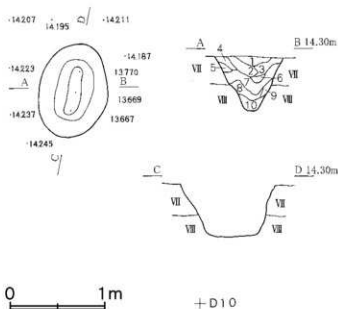
VP-1



VP-3



VP-4

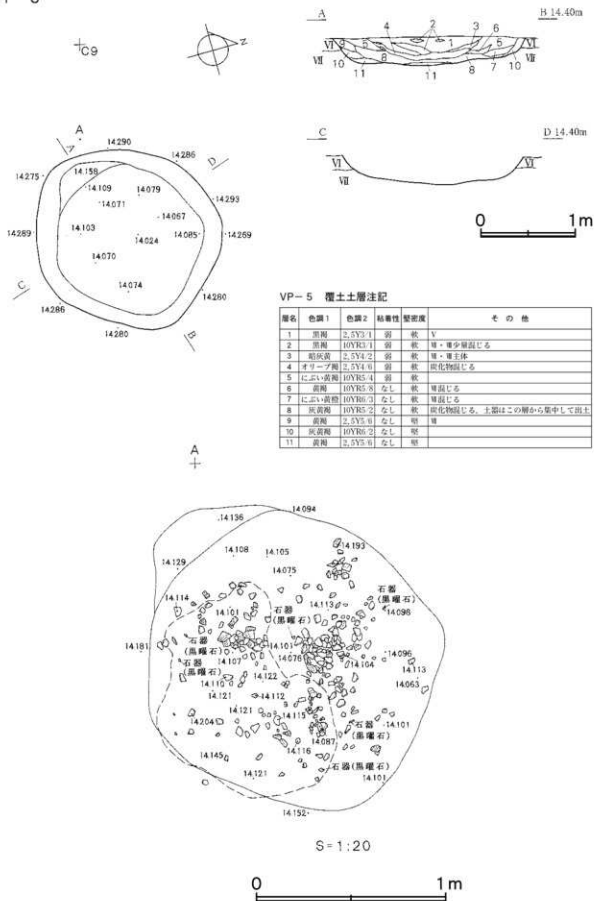


VP-1~4 覆土層注記

層名	色調1	色調2	粘着性	堅密度	その他
VP-1	1	黒	7.5YR2/1	あり	軟 V
	2	黒褐色	7.5YR2/2	あり	軟 少量少凝結する
	3	黄褐色	2.5Y3/6	あり	軟 凝結する
	4	暗褐色	10YR3/4	あり	軟 3より黒褐色土多し
	5	黒	10YR4/4	あり	軟 凝結する
	6	にぶい黄褐色	2.5Y4/6	あり	軟 凝結する
	7	オリーブ褐色	2.5Y4/6	あり	軟 凝結する
	8	黄褐色	2.5Y5/8	あり	軟 凝結する
	9	明黄褐色	2.5Y6/8	なし	軟 凝結する
	10	灰黄褐色	10YR4/2	なし	軟 凝結する
VP-2	11	にぶい黄褐色	10YR4/4	なし	硬 V+III
	12	灰黄褐色	10YR4/2	なし	軟 凝結する
VP-3	1	黒	5YR3/1	なし	軟 凝結する
	2	暗灰褐色	2.5Y4/2	なし	軟 凝結する
VP-4	1	黒	5YR3/1	あり	軟 凝結する
	2	暗灰褐色	2.5Y4/2	なし	硬 V+III
VP-4	3	灰黄褐色	10YR4/2	あり	軟 凝結する
	4	にぶい黄褐色	10YR4/3	あり	軟 凝結する
	5	黄褐色	10YR5/8	あり	軟 凝結する
	6	黄褐色	2.5Y3/4	あり	軟 凝結する
	7	オリーブ褐色	2.5Y4/3	あり	軟 凝結する
	8	明黄褐色	2.5Y5/8	なし	硬 凝結する
	9	灰黄褐色	10YR4/2	あり	軟 凝結する
	10	黒	5YR3/1	あり	硬 V+III

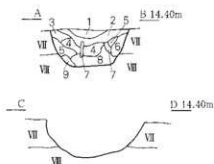
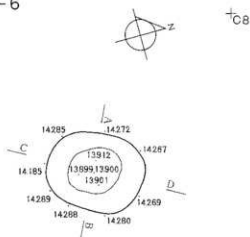
図IV-7 土坑(1)

VP-5



図Ⅳ-8 土坑(2)

VP-6

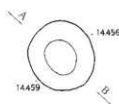


VP-6 覆土層注記

層名	色調1	色調2	粘着性	堅密度	その他
1	灰褐色	7.5YR4/2	弱	軟	V=III, Ta-d, 粒混じる
2	灰褐色	7.5YR5/2	弱	軟	
3	明黄褐色	10YR6/8	弱	軟	III>V
4	灰褐色	2.5Y6/2	弱	軟	Ta-d, 粒混じる
5	明黄褐色	2.5Y6/8	なし	堅	III
6	明黄褐色	2.5Y6/8	なし	堅	
7	黒褐色	2.5Y3/1	なし	堅	
8	黄褐色	2.5Y5/8	なし	堅	III

VP-7

K11

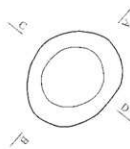


VP-7 覆土層注記

層名	土性	色調1	色調2	粘着性	堅密度	境界の明確性	境界の起伏	その他
1	粘壤土	黒	10YR1/7.1	強	軟	明瞭	平坦	V

VP-8

D7



VP-8 覆土層注記

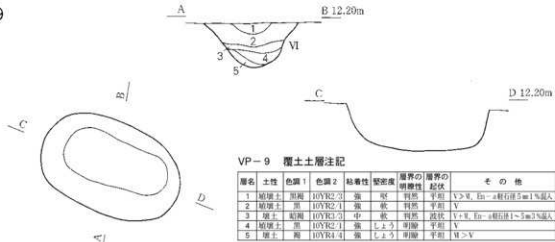
層名	土性	色調1	色調2	粘着性	堅密度	境界の明確性	境界の起伏	その他
1	粘壤土	黒	10YR1/7.1	強	軟	明瞭	平坦	V
2	粘壤土	粘褐色	10YR3/4	強	軟	明瞭	波状	II, En-a 軽石5%混入
3	粘壤土	黒	10YR2/1	強	堅	明瞭	波状	V
4	粘壤土	黄褐色	10YR2/3	強	堅	明瞭	平坦	V+III, En-a 軽石1%混入



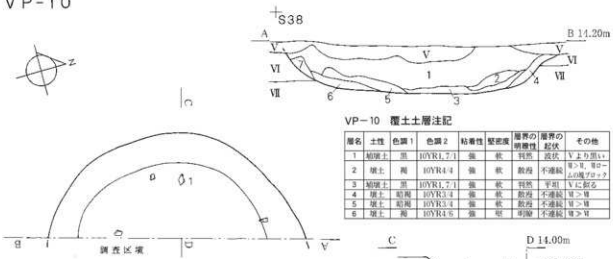
図IV-9 土坑(3)

VP-9

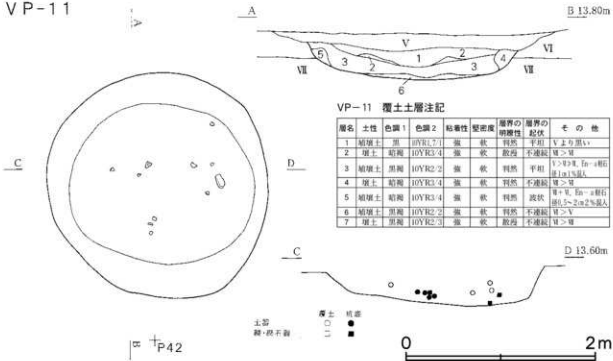
+Q24



VP-10

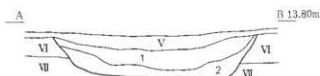
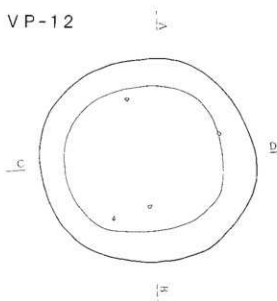


VP-11



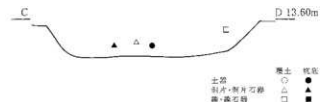
図Ⅳ-10 土坑(4)

VP-12



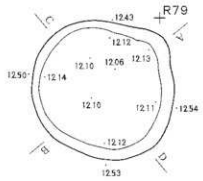
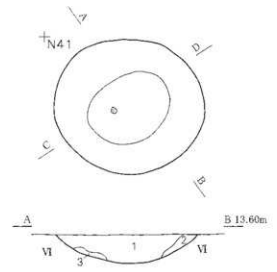
VP-12 覆土層注記

層名	土性	色調1	色調2	粘着性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	粘壤土	黒	10YR1.7/1	強	軟	明瞭	平坦	Vより深い
2	粘壤土	黒	10YR2.1	強	軟	明瞭	平坦	V>R, E ₀ -a 軽石10%~15%混入

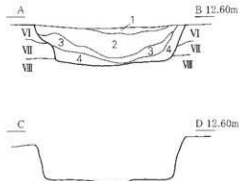


†J43

VP-13



VP-14



VP-13 覆土層注記

層名	土性	色調1	色調2	粘着性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	その他
1	粘壤土	黒	10YR1.7/1	強	軟	明瞭	平坦	Vより深い
2	粘壤土	黒	10YR2.2	強	軟	明瞭	不連続	V>R
3	壤土	粘	10YR3.4	強	軟	明瞭	不連続	R>V



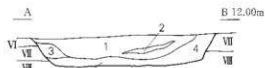
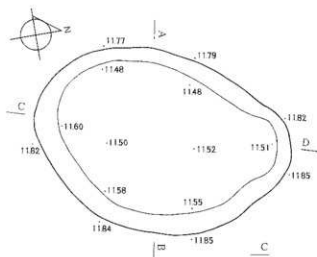
VP-14 覆土層注記

層名	色調1	色調2	粘着性	堅密度	その他
1	黒	10YR2.2	やや強	中	V>R, 径5~20mmの軽石10%程度含む, 中平均質的, 細かいローム粒子を多く含む
2	黒	10YR2.1	やや強	中	V, 軽石わずかに含む
3	黒	10YR2.1	やや強	中	V>R, 径5~20mmの軽石20%含む, 中平均質
4	粘	10YR3.4	やや強	やや強	R+R, 径5~20mmの軽石10~20%含む, 不均質



図IV-11 土坑(5)

VP-15



VP-15 覆土層注記

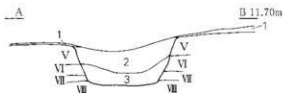
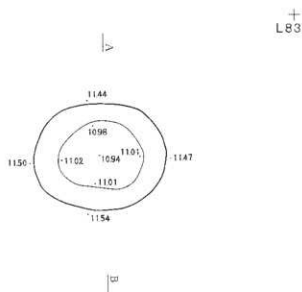
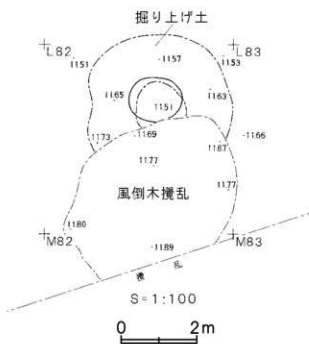
層名	色調1	色調2	粘着性	しまり	その他
1	黒	10YR1.7/1	やや強	中	V、軽石わずかに含む
2	黒相	10YR2.2	やや強	やや弱	V>III、軽石少量含む、細か〜ローム粒子を均質に含む
3	暗相	10YR3.4	やや強	やや弱	III+IV、軽石わずかに含む、均質的
4	黒相	10YR2.3	強	中	III>IV、径のやや大きい軽石を少量含む、均質的



+085



VP-16



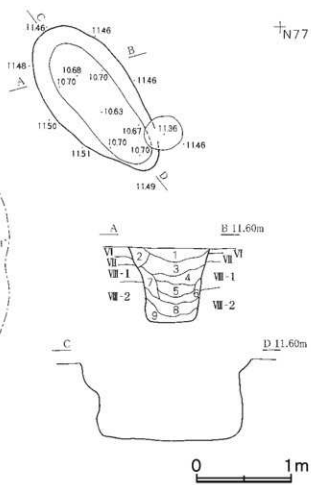
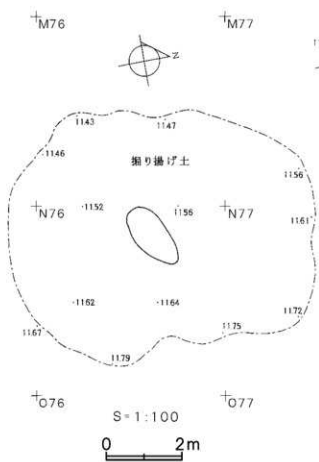
VP-16 覆土層注記

層名	色調1	色調2	粘着性	しまり	その他
1	黒	10YR2.1	やや強	中	掘り上げ土・風倒木、径2〜20mmの軽石20〜50%含む
2	黒	10YR1.7/1	やや強	中	V>III、軽石少量含む、均質的
3	黒相	10YR2.2	やや強	やや弱	III>IV、黒色土・ロームがやや不可視に混じる、径5〜10mmの軽石10%以下

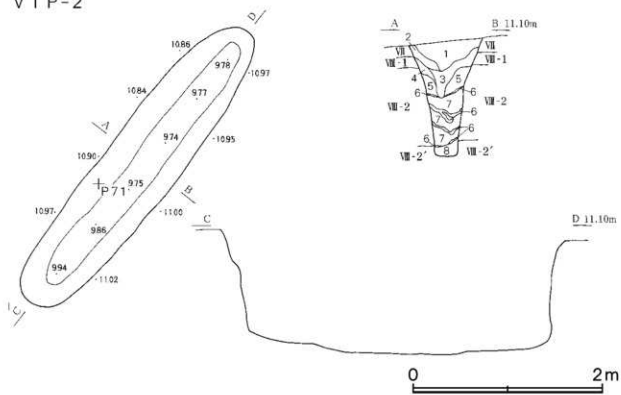


図IV-12 土坑(6)

VTP-1

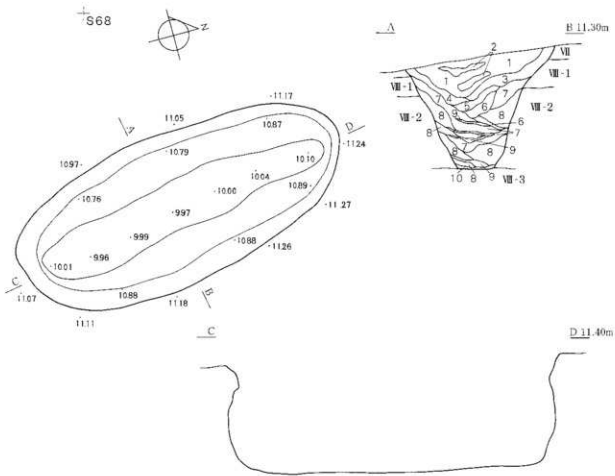


VTP-2

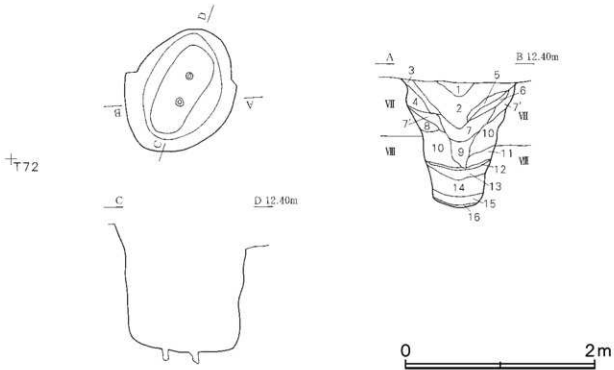


図IV-13 Tピット(1)

VTP-3

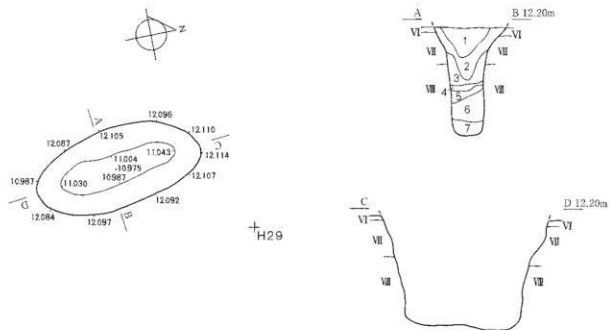


VTP-4



図IV-14 Tピット(2)

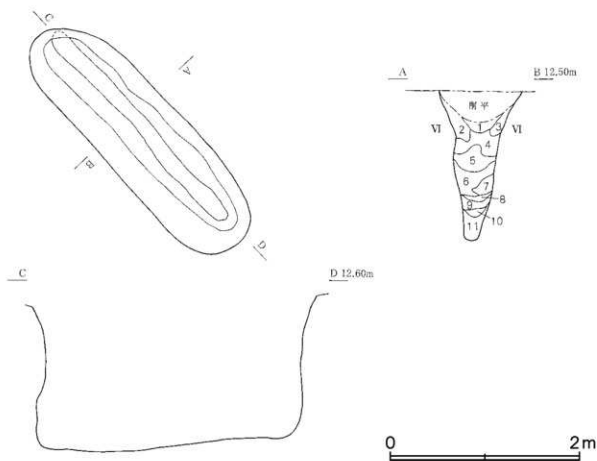
VTP-5



†H29

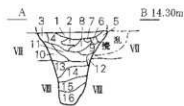
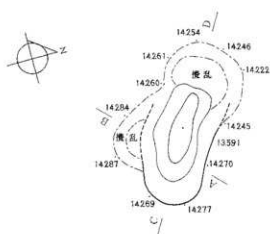
†J31

VTP-6



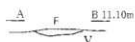
図IV-15 Tピット(3)

VTP-7



†D9

VF-1

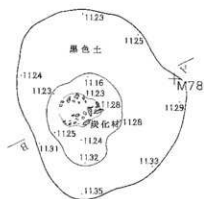


VF-1 焼土土層注記

層名	色調1	色調2	層界の明瞭性	その他
F	赤褐色	5YR4.3	やや明瞭	周辺無縁的、中心均質的

†L85

VF-2



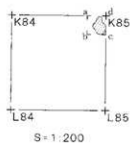
VF-2 焼土土層注記

層名	色調1	色調2	層界の明瞭性	その他
F	暗赤褐色	5YR3.6	やや明瞭	やや不均質、炭化材を多量含む
F	暗赤褐色	5YR5.3	明瞭	均質的、径5~10mmの軽石や中多含む、軽石表面焼黒

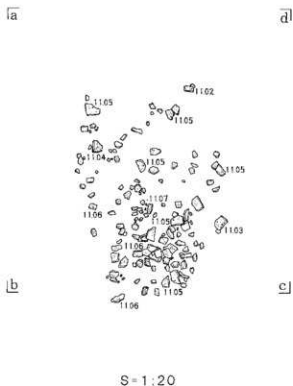
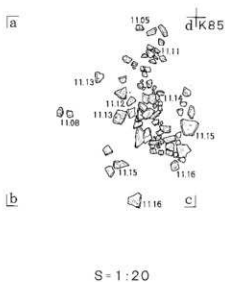


図IV-16 Tビット(4)・焼土

土器集中2



土器集中3



図Ⅳ-17 土器集中

表IV-2 検出遺構一覧

遺構名	挿図 No.	図版 No.	調査区	規模(m)			時期 (縄文時代)	備考		
				確認面の長径×短径	床・底面の長径×短径	深さ厚さ				
住居跡	VH-1	N-3-4	3, 16	K85 K86	2.62×2.38	(柱穴間の距離)		H19阿部、 C14年代測定、 樹種同定		
	HF-1	N-3-4	3		0.76×0.76		0.12			
	HP-1	N-3-4	3		1.16×1.10	0.90×0.87	0.32			
	HP-2	N-3-4			0.48×0.36	0.33×0.29	0.54			
	HP-3	N-3-4	3		0.30×0.28	0.26×0.25	0.57			
	HP-4	N-3-4	3		0.35×0.33	0.32×0.27	0.45			
	HP-5	N-3-4			0.31×0.28	0.20×0.18	0.37			
	HP-6	N-3-4			0.19×(0.13)	0.08×0.08	0.48			
	HP-7	N-3-4			0.48×0.40	0.38×0.27	0.40			
	HP-8	N-3-4			(0.33)×0.31	0.30×0.26	0.20			
	HP-9	N-3-4			0.12×0.11	0.03×0.03	0.28			
HP-10	N-3-4		0.40×0.38	0.28×0.27	0.41					
HP-11	N-3-4		0.57×0.30	0.40×0.22	0.19	後期中葉				
住居跡	VH-2	N-5	4,13,16	L.86 M85 M86	3.75×3.50	(柱穴間の距離)		H19阿部、 C14年代測定、 樹種同定		
	HF-1	N-5	4		1.22×0.66		0.12			
	HP-1	N-5	4		0.30×0.30	0.26×0.22	0.50			
	HP-2	N-5			0.34×0.30	0.27×0.24	0.47			
	HP-3	N-5	4		0.38×0.32	0.33×0.27	0.58			
	HP-4	N-5			(0.40)×(0.38)	0.29×0.27	0.52			
	HP-5	N-5			0.26×0.24	0.24×0.22	0.49			
	HP-6	N-5			0.22×0.22	0.17×0.15	0.49			
	VH-3	N-6	5,13,14		M84-85	2.80×2.35	2.66×1.96		0.54	中期後半
	HF-1	N-6	5		M84-85	0.54×0.35			0.05	H19阿部
	土坑	VP-1	N-7		5	L.14	1.82×1.24		1.41×0.85	0.38
VP-2		N-7	5	G・H13	1.17×1.17	0.80×0.74	0.23			
VP-3		N-7	6	G13	0.74×0.72	0.62×0.50	0.25			
VP-4		N-7	6,15,16	C.9	0.90×0.73	0.50×0.13	0.56	中期末葉		
VP-5		N-8	6, 15	C.8・9	1.99×1.82	1.49×1.45	0.30			
VP-6		N-9	6	B.8	1.02×0.80	0.53×0.49	0.39	中期		
VP-7		N-9	7	K11	0.74×0.68	0.38×0.32	0.25			
VP-8		N-9	7	C.7	1.10×0.93	0.69×0.60	0.33			
VP-9		N-10	7	Q24	1.33×0.88	1.14×0.54	0.48	中期末葉	H20新家	
VP-10		N-10	8, 15	S37-38	(2.74)×(1.12)	(2.00)×(0.80)	0.56			
VP-11		N-10	8	O41	2.47×2.36	1.96×1.70	0.50			
VP-12		N-11	8	I.42-43	2.31×2.16	1.73×1.60	0.53			
VP-13		N-11	8	N41	1.60×1.42	0.91×0.70	0.31			
VP-14		N-11		R78	1.58×1.57	1.35×1.32	0.42			晩期後葉以前
VP-15		N-12		N85	2.66×1.90	2.36×1.56	0.33			中期後半
VP-16	N-12		L.82	1.40×1.13	0.90×0.70	0.50	晩期			
Tピット	VTP-1	N-13	9	N76	1.83×0.90	1.54×0.53	0.86	晩期後葉以前	H19阿部	
	VTP-2	N-13	9	O・P70-71	3.66×0.78	3.22×0.32	1.30			
	VTP-3	N-14	9	S67-68	3.65×1.62	3.22×0.56	1.30	中期末葉?	H19宗像 H19酒井 H20新家	
	VTP-4	N-14	9	S72	1.40×1.16	1.00×0.44	1.38			
	VTP-5	N-15	10	G28	1.80×0.84	1.25×0.35	1.14			
	VTP-6	N-15	10	J.30	3.04×0.93	2.68×0.20	1.60			
	VTP-7	N-16	10	C.9	(1.50)×(0.74)	0.75×0.22	0.74	中期末葉より新しい		
焼土	VF-1	N-16	11	K84	0.50×0.44		0.07	後期中葉	H19阿部	
	VF-2	N-16	11	L・M77	0.98×0.79		0.17	中期後半～ 後期中葉	H19阿部、 C14年代測定、 樹種同定	
土器集中	土器集中2	N-17	11, 16	K84	約1.0×0.7			後期中葉	H19阿部	
	土器集中3	N-17	11, 16	J・K83	約1.2×0.9					

表Ⅳ-3 遺構出土遺物点数一覧

遺構名	分類 層位	土器					土器計	石器						総計		
		Ⅲb	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	不明		石鏃	石槍・ナイフ類	石核	刮片	石斧原材	たつき石		原石	礫・礫片
VH-1	覆土									108				1	109	109
	HP-1 覆土				1		1									1
	HP-1 覆土中位							1			13				14	14
	HP-6 覆土									1					1	1
	HF-2 焼土上面										2				2	2
	計				1		1	1	1	123			1	126	127	
VH-2	覆土			4	18		22			2				2	24	
	覆土下位			3	2		5	1	1					2	7	
	計			7	20		27	1	3					4	31	
VH-3	覆土									1				1	1	
	覆土最下層	48					48			1				1	49	
	床面直上	159					159								159	
	HP-1 坑底	3					3								3	
	計	210					210		2					2	212	
VP-1	覆土								1					1	1	
VP-2	覆土								3					3	3	
VP-4	覆土	7					7		1		2			3	10	
VP-5	坑口部	10					10			12					12	22
	覆土	7					7	1		22					23	30
	覆土1	44					44			27					27	71
	覆土8	333					333			31					31	364
	計	401					401	1	92						93	494
VP-10	覆土	2					2			6				1	7	9
	底	2					2									2
	計	4					4			6				1	7	11
VP-11	覆土	4					4	1	1					2	6	
	底	4					4				1			2	7	
	計	8					8	1	1	1				2	5	13
VP-12	覆土									4				1	5	5
	底	1					1			1				1	2	
	計	1					1			5				1	6	7
VP-13	覆土	2					2			1				1	3	
VP-15	覆土下位													1	1	1
VP-16	覆土1					1	1								1	
VTP-1	覆土上位					1	1								1	
土器集中2	V			188			188									188
土器集中3	V		1	280			281									281
VF-2	焼土中			1			1									1
総計		633	2,475	21	2,1,133	1	3	1	238	1	2	1	5	252	1,385	

6 遺構出土の遺物

(1) 土器

VH-2 (図IV-18、表IV-4、図版13)

1はIV群a-3類。入江式の胴部片。磨消と帯縄文で角形の渦巻文様を構成するもので、帯縄文の端部は鉤状をなしている。覆土1の出土であり、流れ込みの可能性が考えられる。

2・3はIV群c-1類。堂林式。2は口縁部片。口唇断面が切り出し状を呈し、内側が肥厚する。平行沈線が3条巡り、沈線間に突瘤が付されている。地文は羽状縄文。精製された胎土である。3はやや上げ底気味の底部片。2・3とも覆土下位の出土。胎土中に黒色の微細な鉱物片を多く含む。

VH-3 (図IV-18・19、表IV-4、図版13・14)

図示した土器はすべてⅢ群b類、柏木川式である。

1は覆土5および覆土下で出土したもの。肥厚帯が口縁部を巡り、数条の平行沈線が横環する。平行沈線は不整で、場所により数が一定しないが、5条を基調とする。1番上の沈線は肥厚帯上、次の沈線は肥厚帯下を縁取るように巡る。地文はLR斜行縄文。胎土は砂質で、全体的に器面の剥落が著しい。1a・1bは口縁部片。1aは口縁に粘土帯を2本貼付け、逆U字の貼付帯を施したもの。口唇上と、貼付帯上には刻みと刺突が加えられている。1cは胴部片。

2・3は覆土下で出土したもの。2は胴部がやや膨らみ、口縁部が開く器形。頸部に貼付帯が1条横環し、円形の凹み穴が連続的に横環する。この凹み穴はそれぞれ左右から粘土を削り取って作出したとみられる。凹みの中心に縦位の線が残っている。口唇上は径5mmの中空工具による刺突文を充填している。地文はLR斜行縄文。胎土は砂質。3は胴部片。地文はLR斜行縄文。焼きしまった土器である。内面はナデ調整。鈍い光沢がある。

4はHP-1から出土したもの。山形の突起を持つ。口縁部をバンド状の薄い貼付帯が横環し、口唇上、貼付帯上、貼付下を中空の工具による連続的な刺突列が巡る。貼付、刺突とも山形の波頂部に向けてハの字に収束している。胴部は3条の沈線が横環する。肥厚帯を縁取る刺突列と、沈線の間は縦位の沈線が密に引かれている。この縦位の沈線は山形の突起下において密であるが、波頂部をなさない右側にも少し続いており、変則的である。地文はLR斜行縄文であるが、縦位の沈線を密に施している周辺は横走しており、沈線と縄文が縦横に交差する意匠となっている。内面はナデにより、一部鈍い光沢を呈する。胎土はやや砂質。白色岩片と繊維を含む。

VP-4 (図IV-20、表IV-4、図版15)

1はⅢ群b類、北筒Ⅱ式(トコロ6類)。口唇断面は角形。網目状の捺糸文を地文とし、口唇上にはヘラ状工具による押引が施されている。胎土に砂礫と繊維を含んでおり、チャート質の赤い砂粒も観察される。

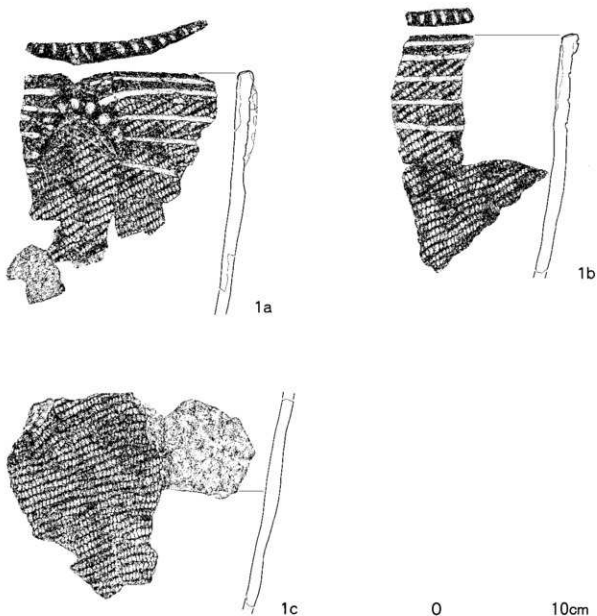
VP-5 (図IV-20、表IV-4、図版15)

すべてⅢ群b類、北筒Ⅱ式(トコロ6類)。いずれも覆土8出土破片を主体とする。1・2は口縁部片。いずれも綾線斜行縄文を地文とする。1は貼付上に押引文を2段横環させ、押引間に綾線文を付す。口唇上にも押引が施されている。胎土中に白色岩片を含む。2は山形の波頂部から半截竹管状工具による垂直方向の刺突が加えられたもの。口唇上には半截竹管状工具による刺突文が充填されている。口唇内面にも縄文を施文しているが、横方向のヘラ削りでほとんど消失している。胎土は砂質。

VH-2

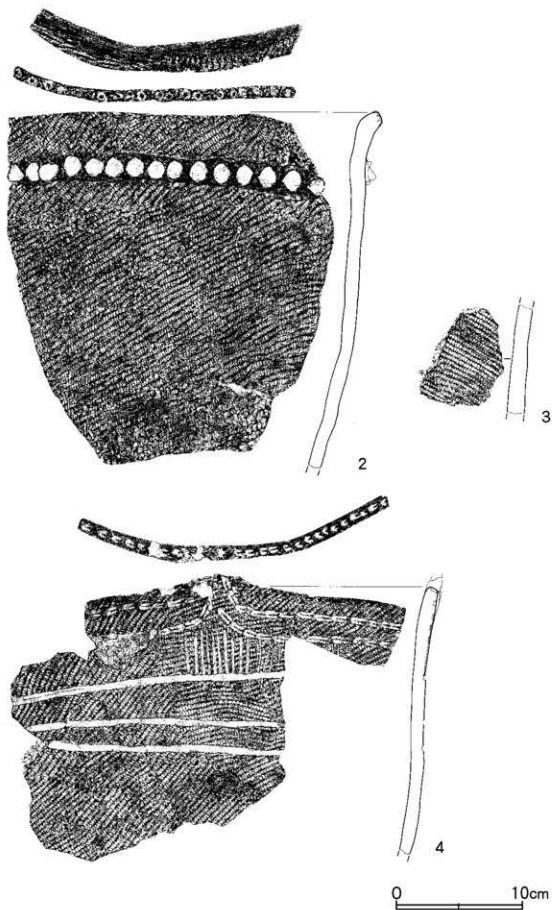


VH-3

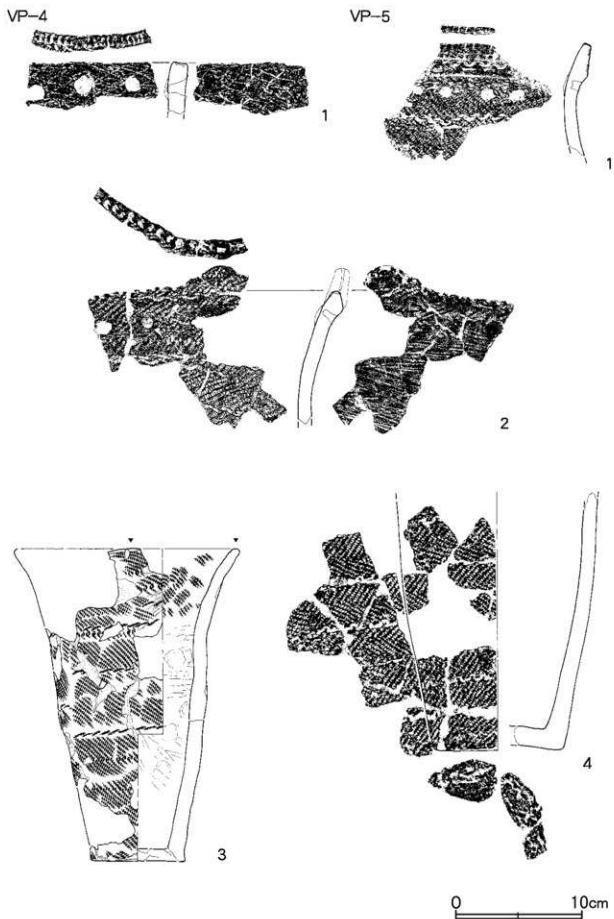


図Ⅳ-18 住居跡出土の土器(1)

VH-3



図IV-19 住居跡出土の土器(2)



図Ⅳ-20 土坑出土の土器(1)

繊維も若干含む。3は肥厚帯を持たない。頸部を境にして口縁部が開く。口唇断面は丸みを帯びる。円形刺突文は施されていない。口縁部内面には縄文が施文されている。地文はRL原体による結束と綾線の斜行縄文を基調とするが、部分的にLR原体の斜行縄文も施されている。また、原体の施文方向がやや不規則で、二重三重に施文された部位もある。器面調整は内外面共に指頭圧痕が顕著で、弱いナデ調整も観察される。このため縄文は一部が不規則に消失している。胎土に繊維を含み、赤褐色を呈する。4は筒形の土器。下半部のみを復元。地文は綾線斜行縄文を基調とするが、部分的に羽文を呈しているところもある。胎土は角閃石や長石等の黒色鉱物、砂粒を多く含む。

同一遺構、同一覆土内出土の北筒式であるが、胎土、器形、文様等それぞれ異なった特徴を持つ資料である。

VP-10 (図IV-21、表IV-4、図版15)

1はⅢ群b類、北筒Ⅱ式(トコロ6類)。山形の肥厚帯を持つ口縁部片。口唇断面は角形。口唇部の上面観は多角形をなすと考えられる。口縁部肥厚帯には2段の押引文が巡る。押引文は口唇上にも施されている。斜行縄文が内外面に施されている。色調は黒色を呈し、焼きしまって硬い。

土器集中2 (図IV-22、表IV-4、図版16)

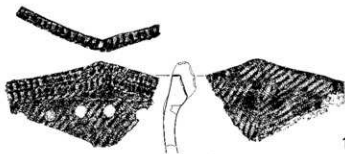
1はⅣ群b-2類。手稲式。RL原体の斜行縄文が施された深鉢である。口唇断面がやや肥厚し、丸みを帯びた角形で、底部付近は縄文を施文していない。頸部に段を持ち、口縁部にかけて垂直に立ち上がる器形。内面調整は屈曲部までの胴部下半が垂直方向、口縁部が水平方向である。

土器集中3 (図IV-22、表IV-4、図版16)

いずれもⅣ群b-3類、甕潤式。1は大型の深鉢。頸部が屈曲する器形。1aは口縁部片、1bは胴部片。口唇断面はやや丸みを帯びた角形。口唇沿いと、屈曲部を巡る沈線下に斜位の太刻み列を施している。地文はLR原体とRL原体の斜行縄文。胎土中に砂粒と、微量の白色岩片、繊維を含む。2は頸部破片。沈線を横位に巡らせ、その下部に先端の鋭い工具による弧線文を充填させている。

(影浦)

VP-10

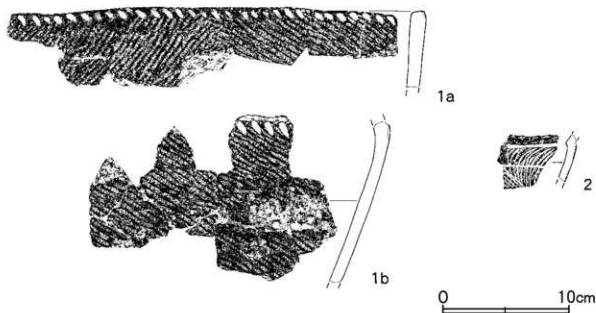


図IV-21 土坑出土の土器(2)

土器集中2



土器集中3



図Ⅳ-22 土器集中の土器

(2) 石器

VH-1 (図IV-23、表IV-5、図版16)

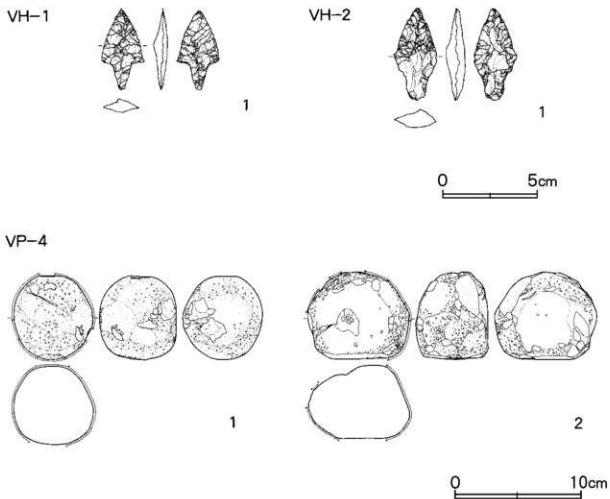
1は黒曜石の石鏃である。有茎で、先端が少し欠けている。VH-1の付属施設、HP-1から出土している。

VH-2 (図IV-23、表IV-5、図版16)

1は黒曜石の石槍である。有茎で、剥離調整が粗く、未成品である。

VP-4 (図IV-23、表IV-5、図版16)

1は玄武岩製、2は砂岩製のたたき石である。握りこぶし大の礫の周縁をたたいている。同じようなたたき石は、包含層からも25点出土している。(新家)



図IV-23 遺構出土の石器

表Ⅳ-4 遺構出土掲載土器一覧

挿図 番号	掲載 番号	図版 番号	遺構(発掘区)	層位	遺物 番号	点数	接合 点数	分類	部位	整理 番号	出土 年度
Ⅳ-18	1	13	VH-2	覆土	8	2	2	Ⅳa	胴部	拓A-1	H19年
Ⅳ-18	2	13	VH-2	覆土下位	4	1	3	Ⅳc	口縁	拓A-3	H19年
			(M-86)	V	24	1					H19年
			(M-86)	V	27	1					H19年
Ⅳ-18	3	13	VH-2	覆土	2	1	1	Ⅳc	底部	拓A-2	H19年
Ⅳ-18	1a	13	VH-3	床上	5	21	21	Ⅲb	口縁	拓A-5-b	H19年
	1b	13	VH-3	覆土下	2	6	8		口縁~胴部	拓A-5-a	H19年
	1c	13	VH-3	床上	5	2	8		胴部	拓A-5-c	H19年
Ⅳ-19	2	14	VH-3	覆土下	1	2	2	Ⅲb	口縁~胴部	拓A-6	H19年
Ⅳ-19	3	14	VH-3	覆土下	3	2	2	Ⅲb	胴部	拓A-4	H19年
Ⅳ-19	4	14	VH-3 HP-1	覆土下	4	6	8	Ⅲb	口縁~胴部	拓A-7	H19年
			(N-85)	V	98	1					H19年
			(L-83)	V	14	1					H19年
Ⅳ-20	1	15	VP-4	覆土	2	1	2	Ⅲb	口縁	拓No.19	H19年
			(J-5)	V	3	1					H20年
Ⅳ-20	1	15	VP-5	覆土8	3	1	3	Ⅲb	口縁	拓No.1	H19年
			(C-8)	V	3	1					H19年
			(C-9)	V	2	1					H19年
Ⅳ-20	2	15	VP-5	覆土8	1	2	10	Ⅲb	口縁	拓No.3	H19年
			VP-5	覆土8	2	1					H19年
			VP-5	覆土8	3	1					H19年
			VP-5	覆土8	4	5					H19年
			(C-10)	V	1	1					H19年
Ⅳ-20	3	15	VP-5	覆土8	1	8	67	Ⅲb	口縁~底部	復No.1	H19年
			VP-5	覆土8	2	6					H19年
			VP-5	覆土8	3	16					H19年
			VP-5	覆土8	4	24					H19年
			VP-5	覆土8	18	5					H19年
			(C-8)	V	3	4					H19年
			(C-8)	V	5	3					H19年
			(C-9)	V	2	1					H19年
			VP-5	覆土8	1	6					H19年
Ⅳ-20	4	15	VP-5	覆土8	3	3	22	Ⅲb	胴部~底部	拓No.64	H19年
			VP-5	覆土8	4	11					H19年
			(C-8)	V	3	1					H19年
			(C-9)	V	2	1					H19年
Ⅳ-21	1	13	VP-10	底	4	1	1	Ⅲb	口縁	拓No.67	H20年
Ⅳ-22	1	16	土器集中2	V	1	90	160	Ⅳb	口縁~胴部	復A-5	H19年
			(J-84)	V	6	5					H19年
			(J-85)	V	3	3					H19年
			(K-84)	V	4	46					H19年
			(K-85)	V	4	15					H19年
			(K-85)	V	8	1					H19年
Ⅳ-22	1a	16	土器集中3	V	2	7	11	Ⅳb	口縁	拓A-8-a	H19年
	1b	16	土器集中3	V	2	7			胴部	拓A-8-b	H19年
Ⅳ-22	2	16	(J-83)	V	4	4				H19年	
Ⅳ-22	2	16	土器集中3	V	2	2	2	Ⅳb	口縁	拓A-9	H19年

表Ⅳ-5 遺構出土掲載石器一覧

遺構名	挿図・掲載 No.	図版 No.	器種名	遺物 No.	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量 (g)	石材
VH-1	Ⅳ-23-1	16	石鏃	3	HP-1 覆土中位	(4.15)×2.22×0.73	3.0	黒曜石
VH-2	Ⅳ-23-1	16	石槍・ナイフ類	6	覆土下位	4.81×2.23×0.99	6.6	黒曜石
VP-4	Ⅳ-23-1	16	たたき石	3	覆土	6.68×6.31×6.15	450.3	玄武岩
VP-4	Ⅳ-23-2	16	たたき石	4	覆土	6.80×7.98×5.75	453.0	砂岩

V 包含層(第Ⅱ黑色土層)出土の遺物

1 土器

概要(図V-1~4、表V-1、図版17~27)

包含層V層(第Ⅱ黑色土層)からは14,676点の土器片が出土した。Ⅰ~Ⅶ群がある。Ⅳ群6,813点(約46%)、Ⅲ群5,739点(約39%)が多く、Ⅱ群73点、Ⅰ群(b類)13点が少ない。Ⅳ群は手稲式~堂林式の資料が多い。Ⅲ群は大半が北筒Ⅱ式(トコロ6類)である。

ほかにⅣ群土器が1,190点、Ⅶ群土器が53点出土しているが、自然の営為による混在と判断されるため、今回の報告では扱わない。

分布傾向を述べる。

Ⅲ群は調査区全域において出土しているが、調査区南、とりわけC地区の3~15ライン間に多く分布しており、北側へ向かうほど漸減する。本報告Ⅳ章の検討結果から、石狩低地帯の北筒式は縄文時代中期中頃に型式幅の初源が遡る可能性が考えられるが、その古手の北筒式は50ライン以南のBC地区に分布のまとまりがある。A地区では出土していない。

Ⅳ群a類は、大半がタブコブ式。主に調査区北側のA地区で出土した。

Ⅳ群b類はウサクマイC式、手稲式、鯉淵式。B地区の31~38ライン間、A地区75~89ライン間に分布の集中がある。

Ⅳ群c類はほとんどが堂林式。主に調査区北側、A地区の70~87ライン間に分布する。

V群は主に調査区北側、A地区の73~84ライン間に分布の集中がある。

以上をまとめると、縄文時代中期では調査区南側に分布の中心があり、後晩期では調査区の北側、祝梅川小野遺跡寄りに分布の中心が移り変わる。

縄文時代早期の土器(図V-5-1・2、表V-2、図版17)

すべてⅠ群b類。東釧路系土器である。全体に摩滅した小片が多く、器形復元に至ったものはない。1は組紐圧痕文が施されたもの。東釧路Ⅲ式あるいはコッタロ式に相当すると考えられる。2は横位の細貼付帯が巡るもの。貼付帯の間は細い短縄文が充填されている。中茶路式。

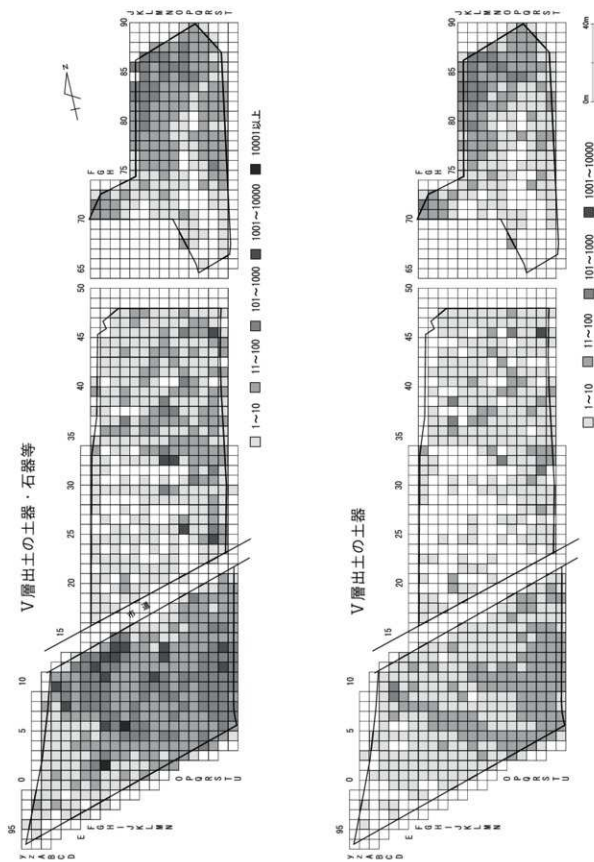
表V-1 包含層出土土器点数一覧

	I b	I b-3	II	II a	II b	III	III b	IV	IV a	IV b	IV c
V	8	5	1	62	10		5,739	622	296	4,003	1,892
VI				2			12			1	
攪乱 排土 不明				1		8	92	15	1	7	2
計	8	5	1	65	10	8	5,843	637	297	4,011	1,894

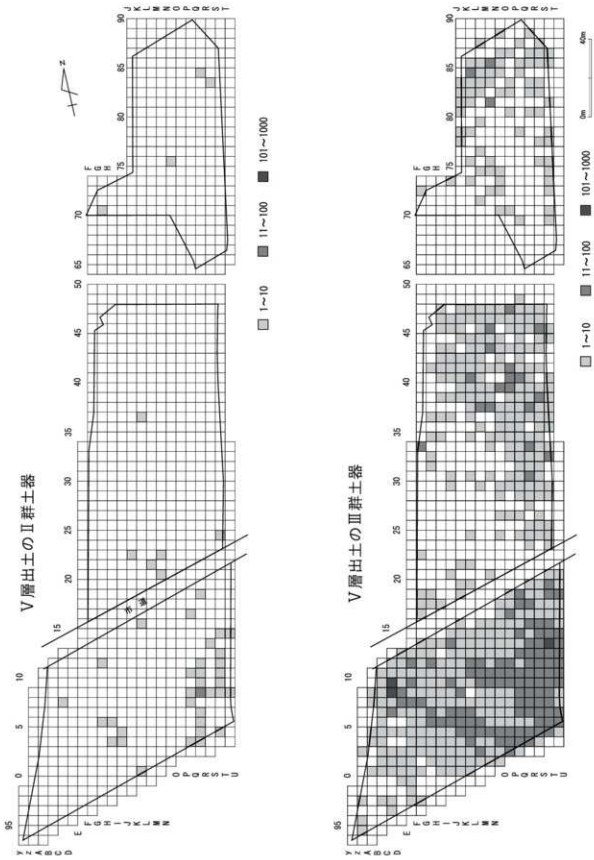
	V	V b	V c	VI	VI a	VII	現代の器	不明	土製品等	計
V	17		615	1,190		53		153	10	14,676
VI										15
攪乱 排土 不明	4,436	7	8,578	97	7	12	1	10,335	4	23,603
計	4,453	7	9,193	1,287	7	65	1	10,488	14	38,294

※ 攪乱はⅢ層の攪乱も合算されている。風倒木頭も含む。

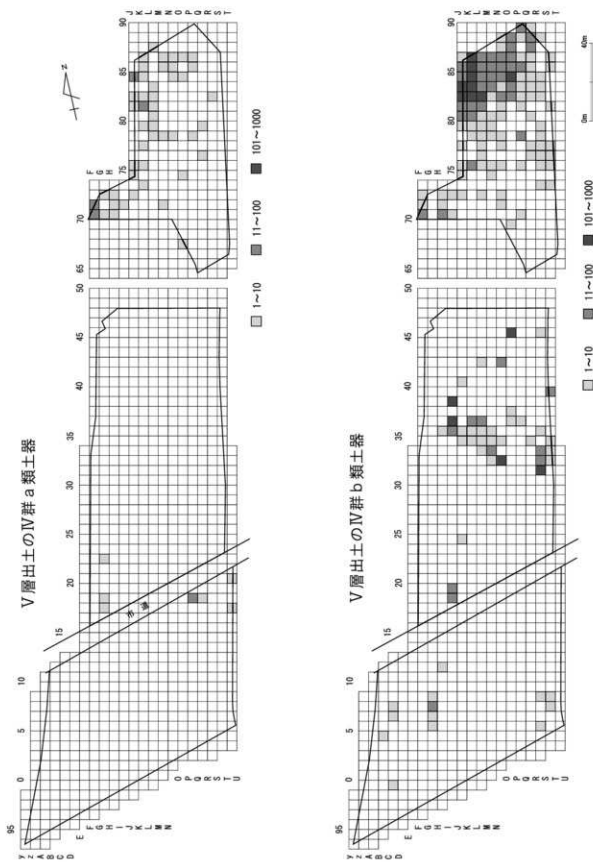
※※ 土製品等は焼成粘土塊を含む。



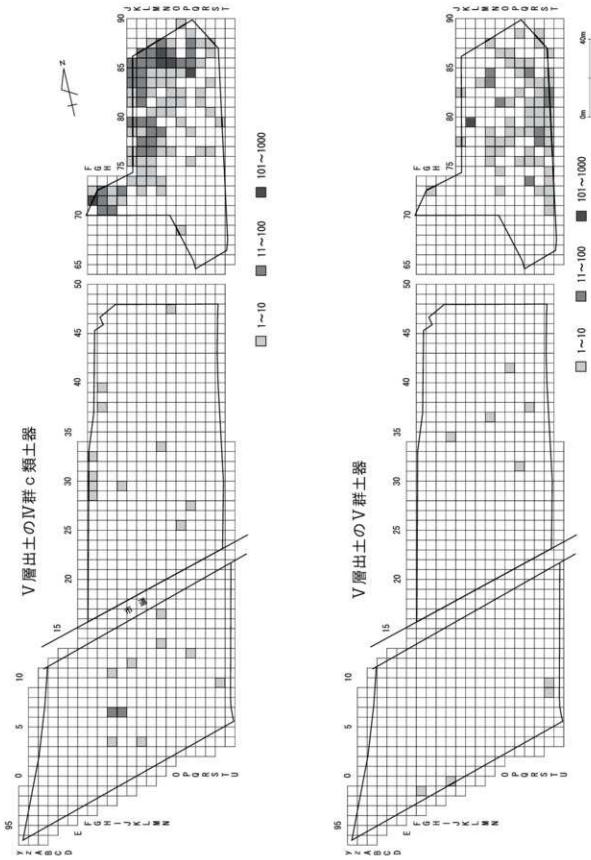
図V-1 包含層出土遺物分布図



図V-2 包含層出土土器分布図(1)



図V-3 包含層出土器分布図(2)



図V-4 包含層出土土器分布図(3)

縄文時代前期の土器 (図V-5-3~5、表V-2、図版17)

Ⅱ群a類 (63点) とⅡ群b類 (10点) からなる。

3と4はⅡ群a類。3は横走気味の縄文。美々7式に相当すると考えられる。4は条が幅広。不整な燃りのRL斜行縄文が施され、胎土に繊維を含む。綱文式。

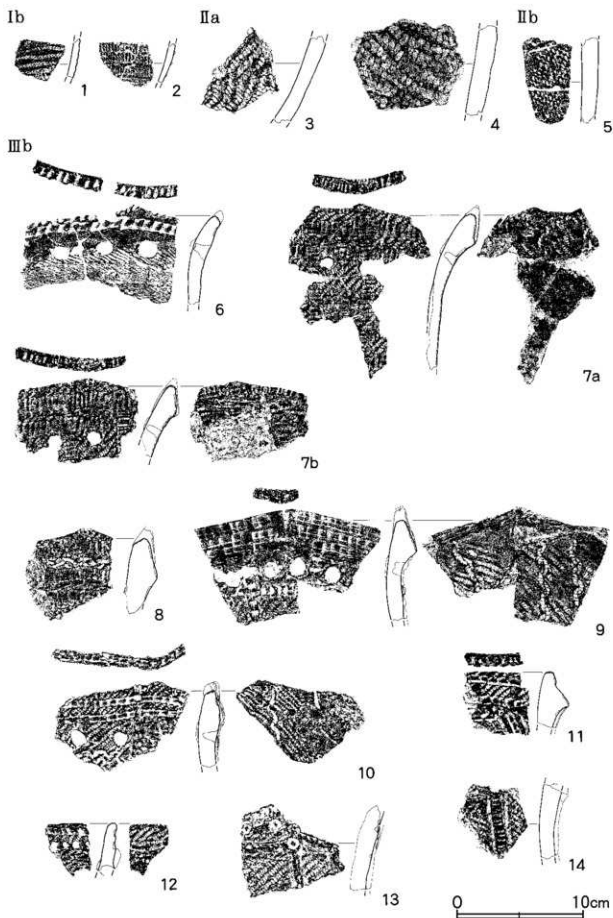
5はⅡ群b類。複節斜行縄文が施されたもの。内面は丁寧に磨かれ光沢があり、赤褐色を呈する。円筒下層d式に相当すると考えられる。Ⅱ群b類は磨耗した胴部小片のみの出土である。

縄文時代中期の土器 (図V-5~11-6~74、表V-2、図版17~20)

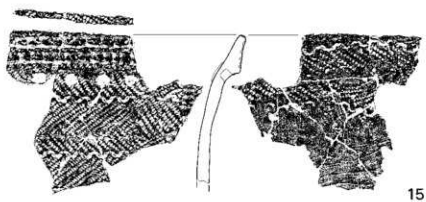
すべてⅢ群b類。大半が北筒Ⅱ式(トコロ6類)である。

6は肥厚帯を持たない。ヘラ状工具による連続的な押引が口唇上と口唇沿いに施される。口唇沿いの押引は1回が7~8mmと間隔がほぼ一定しており、丁寧な施文。その下に幅1.6~1.7mmの無文帯、1段の燃りの斜行縄文、幅1.5cmの燃糸文の横環が整然と続く。燃糸文の下は綾線文と斜行縄文がかすかに観察されるが、ナデ調整で消失しており判然としない。円形刺突は無文帯と斜行縄文にまたがって、割印状に、最後に加えられている³¹。内面および外面の無文帯は横方向の弱いナデ調整。全体に硬く焼きまわっており、鈍い光沢を持つ。色調は暗赤褐色。7は口縁部肥厚帯から胴部にかけて横位連続の押引文を多段巡らせたもの。押引は1回が4mm前後と精緻で細かい。先端を欠くが2本組の突起を口縁部に持つ。個々の突起からは縦位の押引を垂下させている。7aの下端から、胴部にかけて横位の押引が数段巡っている。全体的には押引で格子状の文様帯を構成している。地文はLR原体の綾線斜行縄文。口縁部内面にも縄文の施文が認められるが、施文方向は一定しない。7bは縄文が横走気味。円形刺突文は押引文と縄文の間に施されている。8は断面三角形の肥厚帯に幅1.2cmの押引文を2段巡らせ、押引間に綾線文を施している。口縁に小突起が欠失した痕がある。押引が肥厚帯下の胴部にも施されていることから7とほぼ同時期と考えられる。6~8は胎土に火山灰、白色岩片、砂、繊維を含む。

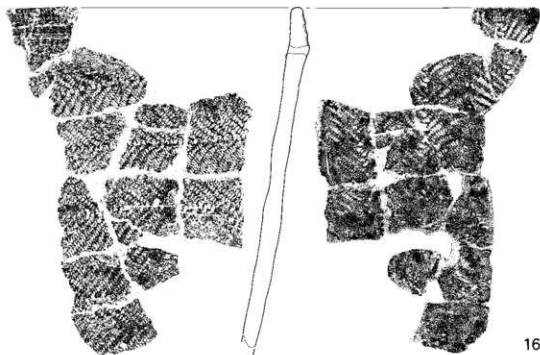
9~14は貼付文を有するもの。貼付による文様帯³²の構成は、いずれも口縁部肥厚帯下に展開する。9・10は格子状の文様帯を構成する。地文は綾線斜行縄文で、口唇内面にも縦位の回転で施文している。いずれも口縁の波頂部を中心として、その左右に縦の貼付を垂下させ、短い横の貼付で縦横を連結させている。口唇断面は角形。10は口唇上に押引文を連結させている。9・10とも山形の波頂部に垂直方向の刺突を加えているが、9については波頂部が欠失しており、刺突孔の最奥部分をかろうじて確認できるのみである。10は縦位の貼付文上の押引が口縁部肥厚帯の上にも連続して及んでいる。10は赤彩土器。11は断面三角形の貼付が横環し、そこに斜位の貼付が組み合わさったもの。口唇沿いと断面三角形の貼付下に沿って半截竹管状工具による押引が連続的に巡る。また斜位の貼付の上にも押引文が施されている。口唇上にも刻み様の文様が認められるが、ナデで消失しており判然としない。12は口唇沿いに押引文が2段横環し、その下にバンド状の貼付が1条圍繞する。貼付帯上にはLR原体による斜行縄文が施されている。円形刺突文は、貼付帯上と胴部外面に割印状に加えられている。小片ではあるが、6同様、古手の特徴を有するものと判断される。13・14は貼付の交点に中空の工具による小円形刺突文が加えられたもの。13は貼付の断面が三角形を呈する。貼付には半截竹管状工具により連続的な押引を加えた痕跡があるが、その後、ケズリで断面三角に整形したと見られ、押引の単位は痕跡程度にしか確認できない。14は胴部片。貼付の断面が、平坦な四角形を呈する。貼付の両脇に沈線が引かれ、やや浮き彫り状である。貼付上は押引が連続的に施されているが、施文後のナデ調整で表面を均され、あまり明瞭ではない。



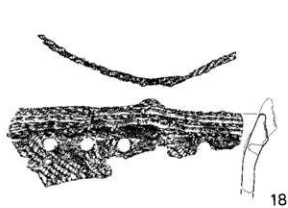
図V-5 包含層の土器(1)



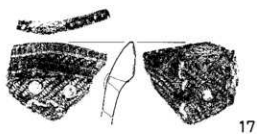
15



16



18



17



19

0 10cm

図V-6 包含層の土器(2)

15～21は文様帯を構成しないもの。

15～17は肥厚帯上に多段の押引があるもの。15は綾線羽状縄文、16は結束第一種羽状縄文、17は綾線斜行縄文を地文とする。16は口縁部の肥厚帯がバンド状。内面は縦位の羽状縄文が胴部まで及ぶ。17は9同様、押引間に地文が残る。口縁部内面の縄文の施文方向は縦位。

18～21は細い半截竹管状工具により2本単位で沈線状に押引したもの。萩ヶ岡遺跡で萩ヶ岡2式のメルクマールとされた「1a・1c文」に類似する。19は摩滅が著しい赤彩土器。縦位の細い貼付が剥落したような痕跡も認められるが、摩滅のため判然としない。20・21はいずれも口縁に山形の小突起を持ち、波頂部に垂直方向の深い刺突が加えられている。地文は綾線の羽状縄文。

22～45は口縁部肥厚帯に押引文、刻み、刺突文が施されたもの。

23～30・32・34・36・44は口縁部に山形の小突起を持つ。

22・27～29・31・32・34・35・37は半截竹管状工具による突きが強い。この押引は江別市萩ヶ岡遺跡において萩ヶ岡3式（天神山式）の文様要素とされた2a～2c文に類似する。

22～27は押引によって文様帯を構成するもの。縦位あるいは、斜位に1～2条の押引が施されている。22は肥厚帯上で肥厚帯下で押引文が2段横環する。斜位の押引が2条、一点から左右に分かれて、鋭角をなす。地文はLR斜行縄文。器表面に炭化物の付着が著しい。23は口縁部の小突起の下に縦位の押引が垂下する。肥厚帯は幅が狭く薄い。バンド状の貼付帯を口唇沿いに付して肥厚帯としたものであることが、割れ口から窺われる。半截竹管状の工具による垂直方向の刺突が小突起の波頂部に加えられている。胎土は砂質。24はヘラ状工具による押引文が2段巡り、その下に縦位の押引が垂下する。肥厚帯は非常に薄い。口縁部に小突起があり、その下に縦位の押引文があることから、小突起を中心に左右2条の押引が垂下していたと考えられる。胎土中に角閃石、長石等の黒色鉱物を含む。焼成が良く、赤褐色を呈する。赤彩土器。25は小突起から押引風の刺突が縦位に垂下している。刺突は繊維質のヘラ状工具によって、斜め下から突いたものである。山形小突起の波頂部からは開口部径7mmの刺突が垂直方向に加えられている。胎土には白色砂と繊維を豊富に含む。26は精製された粒度の細かい粘土を胎土とする薄手の土器。口縁部肥厚帯上に押引文を2段巡らせている。胴部には縦位ないしは斜位の押引文を垂下させている。地文はLR斜行縄文。口唇内面には縄文が横位に施文されている。胎土中に白色岩片と砂、繊維を含む。27は全体に横方向のナデが施され、ほとんど判然としないが、円形刺突文を基点として、左右に斜位の押引文を引いた痕跡がみられる。円形刺突文は半分割れているが、縁に右側の押引文が確認できる。胎土中に白色岩片と、繊維を含む。

28は口唇上と口唇内面にも押引が横環する。

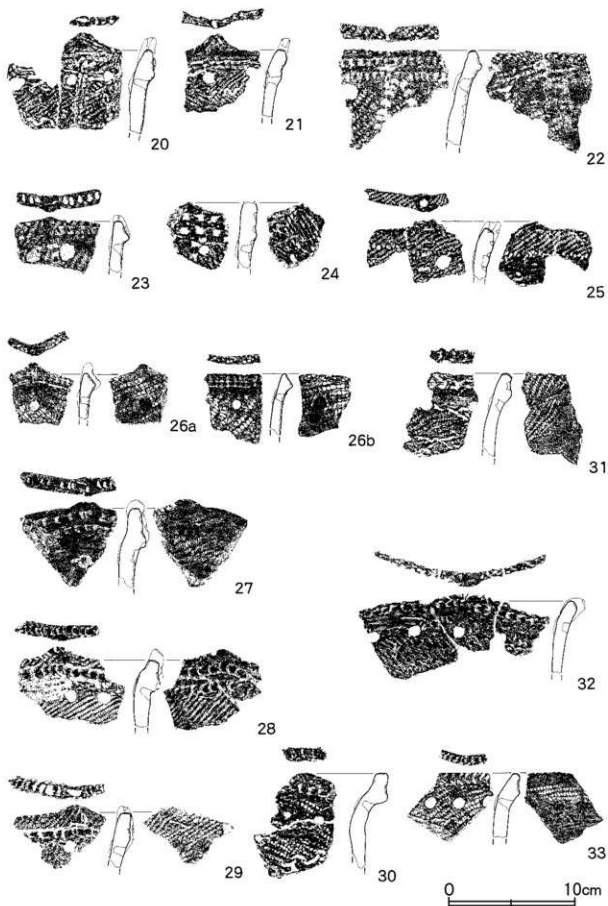
29は小突起の波頂部に半截竹管状工具による垂直方向の刺突が加えられている。

30は頸部が大きく屈曲する。口唇上と肥厚帯上にヘラ状工具による押引文が施されている。円形刺突文が2つあるが、施文具が異なっているようである。地文は燃りの緩い綾線斜行縄文。

31・32は先端がギザギザな半截竹管状工具を使用したもの。31は肥厚帯上の押引が深い。32は口唇がやや肥厚して外に開く器形。一部が突起状に肥厚して外に突き出ている。地文は綾線斜行縄文であるが、一見、燃糸文風に条同士の間隔が不均一に開き、条の単位で乱れている。施文時に原体が器面によく密着していなかったものであろう。

33は半截竹管状工具の最曲部を欠いたもの、あるいはヘラ状の工具を2本U字状に組み合わせた工具によるもの。押引というより、刺突に近い施文。

34～37は強い押しと緩い引きの繰り返して、押しの間が開き気味である。34は口縁部に小突起が2つ並ぶ。小突起の間の谷部分では縦位の押引が垂下する。



図V-7 包含層の土器(3)

38は角棒状の工具による刺突列が1段横環する。地文は、刺突列を境にして原体を変えた羽状縄文。口唇上には半截竹管状工具による押引文が施されている。

39～43・45・48～54・57は口縁部肥厚帯を持ち、肥厚帯下に円形刺突文が巡るもの。

39・40はヘラ状工具による連続的な押引文が1段横環する。いずれも口唇上に押引文が施され、39は口唇内面にも押引が付されている。赤褐色を呈し、均一な粒度の砂粒を基調とした胎土中に、石英砂を多く含んでいる。「仮称富良野盆地系土器」³³と考えられる。

41は頸部が屈曲し、口縁部肥厚帯が垂直に立ち上がる器形。肥厚帯上にヘラ状工具による刻みが連続的に加えられている。地文はLR斜行縄文。

42・43は爪形文。鋭利なヘラ状工具で半弧状の刻みが連続的に加えられている³⁴。胎土中に繊維を含む。

44は山形の小突起下の口縁部肥厚帯が瘤状に隆起し、そこに刺突を充填させたもの。突起の頂部から垂直方向に深い刺突が加えられている。円形刺突文の開口径は1.1cm。

45・46は胴部片。45は繊維質の半截竹管状工具による押引が横環するもの。46は器壁が薄い。小型土器の破片と思われる。押引は縦位。

47～52は肥厚帯上に、押引や刻みや刺突を持たないもの。

47・48は復元個体。両者は口唇上に山形の小突起を有し、その突起の頂点に垂直方向の深い刺突が加えられている点で共通するが、器形、地文、胎土は異なる。

47は波頂部が5か所。口唇の上面観はほぼ正円。頸部がやや屈曲し胴部がわずかに膨らみ底部に向けて窄まる器形。地文はLRとRLの結束羽状縄文。全体にやや摩滅しているが、内面調整は横方向の削りとナデである。胎土に繊維と砂礫を多く含み、色調は赤褐色を呈する。

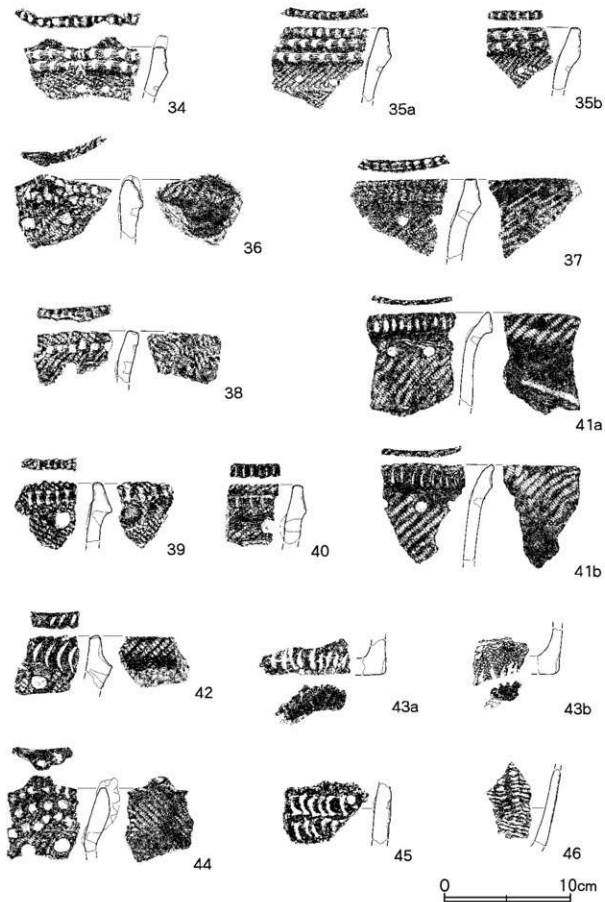
48は波頂部が6か所。口唇の上面観は六角形を呈する。胴部下半を欠くが、ほぼ直線的な器壁と推定される。地文は2段然りLR原体の横位回転文。内面に指頭圧の痕が顕著に観察される。円形刺突によって盛り上がった内面は刺突具の抜き取りに際して粘土が引っ張られ中央が小さく凹んでいる。粘土が軟らかいうちに刺突が施されたと考えられる。胎土に砂礫を含み、色調はくすんだ黄灰色。

49・50は結束第1種羽状縄文を地文とする。胎土に繊維と砂を含む。円形刺突文は径2mmほどの中空の工具を用いている。50は刺突のたびに工具を回して、外面の径を広げているため、断面は開く。外面の径は5～6mm。49は底面を除く器表面全体に縄文を施文しているが、底部付近は、最後に指頭押圧で縮めた痕跡があり、わずかにくびれる部位もある。焼成は良く、全体に焼きしまっている。

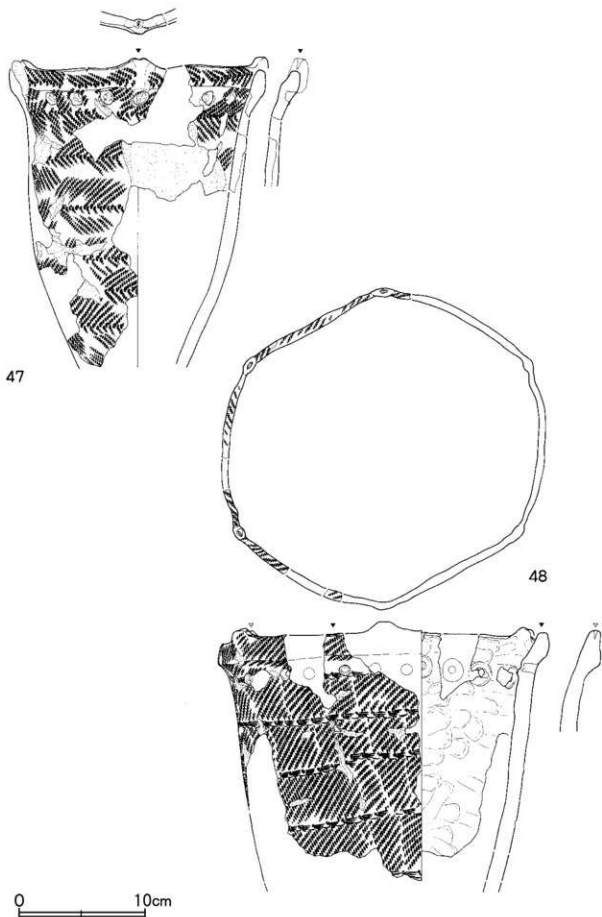
51は口縁部肥厚帯が内外面とも指頭圧による凹凸が顕著。綾線文が深めに施文されている。胎土に長石、角閃石等の細砂粒を含んでいる。

53は剥落と本来の歪みによってやや判然としないが、口唇部が小波頂部を持つ。波頂部からは中空の工具によって垂直方向の刺突が加えられている。波頂部以外の口唇部には斜め方向に浅い刺突が連続して加えられている。原体の施文方向がやや不整。原体の施文方向を意図的にずらすことで、波頂部を中心に縄文を放射状の意匠にした可能性もある。胎土は精製された粘土で、白色岩片、繊維を含む。

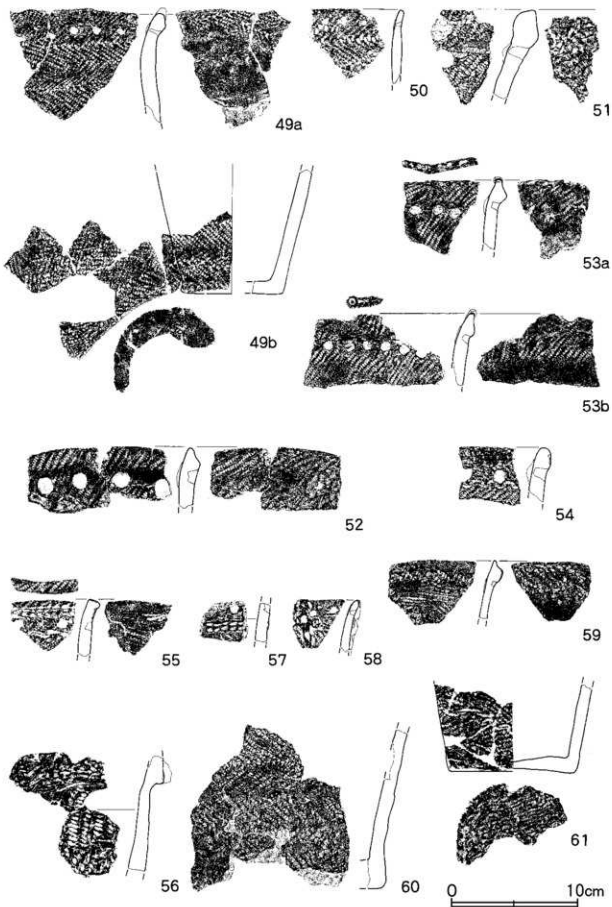
54～57は先端が二股に分かれた工具によって、刺突風の押引を加えたもの。55は口縁がやや外反する。口唇沿いに押引が1段横環し、その上下に細い刺突文が巡る。押引文と上下の刺突文は間隔が連動しており、同時に施文されたと考えられる。円形刺突は径7mm。地文は綾線斜行縄文である。56は口唇を欠く。口縁部肥厚帯は断面三角形である。残存部から口唇部に山形の波頂部があり、波頂部下の肥厚帯が縦位に隆起していたものと推定される。肥厚帯の下縁に刺突風の押引文が巡る。割れ口に



図V-8 包含層の土器(4)



図V-9 包含層の土器(5)



図V-10 包含層の土器(6)

一部、円形刺突文がかかる。径は1.2cm。頸部が大きく屈曲し、口縁部肥厚帯が垂直に立ち上がる。胎土に白色岩片と繊維を含む。57は幅の狭い無文帯が廻り、その無文帯に刺突が加えられたもの。

58は口縁部が無文。そこに径4mmの円形刺突文が加えられている。細い貼付が縦横十字に付されている。貼付上には径3mmの刺突が加えられている。地文はR L斜行縄文。

59は隆帯が横環し、指頭圧で口唇が薄く作出されたもの。隆帯上に燃りの粗いR L原体を横位回転摩擦している。胴部地文は無節縄文が横位に施され、他に細かい燃りのR L斜行縄文も認められるが、全体に磨耗しており、判然としない。円形刺突文は径4mmの中空工具による小型のもので、施文間隔も開いている。

60は結束第一種羽状縄文を地文とする胴部片。下端は底部にかかる。

61~66は底部。61~64は綾線文。61は綾線羽状縄文。底面にも縄文を施文した痕跡があるが、ナデ消されて、判然としない。わずかに上げ底気味である。底部内面は指頭圧による凹凸が著しい。62・63は綾線斜行縄文。64は底面。胎土に繊維を多く含む。全体に摩擦している。土製品の可能性もあるかもしれない。65は単軸絡条体による縹糸文が施されたもの。縹糸は斜位を基調とするが、一部、横位に回転させている。胎土中に砂礫と繊維を含む。底部断面はやや横に張り出す。66はR L斜行縄文を地文とする。内面の底部立ち上がり部分は指頭圧痕が強めに加えられている。

67は榎林式~大安在B式にかけての資料。1点のみの出土。2本単位の蛇行沈線文。波頂部付近の口縁部片で、割れ口に渦文とみられる沈線も観察される。地文は縹糸文。胎土中に白色砂が混じる。

68~71は天神山式(萩ヶ岡3式)。68は棒状の突起を持ち、突起と口唇部肥厚帯には半截竹管状工具による刺突文が充填される。口縁部下は先端の細い工具による平行沈線が4条横環している。69は口唇が肥厚して外側に突き出し、その下を半截竹管状工具による押し引と沈線が巡る。地文はL R斜行縄文。口唇上にも施文されている。粒度が粗い胎土で、石英砂を多く含んでおり、「仮称富良野盆地系土器」³¹⁾と考えられる。焼成は良く赤褐色を呈する。70は口唇外側が断面三角状に肥厚し、中空の細い工具での連続的な刻み列を上下2段、角を境に対向するように付されている。71は胴部片。押し引風の連続的な刺突が横位と斜位に施されている。内面は平滑で鈍い光沢を持つ。

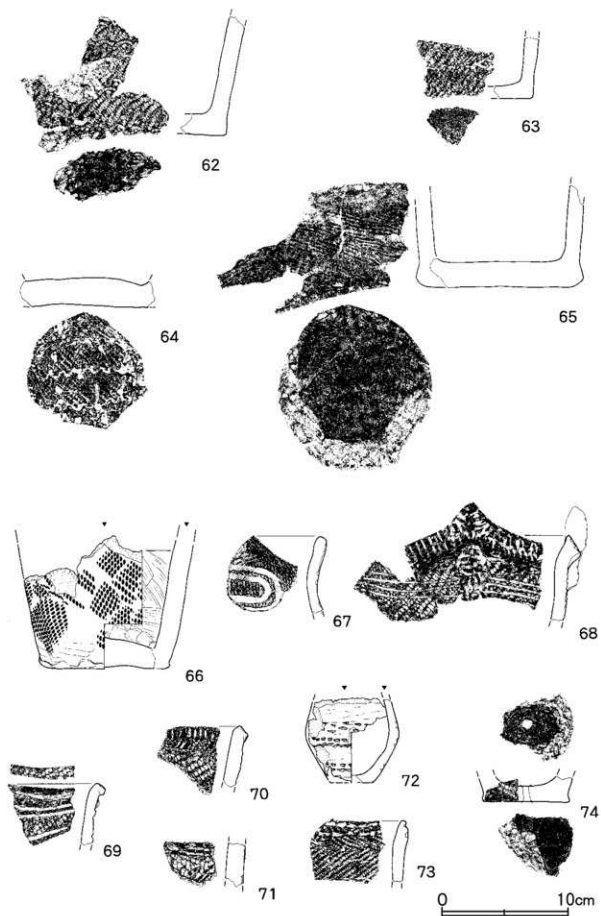
72・73はノダップⅡ式。72は小型の無文地に刺突列が横位に巡る。工具先端が二股に分かれている刺突列と、分かれていない刺突列とがある。胎土は精製された粒度の細かい粘土。胎土中には繊維を含む。73は先端が二股の工具による刺突列。地文は羽状縄文。

74は胎土からⅢ群b類と判断される底部片。わずかに残る側壁に、R L斜行縄文が認められる。底面中央に貫通孔が設けられる。土製品であるかもしれない。

縄文時代後期の土器(図V-12~20-75~136、表V-2、図版21~27)

前業の土器(Ⅳ群a類)はタブコブ式と入江式があるが、ほとんどがタブコブ式(Ⅳ群a-2類)である。タブコブ式は脆い胎土の資料が多く、器形復元には至らなかった。

75~79はタブコブ式。75は縄線を施したもの。aは口縁部片。波頂部から縦位にR L原体の太い縄線を付し、左右に横位の平行縄線を複数条巡らせている。口唇と内面に縄文を施文しているが、ナデにより部分的に消失している。bは胴部片。上部に縄線が巡る。地文は羽状縄文。76~79はバンド状の貼付帯を持つ。76・77・79は貼付上と胴部地文とで原体を変え、羽状縄文にしたもの。77は貼付帯が薄い。78は縦位の貼付帯と横環する貼付帯の組み合わせ。不整な燃りの斜行縄文を地文として全体に施文後、貼付を付し、その後、貼付上に縄文を施文している。貼付上の縄文は一部のみで地文と重複している。またその後、ナデが加えられており、全体的に縄文は判然としない。79も全体にL R



図V-11 包含層の土器(7)

斜行縄文を施した後、貼付帯を添付し、貼付上にRL原体を施文している。

80は入江式。細い沈線による区画帯の中に乙字の文様が施されている。80aは口縁部片。地文はLR斜行縄文。胎土中に砂礫を含む。内面は横ナデ。炭化物の付着が観察される。

中葉の土器(IV群b類)はウサクマイc式、手稲式、甕調式がある。

81~89はウサクマイc式。口唇上が無文のものでは入念にナデ調整が施されている。

81~84は沈線で区画した内部に鋸歯状等の沈線文を連続的に充填させたもの。口唇部際を1ないし2条の沈線が巡る。82~86・88は頸部が無文。81・82は器表面の剥落が目立つ。

85・86・88は口唇部際まで文様帯があるもの。85は半円状の沈線文を同心円状に施したもの(重弧文)。地文はLR縄文。全体的に磨耗が著しく、口唇上面にも縄文が施されたようであるが、痕跡程度にしか確認されない。胎土には繊維を多く含む。86は鋸歯状沈線。やや精製された胎土である。87は頸部片。頸部は無文帯というより、棒状工具によるやや太い沈線を屈曲部に巡らせたと考えられるもの。内面調整は横位のナデ。88は菱形文が入れ子状に連続して口縁部を巡る。頸部(f)は「く」の字状に屈曲し、無文帯が横環する。胴部(g)にはクランク気味の鉤状文が認められる。81・84・88は口唇上に縄文が施文されている。

89は口唇断面が角形で、やや開く器形。口縁の一部に貼瘤が施され、その貼瘤の中を棒状工具によって、縦位の刺突が貫通する。貫通孔の径は径5mm強である。胴部地文はLR原体の横位回転文であるが、原体は縄の末端がほどけており、その無節の縄をコイル状に自縄で巻きつけている。このため縄文の糸と連動して自巻きした縷系の回転文が観察される。縷系の巻きつけは10条ほどが数えられる。地文は底面の中央にも施されている。

90~98は手稲式。IV群b-2類。

90~94は口縁部に広い無文帯を持ち、頸部から胴部にかけて平行沈線文を施したもの。90は復元個体。口縁部を欠く。平行沈線は間隔が一定せず、上下で重なったり、途中で切れたりしている。手稲式の顕著な特徴である平行沈線同士を結ぶ縦位の弧線文は認められない。その代わり、下から斜めに突いた縦位の刺突列が施されている。刺突は粗雑で、左右に曲がったり、同じ場所を2度突いていたりにしているのが観察される。無文部は内外面ともナデ調整により平滑である。底部内面の立ち上がりはやや丸みを帯びている。91~94は口縁部片。各沈線間は縦位の弧線で連結され、全体としてヘアピン状の蛇行を連続させている。91は文様帯と口縁部無文帯との境に段を持つ。94は鉢。口縁は大きく内傾する。

95はRL原体の斜行縄文が施された深鉢。口唇断面がやや肥厚し、丸みを帯びた角形で、底部付近は横方向の削りと、ナデが認められる。

96は鉢。口縁部と高台部分に横位の文様帯を巡らせている。文様帯は鋸歯状沈線を充填させており、口縁部は2段の構成を持つ。底面外側を除き、内外面とも横位のナデが施され、鈍い光沢を持つ。口唇は丸みを持ち、内側がわずかに肥厚する。文様帯にはLR原体の斜行縄文が施されているが、ナデ調整によってほとんど消失している。高台部は自重で焼成前にやや潰れたようである。

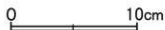
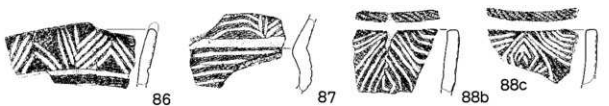
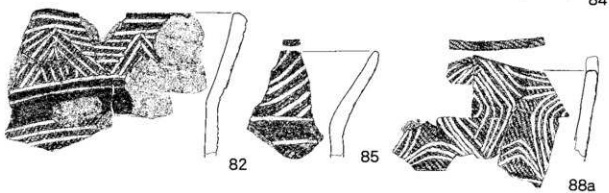
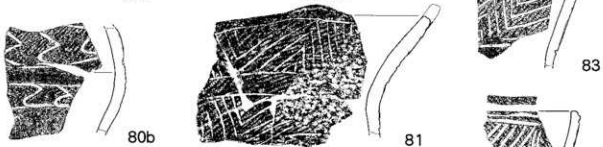
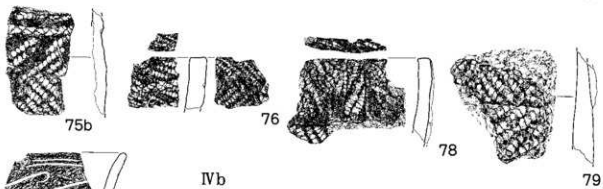
97は小型の鉢形土器。無文。横方向のケズリとナデ調整が施されている。胎土に角閃石等の黒色鉱物を多く含む。底部を中心に器面の剥落が多く、剥落部位では鉱物の粒が浮き出ている。

98は注口土器。沈線で唐草様の文様を描いている。先端の尖った工具を使用したと考えられるが、浮き彫り状にミガキ調整が施されているため角はとれている。全体が黒色を呈し、光沢を持つ。

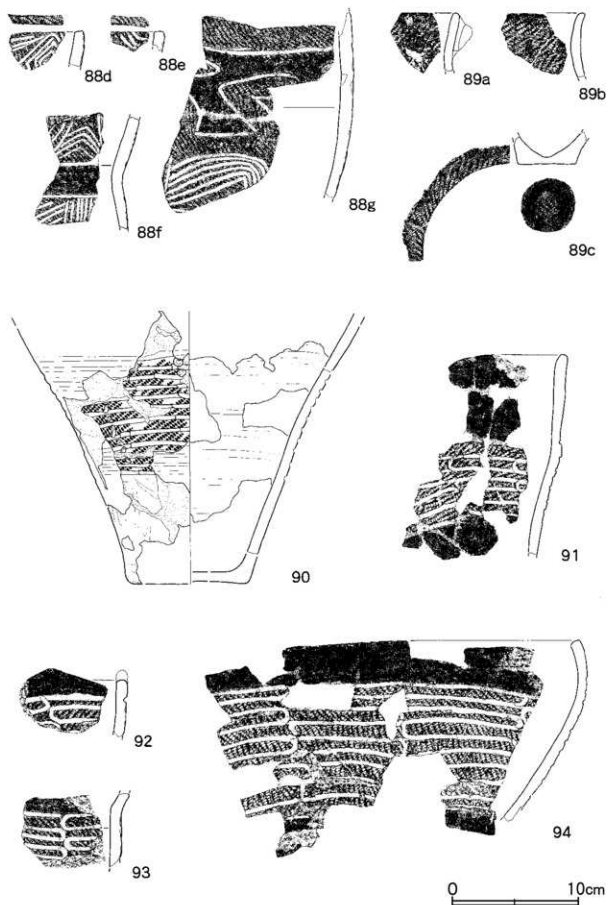
99~108は甕調式。IV群b-3類。

99は手稲式に近い資料。頸部屈曲部に1段の刻み列を持つ。口縁部に幅広い無文帯を持ち、平行沈

IVa



図V-12 包含層の土器(8)



図V-13 包含層の土器(9)

線による文様帯が胴部を巡る、平行沈線の間はS字状の弧線文で縦に区切られている。

100・101は無文地の口縁部に刻み列が施されたもの。100は厚手の土器で口唇沿いに太刻み列が1条巡るもの。口唇断面はやや丸みを持つ角形。口唇部が1.8～2.0cmでもっとも厚い。破片下端の厚さは1.0cm程度であり、口唇へ向けて器壁が急に厚みを増している。101は波頂部が山形をなす薄手の土器。口唇断面は丸みを帯びた切り出し状。波頂部から谷に下る途中に内側に対して付した貼瘤状の小突起がある。口唇内面は肥厚する。肥厚は丁寧な作りで、その境は外面の刻み列同様、先端が細い工具による沈線で浮き彫り風に録取られている。

102は口縁部と底部の復元個体。胴部を欠く。緩やかな波状口縁で口唇は1段の刻み列により録取られる。地文はR L斜行縄文。内面、口唇上、胴部無文帯はナデが施されている。

103は頸部を境にして口縁部を欠く。類例から弁状に開く口縁部が推定される。刻目列で区画され、区画内の縄文は撚りの異なる原体で羽状を呈する。胴中央部がやや膨らむ器形で、無文帯が横横している。内面に垂直方向の削りが観察されるが、焼成後のものである。

104は口唇沿いに細い沈線で刻み列を描いたもの。撚りの不整な原体で、二重三重に施文されている。縦位の羽状風ではあるが、施文方向が一定せず、判然としない。

105・106は2段の刻み列。105は厚手の土器。口唇沿いに太い沈線による2段の刻み列が巡る。口唇上と内面は横方向のナデ調整が加えられ、平滑。鈍い光沢を持つ。地文はR L原体の横位回転文。106は復元個体で鋸歯状沈線のもの。2段の刻み列がある頸部を境にして、口縁部を欠く。沈線は先端の細い工具によるもので、3段の構成を持つ。

107は刻みを持たない。小片であるがR L原体とR L原体で羽状を構成している部位がある。口縁はやや内径気味で、口唇内面は肥厚する。鋸淵式の中段階くらいの資料と考えられる。

108は大型の鉢の下半部。帯状縄文が波頭状に連続して巡る。底部は径7cm弱と小さく、ややくぼみ底となっている。鋸淵式の中でも新段階のものと考えられる。

後葉の土器 (IV群c類) は大半が堂林式 (N群c-1類) である。

109～134は堂林式。堂林式はほとんどのものが古段階である。深鉢は波頂部が尖る5単位の波状口縁および5単位の小突起を持つ平縁が多い。

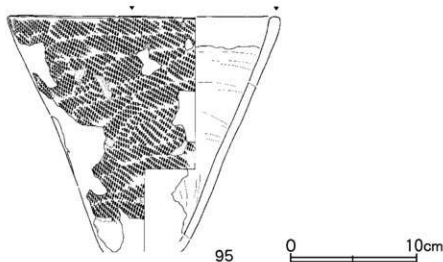
109～119は突瘤と沈線のもの。109は弧線文を重ねた木葉文。地文は羽状縄文で、木葉文の間は無文である。110・111・113は密に重ねた鋸歯状沈線文を施したもの。沈線は三角形の入れ子状をなして連続する。110は大きく2段の構成を持つ。112は口縁と運動した緩やかに波打つ横走沈線と弧線文とを組み合わせたもの。口唇断面は切り出し状。口唇内面が肥厚し、その肥厚帯上に斜行縄文が施されている。113は口縁に横走沈線が6条巡り、無文帯を挟んで胴部に鋸歯状沈線が密に展開する。114は山形の口縁部が屈曲して内傾する。波頂部には垂直方向の刺突。118は先端の細い工具で菱形を描いたもの。周囲に細い刺突が加えられている。119はイナズマ状をした縦位の沈線が連続する。

120～123は沈線のみもの。120～122は口唇沿いに巡る数条の横走沈線と、弧線文の組み合わせ。120は浅鉢。122・123は胴部片。地文はR L原体による斜行縄文。

124～129は突瘤と縄文のみもの。124～128はR L原体による斜行縄文。124は5単位の小突起を持つ。突起部は内反りで肥厚する。129は撚りの異なる原体を交互に使用し羽状としたもの。

130・131は縄文のみもの。130は器表面に輪積みの凹みが数段観察される。131は小型の鉢。原体は直前段の合燃。1段のLが撚り戻され、0段のr2条となった異条の原体と考えられる。横位回転で全体に施文後、胴部下半に斜位回転押捺で二重に施文しているとみられる。

132～134は注口土器。132は楕円形の木葉文が横位に2段巡る。地文はR L原体の斜行縄文。木葉



図V-14 包含層の土器(10)

文の部位では施文方向が一定しないため、区画後の充填縄文である。木葉文の周囲と中央は磨り消されている。木葉文のコーナーが接する無文部に貼瘤の剥落痕が1か所観察される。胎土中に角閃石、長石等の鉱物細粒砂を含む。133は密な沈線が蛇行する。134は帯縄文が巡る。

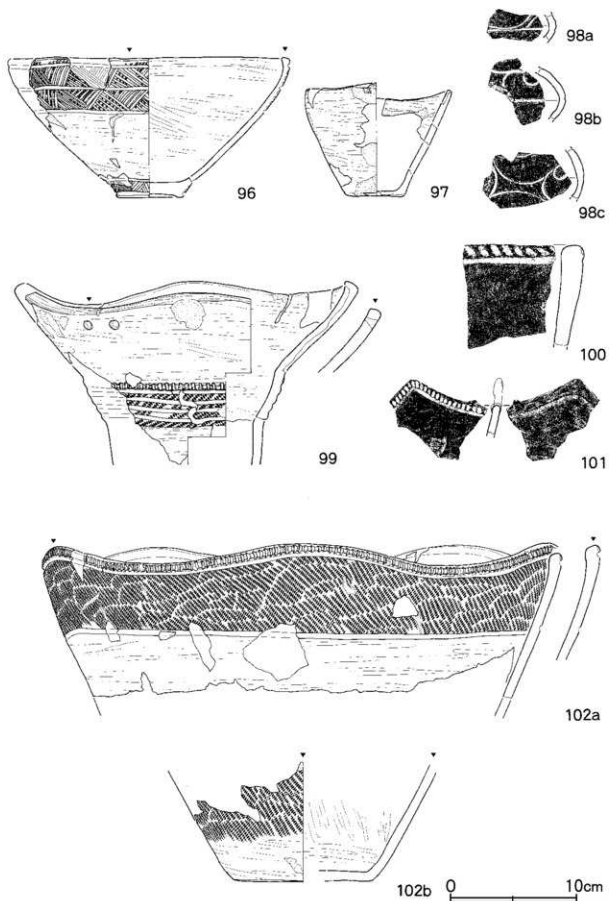
135・136は御殿山式。Ⅳ群c-3類。135は注口土器。口縁部は内傾気味の筒形を呈する。口唇は2組2対の弁状小突起があったと考えられる。それぞれ突起内には三角形の無文部を持ち、突起間には貼瘤が付されている。頸部に境に胴中央部が外に張り出し、底部がすぼまる器形。底部は平底に輪高台をつけたものとみられる。文様は口縁部、頸部、胴部に幅7～8mmの帯縄文が3横環する。胴部の帯縄文は横位の沈線によって上下2段に分かれる。各帯縄文は沈線に縁取られ、浮き彫り風である。帯縄文には貼瘤が付されて、貼瘤の両側には円形刺突が加えられている。無文部は横位のナデ調整。部分的に光沢が残る。赤褐色を呈した焼成のよい土器で、胎土中に角閃石、長石等の鉱物細粒砂を含む。御殿山式の中でも古段階のものと考えられる。135aとbは接合した。136は胴部片。細い沈線で区画された中に爪形の刺突が充填されている。

縄文時代晩期の土器 (図V-20-137~148、表V-2、図版27)

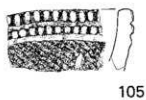
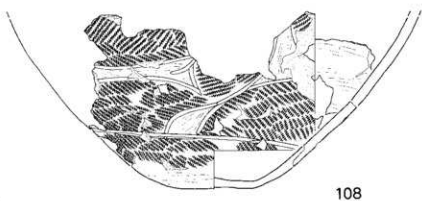
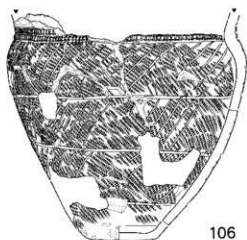
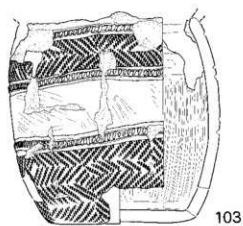
いずれも後葉の土器 (V群c類) である。

137は口縁部に刺突文を充填したものの。口唇断面は内外面からのケズリで切り出し状を呈し、口唇上にはヘラ状工具による薄い刻み列が加えられている。138は口唇内面に短く刻みが加えられている。

139~146・148は横位沈線を口唇沿いに数条巡らせたもの。139は沈線に沿って刺突列がある。口唇内面にも刺突の充填が認められる。内面全体に炭化物が付着する。140は指頭圧により緩い波状口縁としたもの。その後、指頭圧痕ごとに口唇上に縄文を施している。指頭圧痕と指頭圧痕の境、波頂部に相当する部位には、外面から、刻み様に縄圧痕が加えられている。143は沈線を引いた部位に斜行縄文を施文、下の沈線との間は磨消で無文化している。144は口唇が開き、そこに縄文原体を側面押捺している。外面にも斜行縄文や原体を押捺した痕跡が観察されるが、全体的にナデ消されており、判然としなない。145・146は沈線間に瘤状突起がある。瘤の中位には刻みが縦に加えられている。内面

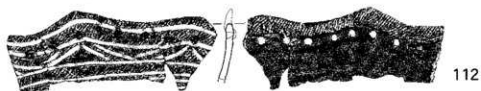
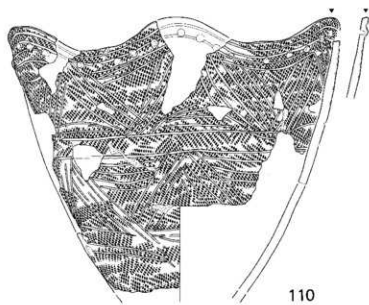
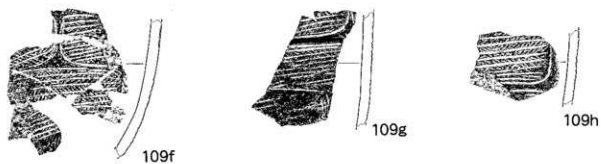


図V-15 包含層の土器(11)

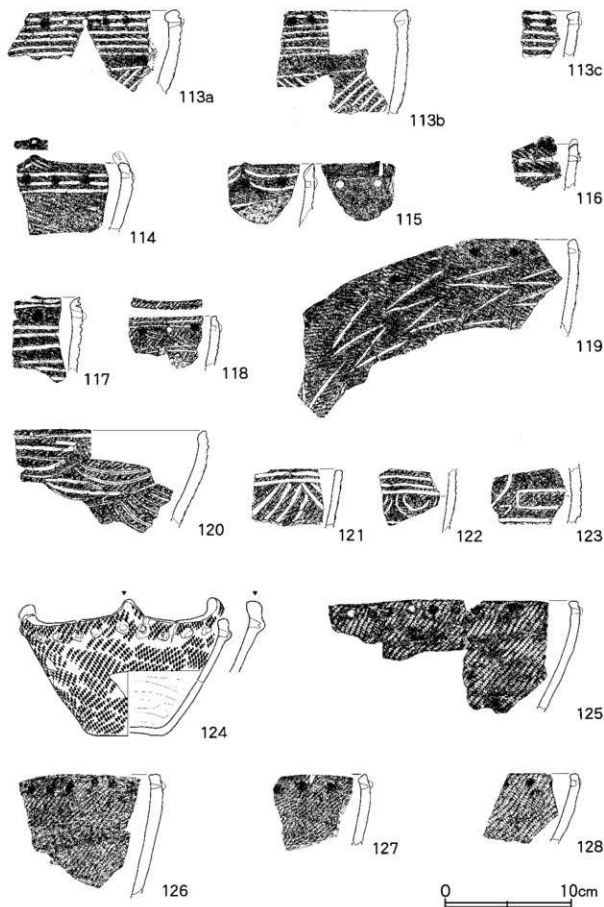


図V-16 包含層の土器(12)

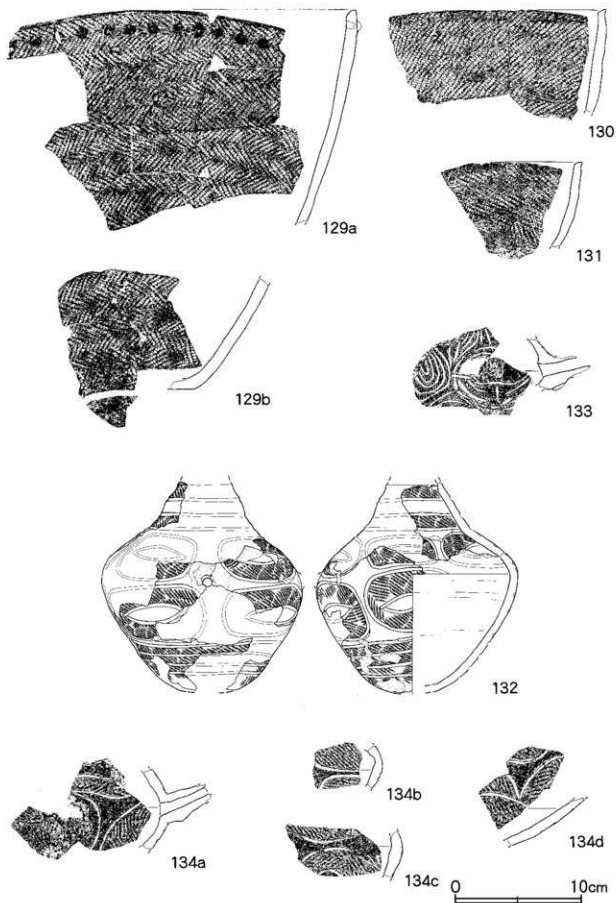
IVc



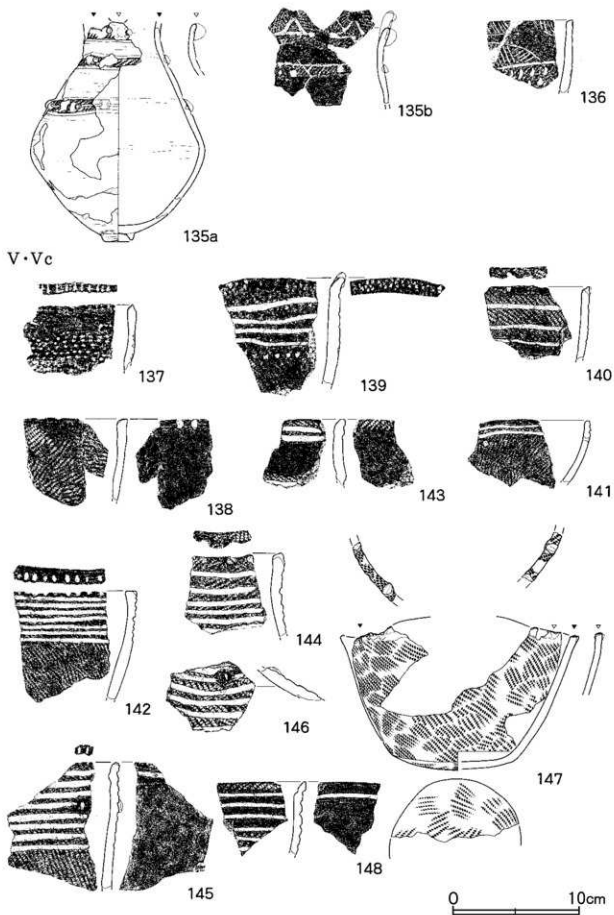
図V-17 包含層の土器(13)



図V-18 包含層の土器(14)



図V-19 包含層の土器(15)



図V-20 包含層の土器(16)

は弱いヨコナデ。146は壺の肩部分の破片である。

147は丸底浅鉢。上面観は楕円形。半分以上を欠くが、長軸上の口縁部は緩やかな山形を呈しており、外側にせり出す器形が推定される。やや丸底気味。地文はRL斜行縄文。縄文は口唇上にも施され、その後、刻みが加えられている。縄文は底面にも施されているが、ほとんど消失している。

148は口唇部断面が切り出し状で精緻な作り。沈線間の斜行縄文を、3条に亘って磨消、無文化化している。口唇内面にも沈線が巡る。大洞系土器。(影浦)

註

- 註1 古手の北筒式と考えられる余市町登町2遺跡の北筒式などに、多段の押引の中、あるいは押引と縄文の境、または口縁部肥厚帯と胴部の境に円形刺突文を付すものがある。
- 註2 貼付で文様帯を構成する北筒式は基本的に道央部および胆振地方沿岸域にしか分布しない。
- 註3 乾・小野・奈良 2006『上幌内モイ遺跡(1)』PP82による。千歳市教育委員会による『梅川4遺跡』で、「胎土は、粒度が均一な細砂粒で、石英を多量に含み光沢がみられる」PP45(田村・乾 2002)と報告されたものも同様の胎土と思われる。
- 註4 数は多くはないが、石狩川水系と道北部・道東部に分布するようである。

表V-2 包含層出土掲載土器一覽

神岡 番号	掲載 番号	図版 番号	発掘区	層位	遺物 番号	点数	接合 点数	分類	部位	整理番号	出土 年度	備考		
V-5	1	17	H-3	V	2	1	1	I b	胴部	拓No. 15	H20年			
V-5	2	17	T-18	V	1	2	2	I b	胴部	拓No. 12	H19年			
V-5	3	17	Q-9	V	1	1	1	II a	胴部	拓No. 16	H20年			
V-5	4	17	M-22	V	1	2	2	II a	胴部	拓No. 13	H19年			
V-5	5	17	N-75	V	11	2	2	II b	胴部	拓A-72	H19年			
V-5	6	17			Q-8	V	6	4	III b	口縁	拓No. 53	H20年		
					R-9	V	6					3	H20年	
V-5	7-a	17	M-37	V	5	7	7	III b	口縁	拓No. 68-a	H20年			
V-5	7-b	17	M-37	V	6	2	2		口縁	拓No. 68-b	H20年			
V-5	8	17	K-11	V	3	1	1	III b	口縁	拓No. 30	H20年			
V-5	9	17	F-33	V	1	3	3	III b	口縁	拓No. 7	H19年			
V-5	10	17	S-9	V	7	1	1	III b	口縁	拓No. 24	H20年	赤彩土器		
V-5	11	17	S-30	磨乱	6	1	1	III b	口縁	拓No. 70	H20年			
V-5	12	17	R-10	V	4	1	1	III b	口縁	拓No. 23	H20年	赤彩土器		
V-5	13	17	S-9	V	1	1	1	III b	胴部	拓No. 42	H20年			
V-5	14	17	S-32	V	5	1	1	III b	胴部	拓No. 71	H20年			
V-6	15	17			I-11	V	3	8	III b	口縁	拓No. 62	H19年		
					B-4	V	1					1	H20年	
					H-0	V	1					1	H20年	
					H-4	V	2					1	H20年	
					H-5	V	5					1	H20年	
					M-4	V	2					1	H20年	
					P-7	V	5					1	H20年	
					S-12	V	6					1	H20年	
V-6	16	17			S-6	V	4	14	III b	口縁~胴部	拓No. 59	H20年		
					T-6	V	4					3	H20年	
					T-6	V	5					5	H20年	
V-6	17	18	S-19	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 11	H19年			
V-6	18	18			Q-17	V	5	3	III b	口縁	拓No. 38	H19年		
					Q-13	V	5					1	H20年	
V-6	19	18	R-4	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 22	H20年	赤彩土器		
V-7	20	18	B-8	V	1	3	3	III b	口縁	拓No. 4	H19年			
V-7	21	18	T-6	V	1	1	1	III b	口縁	拓No. 47	H20年			
V-7	22	18	R-12	V	2	1	2	III b	口縁	拓No. 56	H20年			
V-7	23	18	G-5	V	3	1	1	III b	口縁	拓No. 27	H20年			
V-7	24	18	S-8	磨乱	6	1	1	III b	胴部	拓No. 77	H20年	赤彩土器		
V-7	25	18			J-12	V	1	2	III b	口縁	拓No. 10	H19年		
					H-13	V	2					1	H19年	
V-7	26-a	18	M-13	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 33-a	H20年			
V-7	26-b	18	K-13	V	2	1	1		口縁	拓No. 33-b	H20年			
V-7	27	18	I-5	V	1	1	1	III b	口縁	拓No. 28	H20年			
V-7	28	18	P-40	V	1	3	3	III b	口縁	拓No. 69	H20年			
V-7	29	18	R-4	V	1	1	1	III b	口縁	拓No. 50	H20年			
V-7	30	18			J-10	V	1	2	III b	口縁	拓No. 29	H20年		
					L-5	V	1					1	H20年	
V-7	31	18	Q-15	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 40	H20年			
V-7	32	18	P-9	V	1	3	3	III b	口縁	拓No. 36	H20年			
V-7	33	18	N-5	V	1	1	1	III b	口縁	拓No. 35	H20年			
V-8	34	18	T-12	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 49	H20年			
V-8	35-a	18	R-14	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 55-a	H20年			
V-8	35-b	18	R-10	V	1	1	1	III b	口縁	拓No. 55-b	H20年			
V-8	36	18	B-5	V	1	1	1	III b	口縁	拓No. 25	H20年			
V-8	37	18	R-13	磨乱	1	1	1	III b	口縁	拓No. 57	H20年			
V-8	38	18	J-5	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 21	H20年	赤彩土器		
V-8	39	18	S-13	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 20	H20年	富良野台地系?		
V-8	40	18	M-3	V	4	1	1	III b	口縁	拓No. 32	H20年	富良野台地系?		
V-8	41-a	18	S-69	V	8	1	1	III b	口縁	拓A-14-b	H19年			
V-8	41-b	18	O-70	V	2	2	2	III b	口縁	拓A-14-a	H19年			
V-8	42	18	C-0	V	1	1	1	III b	口縁	拓No. 26	H20年			
V-8	43-a	18	R-9	V	2	1	1	III b	底部	拓No. 54-b	H20年			
V-8	43-b	18	R-9	V	2	1	1		底部	拓No. 54-a	H20年			
V-8	44	18	N-3	V	2	1	1	III b	口縁	拓No. 34	H20年			
V-8	45	18	R-44	V	3	1	1	III b	胴部	拓No. 78	H20年			
V-8	46	18	S-10	V	2	1	1	III b	胴部	拓No. 44	H20年			

挿入 番号	掲載 番号	図版 番号	発掘区	層位	遺物 番号	点数	接合 点数	分類	部位	整理番号	出土 年度	備考
V-9	47	19	M-43	V	2	23	23	Ⅲ b	口縁~胴部	復No. 13	H20年	
V-9	48	19	I-45	V	3	1	30	Ⅲ b	口縁~胴部	復No. 8	H20年	
			K-43	V	1	2					H20年	
			L-37	V	3	20					H20年	
			L-43	V	1	6					H20年	
			N-39	V	3	1					H20年	
V-10	49-a	19	M-5	V	1	1	2	Ⅲ b	口縁	拓No. 60-a	H19年	赤彩土器
J-6	V	1	1	H20年								
V-10	49-b	19	D-11	Ⅵ	3	1	5	Ⅲ b	底部	拓No. 60-b	H19年	
			I-6	V	1	1					H19年	
			J-4	V	1	1					H19年	
			K-10	V	3	2				H19年		
V-10	50	19	S-12	V	2	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 45	H20年	
V-10	51	19	S-9	V	1	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 43	H20年	
V-10	52	19	J-19	V	2	1	2	Ⅲ b	口縁	拓No. 9	H19年	
			R-10	V	1	1				H20年		
V-10	53-a	19	H-7	V	1	1	2	Ⅲ b	口縁	拓No. 31-b	H20年	
			K-6	V	1	1					H20年	
V-10	53-b	19	K-4	V	2	2	2	Ⅲ b	口縁	拓No. 31-a	H20年	
			K-4	V	2	2	H20年					
V-10	54	19	E-6	V	6	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 6	H19年	
V-10	55	19	R-9	V	2	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 52	H20年	
V-10	56	19	R-8	V	2	3	4	Ⅲ b	口縁	拓No. 51	H20年	
			R-9	V	2	1					H20年	
V-10	57	19	N-84	V	81	1	1	Ⅲ b	胴部	拓A-13	H19年	
V-10	58	19	T-8	V	1	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 48	H20年	
V-10	59	19	P-10	V	1	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 37	H20年	
V-10	60	19	P-9	V	3	9	9	Ⅲ b	底部	拓No. 63	H20年	
V-10	61	20	C-8	V	3	5	8	Ⅲ b	底部	拓No. 5	H19年	
			C-8	V	6	1					H19年	
			C-9	V	1	1					H19年	
			E-9	V	2	1					H19年	
V-11	62	20	K-40	V	2	7	8	Ⅲ b	底部	拓No. 76	H20年	
			O-43	V	1	1				H20年		
V-11	63	20	Q-15	V	2	1	1	Ⅲ b	底部	拓No. 41	H20年	
V-11	64	20	Q-11	V	1	1	1	Ⅲ b	底部	拓No. 39	H20年	
V-11	65	20	L-3	V	1	7	7	Ⅲ b	底部	拓No. 73	H19年	B調
V-11	66	20	R-6	V	2	4	4	Ⅲ b	底部	復No. 3	H20年	
V-11	67	20	G-31	V	1	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 8	H19年	
V-11	68	20	N-39	V	3	1	4	Ⅲ b	口縁	拓No. 74	H20年	
			O-40	V	2	1					H20年	
			O-41	V	3	1					H20年	
			P-40	V	1	1					H20年	
V-11	69	20	Q-80	V	158	1	1	Ⅲ b	口縁	拓A-15	H19年	
V-11	70	20	S-70	V	5	1	1	Ⅲ b	口縁	拓A-17	H19年	
V-11	71	20	M-74	V	8	1	1	Ⅲ b	胴部	拓A-12	H19年	
V-11	72	20	O-3	V	1	12	12	Ⅲ b	底部	復No. 6	H20年	
V-11	73	20	S-13	V	2	1	1	Ⅲ b	口縁	拓No. 46	H20年	
V-11	74	20	J-77	V	4	1	1	Ⅲ b	底部	拓A-10	H19年	
V-12	75-a	21	H-72	V	9	1	2	Ⅳ a	口縁	拓A-18-a	H19年	
			J-72	V	11	1					H19年	
V-12	75-b	21	J-72	V	13	1			胴部	拓A-18-b	H19年	
V-12	76	21	Q-18	V	3	1	1	Ⅳ a	口縁	拓No. 2	H19年	
V-12	77	21	N-84	V	82	1	1	Ⅳ a	口縁	拓A-22	H19年	
V-12	78	21	M-84	V	20	2	2	Ⅳ a	口縁	拓A-21	H19年	
V-12	79	21	L-81	V	7	1	1	Ⅳ a	胴部	拓A-20	H19年	
V-12	80-a	21	K-86	V	41	1	1	Ⅳ a	口縁	拓A-28-a	H19年	
V-12	80-b	21	K-86	V	42	2	2	Ⅳ a	胴部	拓A-28-b	H19年	
V-12	81	21	B-4	V	2	4	4	Ⅳ b	口縁	拓No. 17	H20年	
V-12	82	21	K-86	V	10	4	4	Ⅳ b	口縁	拓A-29	H19年	
V-12	83	21	K-85	V	8	1	1	Ⅳ b	口縁	拓A-26	H19年	
V-12	84	21	L-81	V	15	1	1	Ⅳ b	口縁	拓A-31	H19年	
V-12	85	21	N-82	V	46	1	1	Ⅳ b	口縁	拓A-33	H19年	
V-12	86	21	K-83	V	8	2	3	Ⅳ b	口縁	拓A-24	H19年	
			L-83	V	11	1					H19年	
V-12	87	21	L-83	V	11	1	1	Ⅳ b	胴部	拓A-32	H19年	

V 包含層 (第II黒色土層) 出土の遺物

挿入 番号	掲載 番号	図版 番号	発掘区	層位	遺物 番号	点数	接合 点数	分類	部位	整理番号	出土 年度	備考	
V-12	88-a	21	M-85	V	37	1	6	IV b	口縁	拓A-37-a	H19年		
			N-87	V	55	1					H19年		
			O-87	V	105	4					H19年		
V-12	88-b	21	P-84	V	81	1	2		口縁	拓A-37-b	H19年		
			Q-84	V	23	1					H19年		
V-12	88-c	21	N-87	V	46	1	2		口縁	拓A-37-c	H19年		
			O-87	V	105	1					H19年		
V-13	88-d	22	O-85	V	108	1	1		1	口縁	拓A-37-d		H19年
V-13	88-e	22	O-87	V	105	1	1						H19年
V-13	88-f	22	P-86	V	143	1	3		胴部	拓A-37-f	H19年		
			Q-88	V	36	2		H19年					
V-13	88-g	22	M-86	V	45	1	3	胴部	拓A-37-g	H19年			
			O-85	V	91	1				H19年			
			O-87	V	105	1				H19年			
V-13	89-a	22	S-8	V	11	1	1	IV b	口縁	拓No.61-b	H20年		
V-13	89-b	22	S-8	V	11	1	2	IV b	口縁	拓No.61-c	H20年		
			S-8	V	12	1					H20年		
V-13	89-c	22	R-5	V	1	1	1	IV b	底部	拓No.61-a	H20年		
V-13	90	22	I-38	V	6	50	68	IV b	胴部~底部	復No.14	H20年		
			I-38	V	8	18					H20年		
V-13	91	22	N-32	V	3	13	13	IV b	口縁~胴部	拓No.65	H20年		
V-13	92	22	K-86	V	7	1	1	IV b	口縁	拓A-27	H19年		
V-13	93	22	K-85	V	4	1	1	IV b	胴部	拓A-25	H19年		
V-13	94	22	R-32	V	4	4	28	IV b	口縁~胴部	拓No.66	H20年		
			R-33	V	3	23					H20年		
			R-33	V	5	1					H20年		
V-14	95	22	O-45	V	2	7	63	IV b	口縁~胴部	復No.12	H20年		
			O-45	V	4	56					H20年		
V-15	96	23	K-85	V	8	12	12	IV b	口縁~底部	復A-2	H19年		
			I-19	V	1	12					H19年		
V-15	97	23	I-20	V	2	28	41	IV b	口縁~胴部	復No.4	H19年		
			I-20	V	4	1					H19年		
V-15	98-a	23	P-78	V	184	1	1	IV b	胴部	拓A-35-c	H19年		
V-15	98-b	23	P-78	V	184	3	3		胴部	拓A-35-b	H19年		
V-15	98-c	23	P-78	V	184	3	3		胴部	拓A-35-a	H19年		
V-15	99	23	L-86	V	15	4	42	IV b	口縁~胴部	復A-4	H19年		
			K-86	V	7	16					H19年		
			K-86	V	10	22					H19年		
V-15	100	23	R-78	V	262	1	1	IV b	口縁	拓A-36	H19年		
V-15	101	23	J-35	V	5	1	1	IV b	口縁	拓No.72	H20年		
V-15	102-a	23	R-31	V	8	79	102	IV b	口縁	復No.10-1	H20年		
V-15	102-b	23	R-31	V	8	23					底部	復No.10-2	H20年
V-16	103	24	I-35	V	8	64	64	IV b	口縁~胴部	復No.11	H20年		
			M-86	V	23	1					H19年		
V-16	104	24	M-86	V	24	2	3	IV b	口縁	拓A-51	H19年		
V-16	105	24	J-86	V	3	1	1	IV b	口縁	拓A-23	H19年		
V-16	106	24	G-6	V	2	7	40	IV b	胴部~底部	復No.5	H20年		
			G-7	V	1	33					H20年		
V-16	107	24	N-84	V	76	1	1	IV b	口縁	拓A-34	H19年		
V-16	108	24	I-36	V	6	85	85	IV b	胴部~底部	復No.9	H20年		
V-17	109-a	25	F-71	V	7	3	3	IV c	口縁	拓A-58-a	H19年		
V-17	109-b	25	F-71	V	7	1	1				口縁	拓A-58-b	H19年
V-17	109-c	25	F-71	V	2	1	1		口縁	拓A-58-c	H19年		
V-17	109-d	25	G-71	V	4	1	1		口縁	拓A-58-d	H19年		
V-17	109-e	25	G-72	V	4	1	1		口縁	拓A-58-e	H19年		
V-17	109-f	25	F-71	V	7	7	7		胴部	拓A-58-f	H19年		
V-17	109-g	25	F-71	V	7	3	3		胴部	拓A-58-g	H19年		
V-17	109-h	25	F-71	V	7	2	2		胴部	拓A-58-h	H19年		
V-17	110	25	K-85	V	5	1	28		IV c	口縁~胴部	復A-6	H19年	
			M-85	V	43	13						H19年	
			O-84	V	154	1		H19年					
			O-85	V	92	7		H19年					
			P-85	V	100	6		H19年					
V-17	111-a	25	M-86	V	24	2	2	IV c	口縁	拓A-55-a	H19年		
V-17	111-b	25	L-86	V	10	1	2	IV c	口縁	拓A-55-b	H19年		
			M-86	V	24	1					H19年		

挿入 番号	掲載 番号	図版 番号	発掘区	層位	遺物 番号	点数	接合 点数	分類	部位	整理番号	出土 年度	備考
V-17	111-c	25	M-86	V	24	1	1		口縁	拓A-55-c	H19年	
V-17	112	25	F-71	V	7	2	4	IV c	口縁	拓A-70	H19年	
			G-72	V	4	2					H19年	
V-18	113-a	25	L-82	V	16	1	3		口縁	拓A-56-a	H19年	
			P-86	V	125	1					H19年	
			P-86	V	127	1					H19年	
V-18	113-b	25	O-85	V	92	1	2		口縁	拓A-56-b	H19年	
			R-86	V	30	1					H19年	
V-18	113-c	25	L-83	V	12	1	1		口縁	拓A-56-c	H19年	
V-18	114	25	F-71	V	7	1	1	IV c	口縁	拓A-38	H19年	
V-18	115	25	G-70	V	6	1	1	IV c	胴部	拓A-41	H19年	
V-18	116	25	F-28	V	1	1	1	IV c	口縁	拓No.14	H19年	
V-18	117	25	K-81	V	9	1	1	IV c	口縁	拓A-46	H20年	
V-18	118	25	J-82	V	10	1	2	IV c	口縁	拓A-42	H19年	
			Q-85	V	86	1					H19年	
			K-81	V	4	1					H19年	
V-18	119	25	K-81	V	9	2	7	IV c	口縁	拓A-54	H19年	
			K-82	V	6	4					H19年	
V-18	120	25	K-82	V	6	3	3	IV c	口縁	拓A-47	H19年	
V-18	121	25	P-87	V	48	1	1	IV c	口縁	拓A-53	H19年	
V-18	122	26	G-70	V	6	1	1	IV c	口縁	拓A-39	H19年	
V-18	123	26	N-85	V	103	1	1	IV c	胴部	拓A-52	H19年	
V-18	124	26	M-86	V	24	10	11	IV c	口縁~底部	復A-1	H19年	
			Q-85	V	84	1					H19年	
			P-85	V	100	2	3	IV c	口縁	拓A-71	H19年	
			P-85	V	103	1					H19年	
V-18	126	26	J-84	V	7	2	2	IV c	口縁	拓A-43	H19年	
V-18	127	26	J-84	V	9	2	2	IV c	口縁	拓A-44	H19年	
V-18	128	26	J-84	V	9	1	1	IV c	口縁	拓A-45	H19年	
			L-86	V	10	6	10				H19年	
V-19	129-a	26	L-86	V	16	1	1		口縁	拓A-69-a	H19年	
			M-86	V	24	3	4	IV c			H19年	
			L-86	V	10	1					H19年	
V-19	129-b	26	M-85	V	43	1	4		胴部	拓A-69-b	H19年	
			M-86	V	24	2					H19年	
V-19	130	26	M-85	V	43	2	2	IV c	口縁	拓A-49	H19年	
V-19	131	26	M-85	V	43	1	1	IV c	口縁	拓A-50	H19年	
			O-84	V	103	3	39	IV c	胴部~底部	復A-7	H19年	注口
			O-84	V	104	1					H19年	
			P-84	V	66	35					H19年	
V-19	133	27	G-70	V	6	1	1	IV c	胴部	拓A-40	H19年	注口
			K-79	V	8	1					H19年	
V-19	134-a	27	R-75	V	29	1	3		胴部	拓A-57-a	H19年	
			R-76	V	128	1					H19年	
V-19	134-b	27	N-85	V	100	1	1	IV c	胴部	拓A-57-d	H19年	注口
V-19	134-c	27	M-75	V	22	2	2		胴部	拓A-57-c	H19年	
V-19	134-d	27	K-86	V	9	1	2		胴部	拓A-57-b	H19年	
			M-85	V	43	1					H19年	
V-20	135-a	27	H-3	V	4	2	32	IV c	胴部~底部	復No.2-1	H19年	
			H-6	V	2	24			口縁~胴部	復No.2-2	H20年	
V-20	135-b	27	H-6	V	2	6			口縁	復No.2-3	H20年	
V-20	136	27	L-80	V	12	2	2	IV c	口縁	拓A-48	H20年	
V-20	137	27	S-8	V	3	1	1	V c	口縁	拓No.18	H19年	
V-20	138	27	Q-84	V	31	1	2	V c	口縁	拓A-63	H20年	
			Q-85	V	83	1					H19年	
V-20	139	27	S-81	V	107	1	1	V c	口縁	拓A-66	H19年	
V-20	140	27	R-78	V	263	1	1	V c	口縁	拓A-64	H19年	
V-20	141	27	L-83	V	13	1	2	V c	口縁	拓A-59	H19年	
			N-74	V	14	1					H19年	
V-20	142	27	Q-75	V	43	1	1	V c	口縁	拓A-62	H19年	
V-20	143	27	S-82	V	115	1	1	V c	口縁	拓A-67	H19年	
V-20	144	27	S-83	V	33	1	1	V c	口縁	拓A-68	H19年	
V-20	145	27	Q-81	V	138	1	1	V c	口縁	拓A-61	H19年	
V-20	146	27	O-81	V	58	1	1	V c	胴部	拓A-60	H19年	
V-20	147	27	S-83	V	33	5	5	V c	口縁~底部	復A-3	H19年	
V-20	148	27	S-81	V	100	1	1	V c	口縁	拓A-65	H19年	

2 石器・石製品

概要(図V-21~23、表V-3)

包含層V層(第II黒色土層)からは144,540点の石器が出土した。うち剥片が141,605点で、98%を占める。

石槍・ナイフ類が比較的多いが、大きく破損したものや、製作途中の未成品がほとんどで、両面調整石器との分類に重なりがある。剥片石器は大半が黒曜石製であるが、つまみ付きナイフには頁岩製が多い。表V-3の矢柄研磨器5点は、攪乱より出土しており、III層(第I黒色土層)時期の遺物と考えられる。このため、攪乱から出土した石器は基本的に図示していない。

分布を見ると、ほとんどの石器が南側の地区で多く出土しているが、石鏃・石斧は北側の地区に比較的多く見られる。調査区南側と北側では土器の時期の傾向が異なることから、石器も器種によって時期を反映していると思われる。

石器の実測図は、スペースの都合上、番号やページが前後する事がある。また、器種により縮尺を変えて掲載している。剥片石器・石斧類・石製品は2分の1、礫石器は3分の1、岩偶は等倍で図示した。それぞれの縮尺は、図ごとにスケールで示した。

石器の計測は、図の正面を水平・垂直に囲む最大長方形を想定し、長い辺の値を長さ、それに直交する辺の値を幅とした。厚さは、図上の側面を同じく長方形で囲んだ場合の値を示した。剥片石器はデジタルノギスを用いて計測し、小数点第2位まで記載したこともある。

細石刃(図V-24-1・2、表V-4、図版28)

包含層から計4点出土した。いずれも黒曜石製である。うち2点は攪乱からの出土のため、図示していない。掲載の2点はいずれも末端部を欠損している。幅はほぼ均一で、打点を持ち、平面形が若干に湾曲している。同じ千歳市内の祝梅川上田遺跡(梅川4遺跡から約1.3km南)の平成18年調査で、78点の細石刃が出土している(北埋調報第238集)。

石鏃(図V-24・25-3~72、表V-4、図版28)

包含層から361点出土した。うち70点掲載した。3~10、13・14、17、19~21、23は平基無莖形、11・12、15・16、18、22は凹基無莖形、24~26は有莖未成品、27・28は凹基、29~31は柳葉形、32~72は有莖である。49、65は未成品である。35、55は珪質頁岩製、18、68・69は頁岩製、それ以外は黒曜石製である。

石槍・ナイフ類(図V-25・26-73~106、表V-4、図版28・29)

包含層から破片も含めて361点出土した。うち34点掲載した。掲載のものは全て有莖である。73・74、83・84、88、91、95、99、103・104は平面形が左右非対称のナイフ、それ以外は石槍である。73、75、80~84、87、90・91、94、96、98・99、101、104は、基部と莖部の境界が明瞭でない。74~79、84、88、91は先端を再生している。81、83、99は未成品である。98、101は2つの破片が接合したもの。105は未成品基部の破片である。106は先端を欠損しており、石鏃の可能性がある。86は頁岩製、それ以外はすべて黒曜石製である。

表V-3 包含層出土石器点数一覧

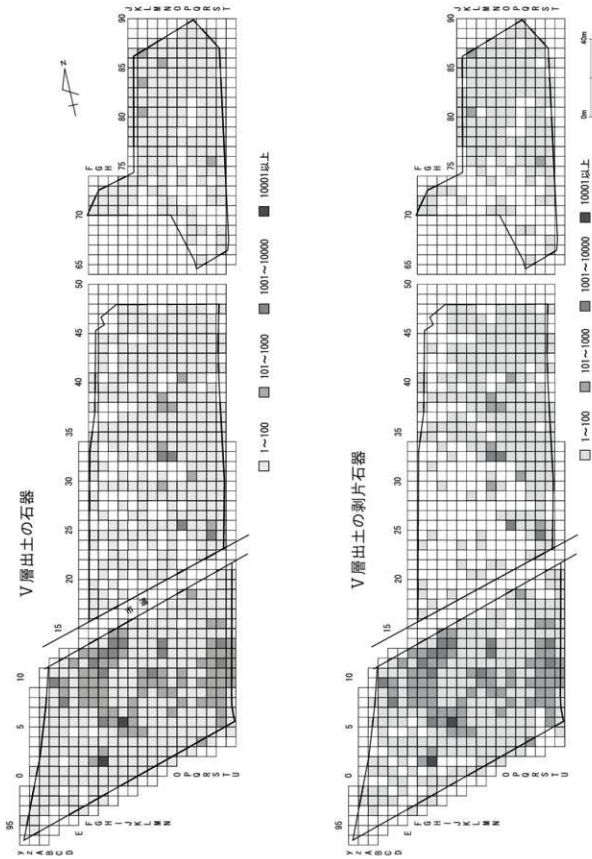
分類 層位	細石刃	石鏃	石槍・ ナイフ類	石錐	つまみ付 きナイフ	スクレ イバー	両面調 整石器	U剥片
V	1	239	343	10	21	74	98	205
VI	1	2	1			1		
攪乱 排土 不明	2	120	17	2	2	175	17	8
計	4	361	361	12	23	250	115	213

分類 層位	R剥片	楔形石器	石核	原石	剥片	石のみ	石斧・ 石斧片	擦り切 り残片
V	122	6	42	4	141,605	5	336	1
VI					512		2	
攪乱 排土 不明	145	1	17	6	21,769		31	
計	267	7	59	10	163,886	5	369	1

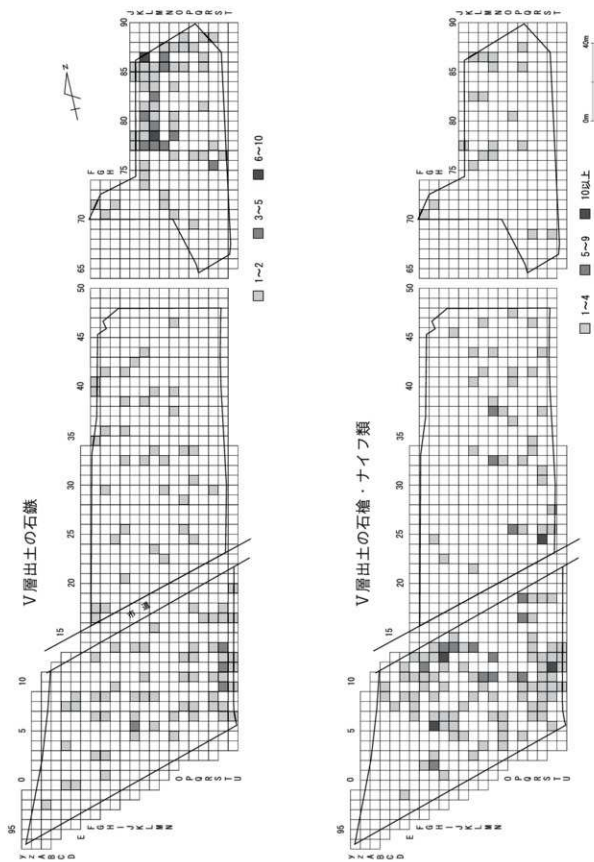
分類 層位	石斧原材	研磨石材	たたき石	扁平打 製石器	北海道 式石冠	すり石	矢柄 研磨器	石鋸
V	16		77	1	17	14		2
VI			2					
攪乱 排土 不明	1	1	11			2	5	1
計	17	1	90	1	17	16	5	3

分類 層位	砥石	石皿	台石	加工痕 のある礫	礫・礫片	石製品	計
V	43	71	5	21	1,153	8	144,540
VI				2	16		539
攪乱 排土 不明	14	2		8	69	1	22,427
計	57	73	5	31	1,238	9	167,506

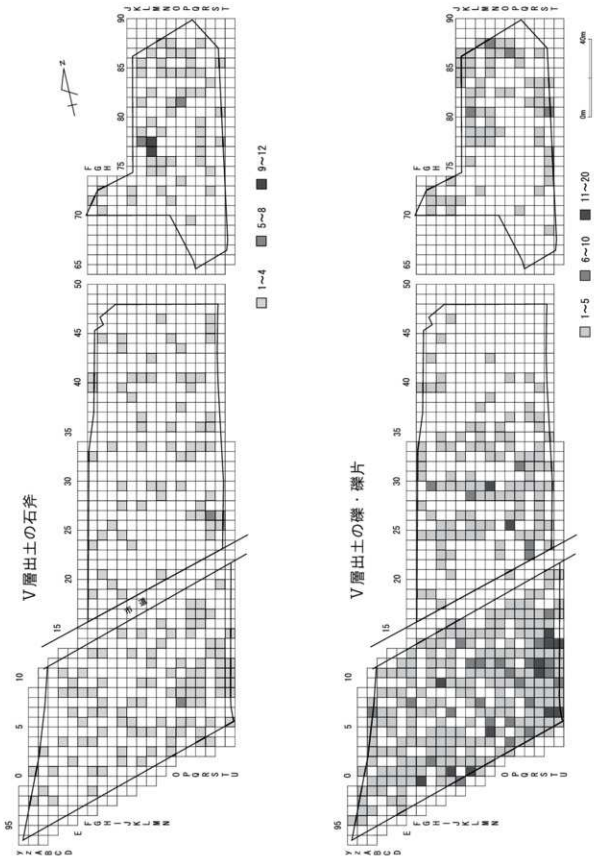
※攪乱はⅢ層の攪乱も合算されている。風倒木痕も含む。



図V-21 包含層出土石器分布図(1)



図V-22 包含層出土石器分布図(2)



図V-23 包含層出土石器分布図(3)

石錐 (図V-26-107~109、表V-4、図版29)

包含層から12点出土した。うち完形品3点を掲載した。107は素材の両面を調整している。108は片岩の素材を研磨し、錐部を作出している。基部にも部分的に研磨痕が残る。109は厚手の剥片の下端に、両面調整により錐部が作られている。基部には原石面が残る。107、109は黒曜石製である。

つまみ付きナイフ (図V-26-27-110~123、表V-4、図版29)

包含層から23点出土した。うち14点掲載した。背面は、周縁とつまみ部分の挟りを中心に調整されている。腹面は、つまみ部分の挟り周辺に調整がある。118はつまみ部分のみ両面加工である。119、121は、腹面の下端周縁に若干の剥離調整がある。119の背面には原石面が残る。111はめのう製、118・119は黒曜石製、他は頁岩製である。

スクレイパー (図V-27-28-124~155、表V-4、図版30)

包含層から破片・未成品も含め250点出土した。うち32点掲載した。124~128は平面形が円~楕円形の素材を利用している。129~132は長短軸比が小さい剥片である。133~155は縦長剥片を加工している。129、145・146、151・152は頁岩製、132はめのう製、149は玄武岩製である。

両面調整石器 (図V-29-156~159、表V-4、図版30)

包含層から115点出土している。うち4点を掲載した。158は背面に原石面が残る。159は石楕の未成品か。いずれも黒曜石製である。

R剥片 (図V-29-160~162、表V-4、図版30)

包含層から267点出土している。うち3点掲載した。160は横長、161・162は縦長剥片に剥離調整がある。160・161の石材は黒曜石、162は頁岩である。

楔形石器 (図V-29-163、表V-4、図版30)

包含層から7点出土している。うち1点掲載した。原石面の残る素材を使っている。剥片の上端・下端に使用による剥離がみられる。石材は黒曜石である。

石核 (図V-29-164~170、表V-4、図版30)

包含層から59点出土している。うち7点掲載した。いずれも原石面を残す。167・168は2つの破片がそれぞれ接合したものである。石材は全て黒曜石である。

原石 (図V-29-171、表V-4、図版30)

原石は包含層から10点出土している。うち1点はめのうの原石である。それ以外の9点は黒曜石の原石である。1点を掲載した。

石のみ (図V-29-172~175、表V-4、図版30)

包含層から5点出土しており、うち4点掲載した。172は側縁と刃部に研磨痕がある。173は縦長素材に両側縁を剥離調整したのち、刃部を研磨により作り出す。基部には原石面が残る。174は剥離調整によって縦長に成形した素材を全体研磨により仕上げている。刃部を1/2欠いている。175は細

長い素材全体を研磨し、刃部となる部分に剥離調整と研磨がほどこされる。断面は厚みのある台形形である。175の石材は泥岩、それ以外は片岩である。

石斧 (図V-30~32-176~200、表V-4、図版31・32)

包含層から破片も含め369点出土した。うち25点掲載した。176~179、186・187は刃部片、180、185、194、197は基部片である。180は敲打による成形後、研磨している。182、185は剥離調整で成形後、部分的に研磨している。184は失った刃部を研磨加工により再生している。197は剥離調整、敲打調整、研磨痕がみられる。198は剥離調整による成形にとどまり、未成品である。石材は183、187、197・198、200が片岩、それ以外は泥岩である。

たたき石 (図V-33-201~209、表V-4、図版33)

包含層から90点出土した。うち9点掲載した。201~204は玄武岩の握りこぶし大の円礫を利用したものである。205は安山岩の長円形の素材の上下両端と左右両側縁を使用している。206は扁平な砂岩礫の広い両面を使用している。207~209は棒状の砂岩礫の一端、あるいは両端を使用している。

北海道式石冠 (図V-33・34-210~214、表V-4、図版33・34)

包含層から破片も含め、17点出土した。うち5点を掲載した。210はすり面を大きく欠損している。214はほぼ完形である。石材は211が片麻岩、それ以外は砂岩である。

すり石 (図V-34-215~218、表V-4、図版34)

包含層から16点出土した。うち4点を掲載した。217以外は破片である。216は断面三角形のすり石の一部である。217は楕円礫全体を擦っており、周縁に敲打痕が残る。218は扁平楕円礫の長い方の一辺を使用している。石材は、216が砂岩、それ以外は安山岩である。

石鋸 (図V-34-219、表V-4、図版34)

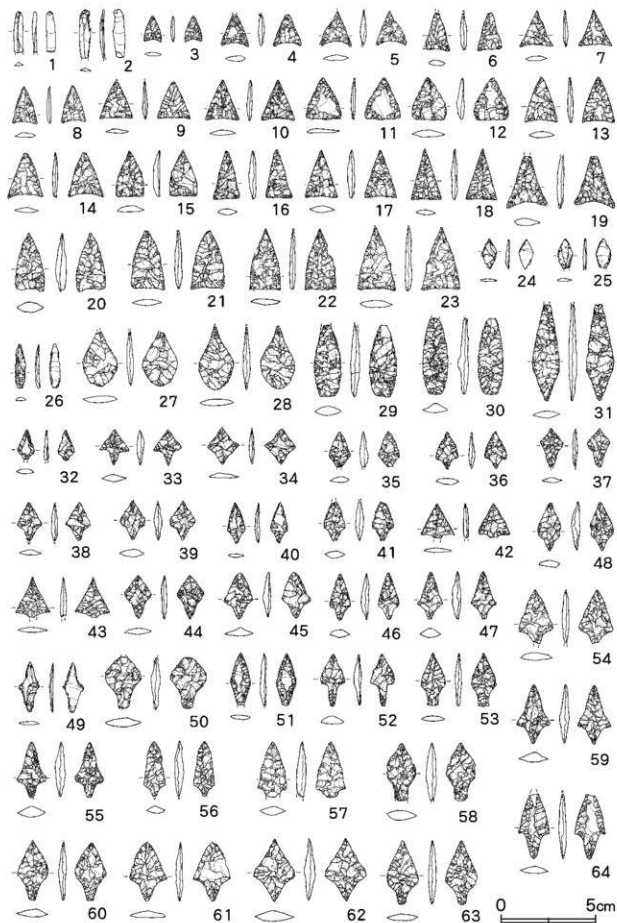
包含層から3点出土している。うち1点を掲載した。219は板状の砂岩礫の一端を使用している。平面の両脇には挟りの加工があり、また敲打痕もみられる。

砥石 (図V-34・35-220~225、表V-4、図版34・35)

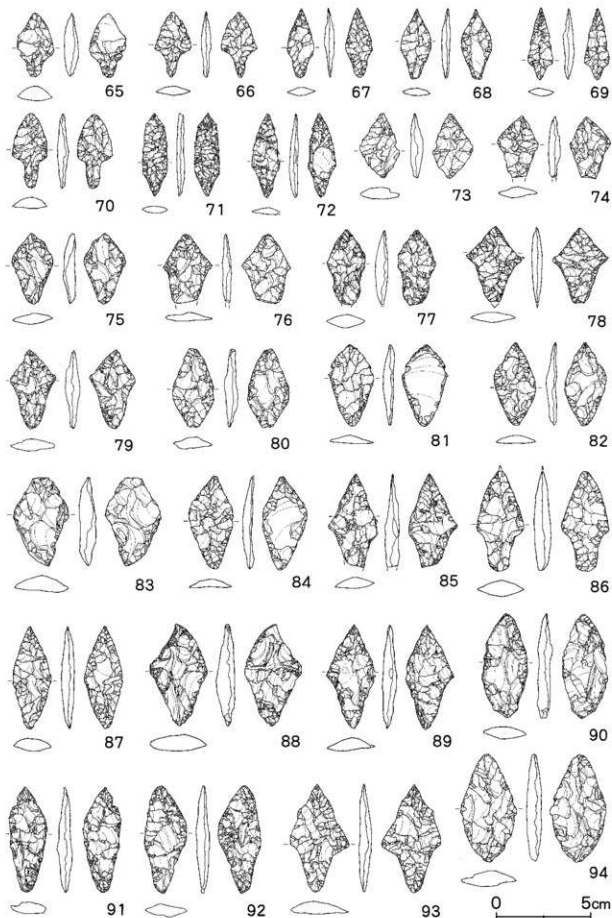
包含層から57点出土している。うち6点掲載した。掲載したものはいずれも砂岩である。220・221は同じグリッドから出土したものである。222・223は扁平礫の表裏両面を使用している。敲打調整で成形した痕もみられる。224は断面長方形の礫で、破損面以外は全て使用している。225は7点の破片が接合したもので、厚みのある礫の片面を利用している。

石皿 (図V-35-226・227、表V-4、図版35)

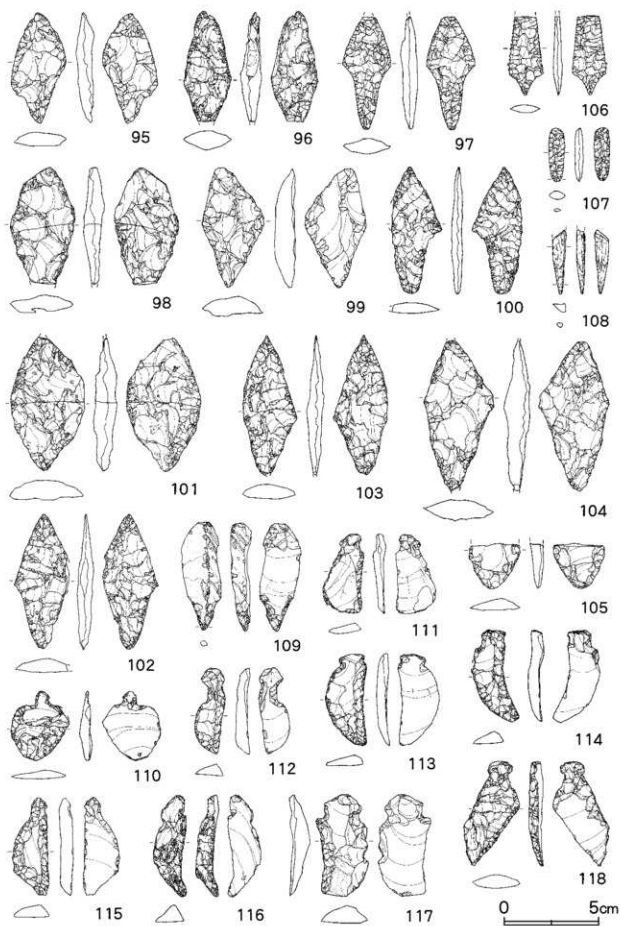
包含層から破片も含め73点出土している。226は破片であるが、片面を利用している。227はグリッドの異なる29点の破片が接合した。24cmほどの円礫の片面が利用されている。被熱している。いずれも安山岩の礫を使用している。



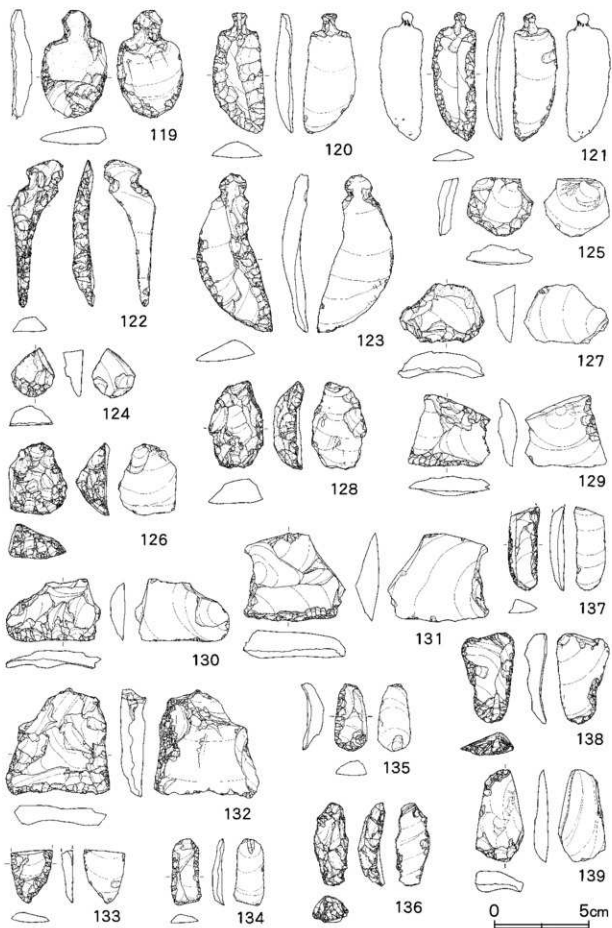
図V-24 包含層の石器(1)



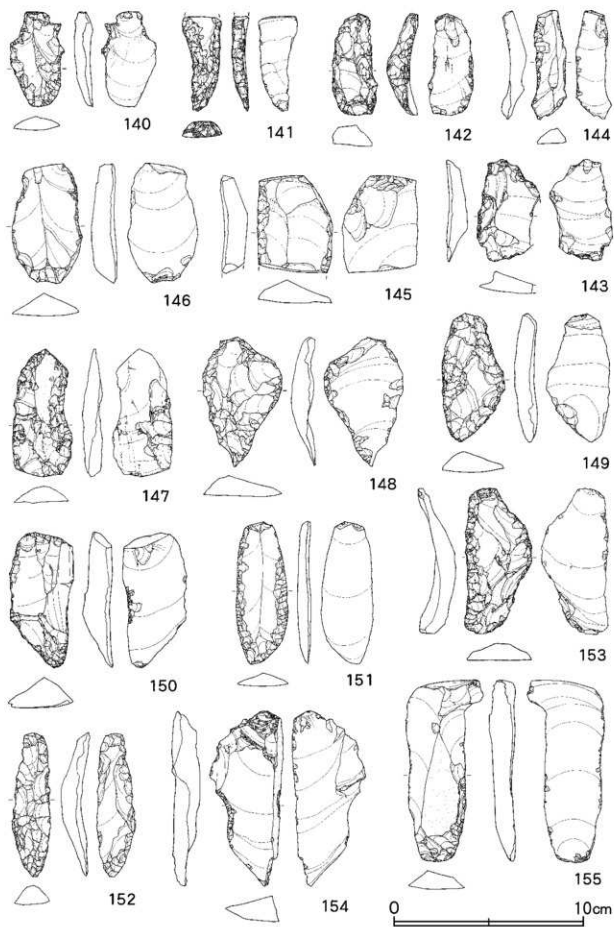
図V-25 包含層の石器(2)



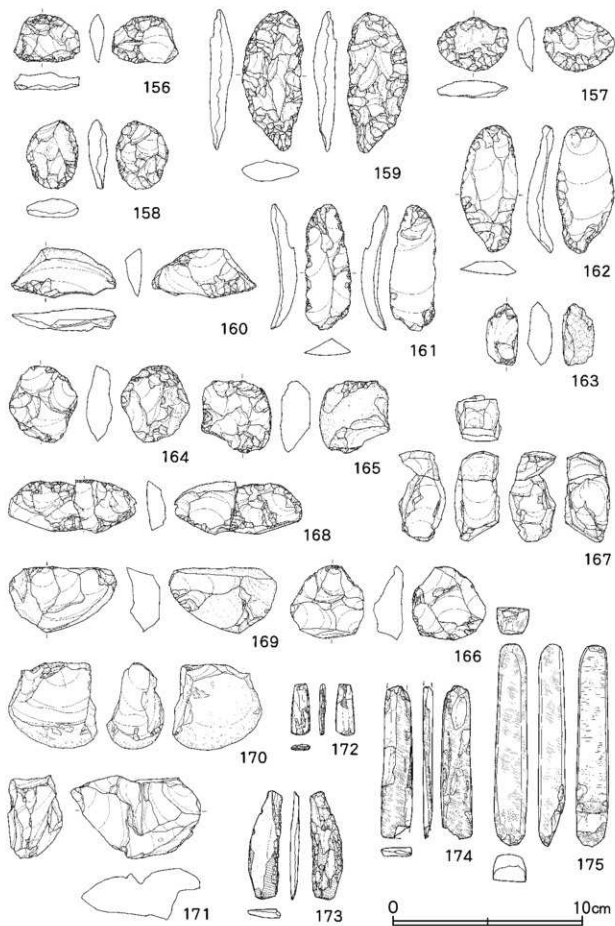
図V-26 包含層の石器(3)



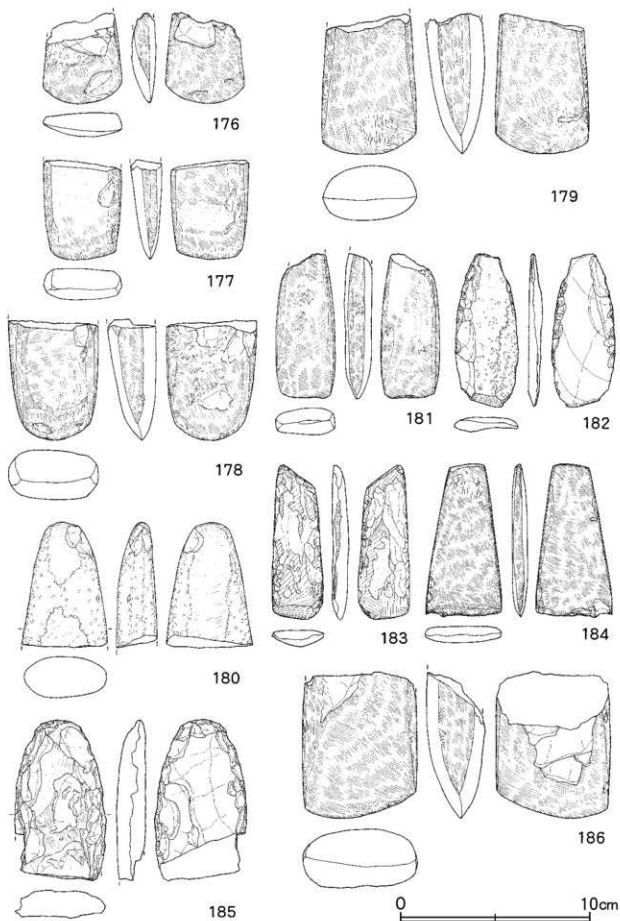
図V-27 包含層の石器(4)



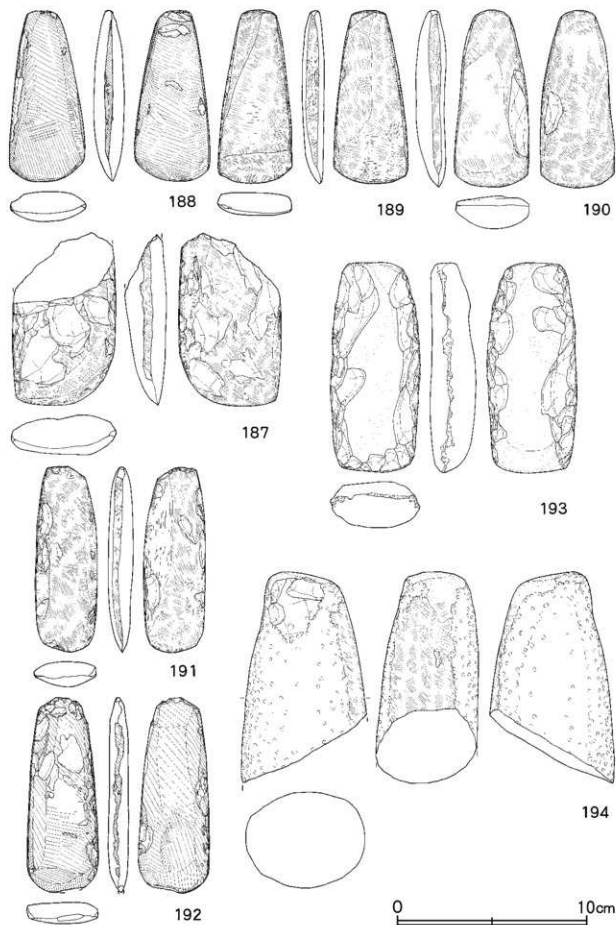
図V-28 包含層の石器(5)



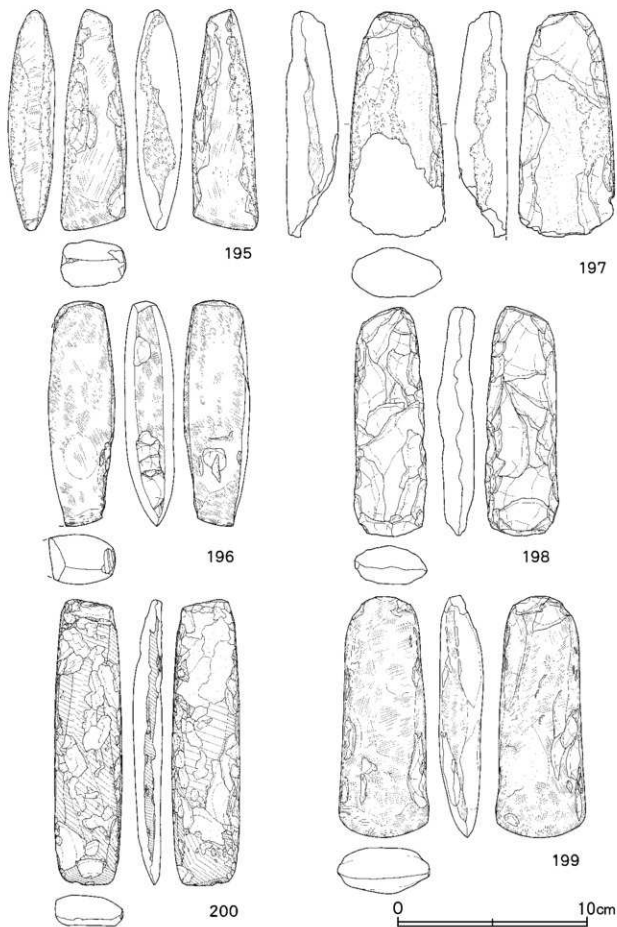
図V-29 包含層の石器(6)



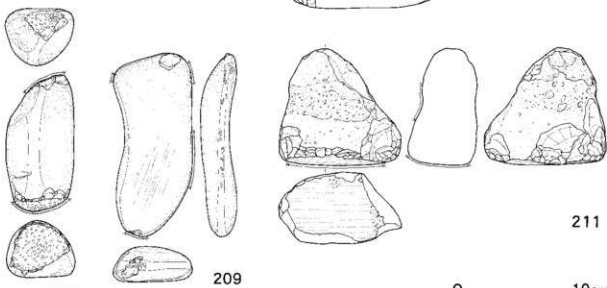
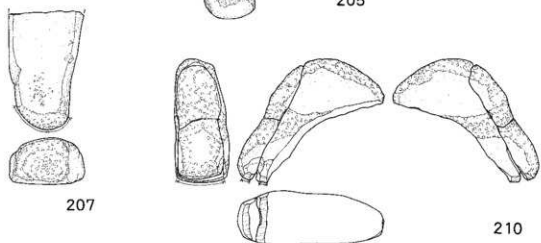
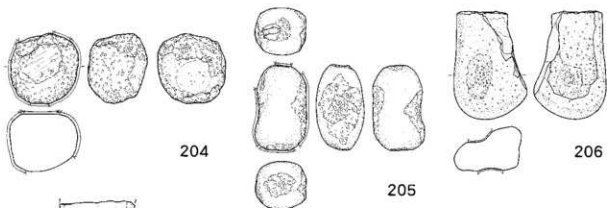
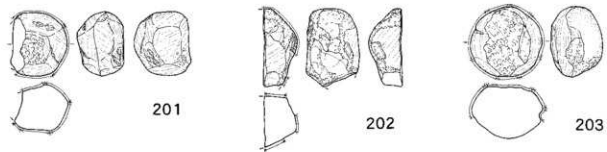
図V-30 包含層の石器(7)



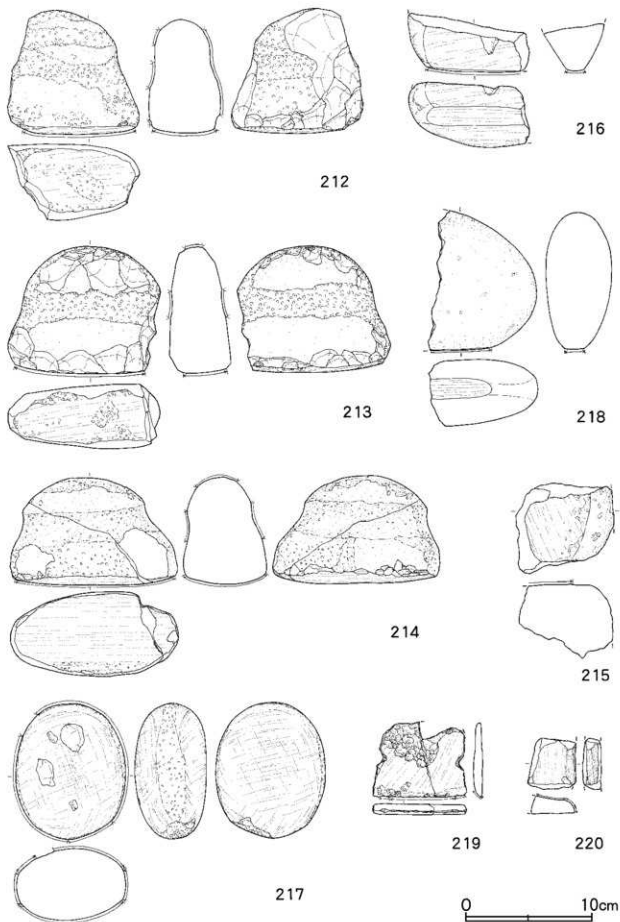
図V-31 包含層の石器(8)



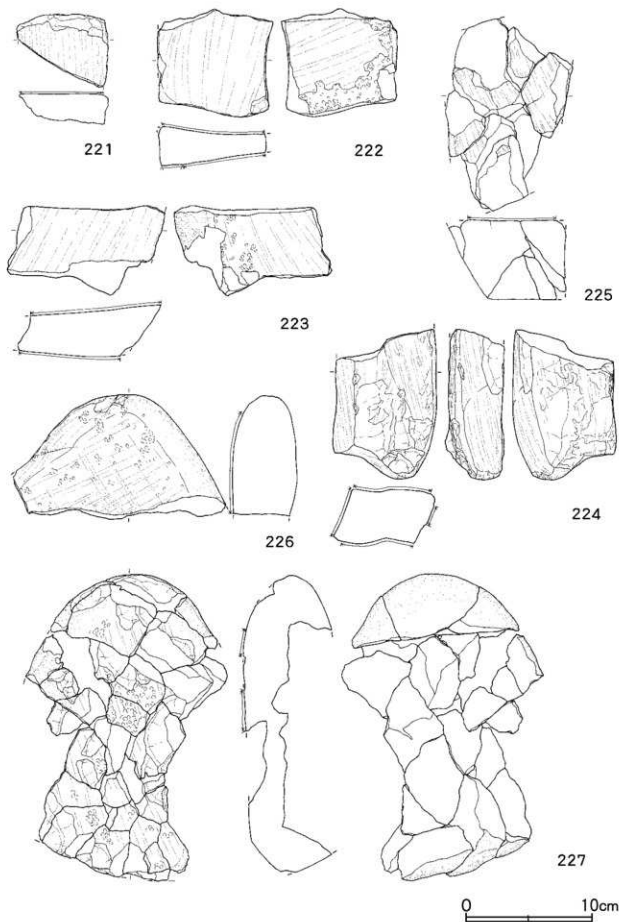
図V-32 包含層の石器(9)



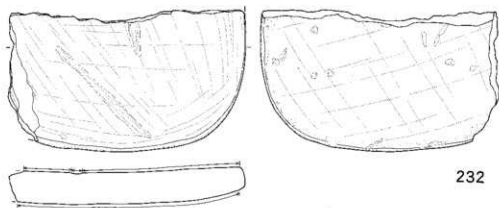
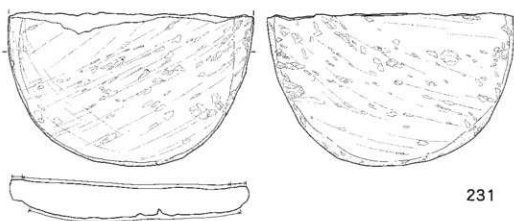
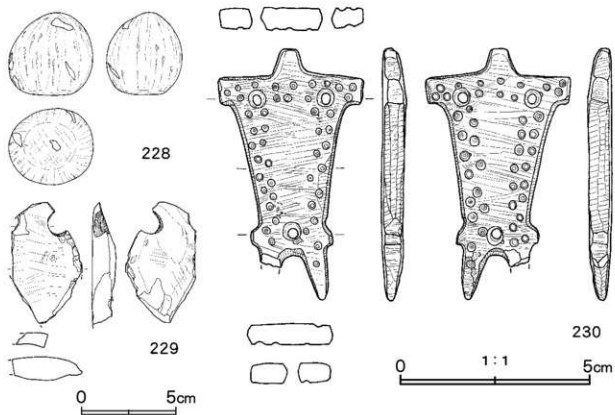
図V-33 包含層の石器(10)



図V-34 包含層の石器(11)



図V-35 包含層の石器(12)



0 10cm

図V-36 包含層の石製品

石製品 (図V-36-228~232、表V-4、口絵2、図版12・36)

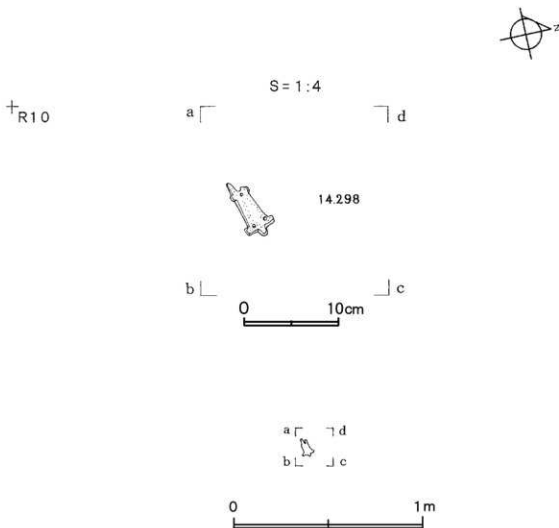
包含層から9点出土した。うち5点掲載した。228は軽石を球形に研磨したもの。229は緑泥石岩製の垂飾。穿孔部分が破損している。表面に研磨痕がみられる。

230は緑泥石岩製の岩偶である。長さ6.65cm、幅3.86cm、厚さ0.6cm、重さは18gである。板状の素材をよく磨き、両腕・両腰・両脚と思われる突起を表現し、両肩の一つずつ、腰の中央の一つ、計3つの貫通孔(径約4.5mm)がある。片方の脚は折れて失われており、周辺からは見つかっていない。径1~2mm、深さ1mm弱の円形のくぼみ状の文様が、表裏両面の周縁に沿ってほぼ2列に施され、現存する数は88か所である。失われた脚部分にも表裏合わせて2か所以上あったと思われ、90か所以上施されていたと考えられる。

岩偶は単体で出土し、周囲には墓穴・住居跡等の遺構がなく、また包含層も土器片等の遺物は希薄であった。しかしこの周辺の調査区域で出土した土器は、ほとんどが縄文時代中期後半の所産であり、この岩偶もおそらく同時期のものと考えてよい。

この岩偶の類例は江別市7丁目沢2遺跡や、青森市内丸山遺跡で出土しており、Ⅷ章1のまとめで若干触れている。

231・232は安山岩製のオロシガネ状石製品の破片である。どちらも皿状に加工されている。(新家)



図V-37 岩偶出土状況

表V-4 包含層出土掲載石器等一覧

揮削 No.	掲載 No.	図版 No.	器種名	調査区 名	層位	遺物 No.	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
V-24	1	28	細石刃	E-2	VI	3	(2.14)×0.49×0.23	0.2	黒曜石	
V-24	2	28	細石刃	L-0	V	1	(2.54)×0.61×0.25	0.3	黒曜石	
V-24	3	28	石 鏃	F-40	V	1	1.35×0.90×0.22	0.2	黒曜石	
V-24	4	28	石 鏃	R-8	V	1	(1.70)×1.47×0.33	0.5	黒曜石	
V-24	5	28	石 鏃	F-16	V	2	(1.84)×(1.60)×0.32	0.6	黒曜石	
V-24	6	28	石 鏃	L-82	V	24	(1.98)×1.27×0.39	0.6	黒曜石	
V-24	7	28	石 鏃	N-70	V	4	1.86×1.74×0.27	0.5	黒曜石	
V-24	8	28	石 鏃	F-34	V	2	1.93×1.28×0.25	0.4	黒曜石	
V-24	9	28	石 鏃	L-78	V	77	(1.96)×1.70×0.30	0.6	黒曜石	
V-24	10	28	石 鏃	N-46	V	1	2.12×1.75×0.31	0.6	黒曜石	
V-24	11	28	石 鏃	L-15	V	2	2.20×1.84×0.23	0.7	黒曜石	
V-24	12	28	石 鏃	T-16	V	2	2.28×1.83×0.45	1.2	黒曜石	
V-24	13	28	石 鏃	L-82	V	26	2.32×1.68×0.33	0.8	黒曜石	
V-24	14	28	石 鏃	K-77	V	18	2.32×1.84×0.30	0.8	黒曜石	
V-24	15	28	石 鏃	K-10	V	2	2.42×1.47×0.36	1.0	黒曜石	
V-24	16	28	石 鏃	P-10	V	1	2.57×1.39×0.42	0.9	黒曜石	
V-24	17	28	石 鏃	L-8	V	4	2.49×1.71×0.43	1.0	黒曜石	
V-24	18	28	石 鏃	L-39	V	2	2.69×1.56×0.36	0.9	頁岩	
V-24	19	28	石 鏃	N-6	V	5	(2.74)×(2.13)×0.40	1.3	黒曜石	
V-24	20	28	石 鏃	K-32	V	7	3.08×1.55×0.60	2.0	黒曜石	
V-24	21	28	石 鏃	Q-86	V	95	3.12×1.75×0.42	1.7	黒曜石	
V-24	22	28	石 鏃	H-13	V	14	3.21×1.60×0.32	1.2	黒曜石	
V-24	23	28	石 鏃	G-41	V	9	3.33×1.98×0.39	1.7	黒曜石	
V-24	24	28	石 鏃	S-9	V	18	(1.56)×(0.74)×0.21	0.2	黒曜石	
V-24	25	28	石 鏃	S-9	V	19	(1.56)×0.80×0.21	0.2	黒曜石	
V-24	26	28	石 鏃	T-11	V	12	2.32×0.56×0.23	0.3	黒曜石	
V-24	27	28	石 鏃	P-69	V	3	(2.85)×1.78×0.39	1.4	黒曜石	
V-24	28	28	石 鏃	K-75	V	23	(3.29)×1.79×0.38	1.6	黒曜石	
V-24	29	28	石 鏃	S-16	V	1	(3.79)×1.47×0.50	2.4	黒曜石	
V-24	30	28	石 鏃	K-13	V	1	(4.02)×1.34×0.54	2.0	黒曜石	
V-24	31	28	石 鏃	Q-16	V	2	(5.09)×1.44×0.43	2.2	黒曜石	
V-24	32	28	石 鏃	K-86	V	30	(1.58)×0.89×0.29	0.3	黒曜石	
V-24	33	28	石 鏃	M-29	V	16	1.85×(1.42)×0.37	0.5	黒曜石	
V-24	34	28	石 鏃	K-86	V	20	(1.84)×1.66×0.28	0.4	黒曜石	
V-24	35	28	石 鏃	J-42	V	5	(1.86)×1.11×0.45	0.6	珪質頁岩	
V-24	36	28	石 鏃	P-87	V	81	1.95×1.17×0.34	0.5	黒曜石	
V-24	37	28	石 鏃	K-83	V	27	(2.04)×1.17×0.28	0.4	黒曜石	
V-24	38	28	石 鏃	J-84	V	10	(1.99)×1.28×0.32	0.5	黒曜石	
V-24	39	28	石 鏃	J-85	V	6	2.03×1.28×0.41	0.7	黒曜石	
V-24	40	28	石 鏃	L-80	V	14	2.08×0.91×0.25	0.3	黒曜石	
V-24	41	28	石 鏃	J-77	V	7	(2.02)×1.12×0.45	0.8	黒曜石	
V-24	42	28	石 鏃	K-83	V	26	(1.82)×(1.67)×0.30	0.6	黒曜石	
V-24	43	28	石 鏃	K-85	V	22	(2.10)×1.80×0.36	0.8	黒曜石	
V-24	44	28	石 鏃	T-19	V	1	2.29×1.44×0.35	0.6	黒曜石	
V-24	45	28	石 鏃	K-86	V	29	2.39×1.52×0.45	0.9	黒曜石	
V-24	46	28	石 鏃	L-78	V	73	2.39×1.04×0.47	0.8	黒曜石	

挿図 No.	掲載 No.	図版 No.	器種名	調査区 名	層位	遺物 No.	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
V-24	47	28	石 鏃	K-80	V	12	2.49×1.29×0.50	1.0	黒曜石	
V-24	48	28	石 鏃	M-77	V	43	2.52×1.23×0.52	1.0	黒曜石	
V-24	49	28	石 鏃	J-4	V	9	2.59×1.12×0.21	0.3	黒曜石	
V-24	50	28	石 鏃	J-13	V	1	(2.70)×1.92×0.50	1.7	黒曜石	
V-24	51	28	石 鏃	R-13	V	18	(2.72)×1.08×0.35	0.8	黒曜石	
V-24	52	28	石 鏃	K-83	V	18	2.72×1.27×0.43	0.8	黒曜石	
V-24	53	28	石 鏃	L-77	V	24	2.77×1.26×0.36	0.8	黒曜石	
V-24	54	28	石 鏃	N-78	V	7	(2.82)×1.80×0.40	1.4	黒曜石	
V-24	55	28	石 鏃	P-24	V	1	(2.90)×(1.56)×0.52	1.4	珪質頁岩	
V-24	56	28	石 鏃	K-80	V	14	(2.92)×1.12×0.51	1.2	黒曜石	
V-24	57	28	石 鏃	G-17	V	2	(2.93)×1.51×0.51	1.6	黒曜石	
V-24	58	28	石 鏃	P-7	V	1	(3.06)×1.56×0.61	2.0	黒曜石	
V-24	59	28	石 鏃	L-82	V	25	3.05×1.71×0.53	1.3	黒曜石	
V-24	60	28	石 鏃	K-73	V	11	(3.05)×1.64×0.44	1.2	黒曜石	
V-24	61	28	石 鏃	L-85	V	9	3.09×1.92×0.40	1.4	黒曜石	
V-24	62	28	石 鏃	L-81	V	17	3.22×2.16×0.57	2.0	黒曜石	
V-24	63	28	石 鏃	J-78	V	7	3.31×1.68×0.41	1.4	黒曜石	
V-24	64	28	石 鏃	N-78	V	8	(3.40)×1.59×0.40	1.5	黒曜石	
V-25	65	28	石 鏃	M-86	V	30	3.35×2.00×0.84	3.5	黒曜石	
V-25	66	28	石 鏃	K-86	V	19	3.45×1.91×0.53	2.1	黒曜石	
V-25	67	28	石 鏃	S-76	V	83	3.64×1.40×0.51	1.8	黒曜石	
V-25	68	28	石 鏃	K-77	V	13	3.72×1.61×0.45	2.2	頁岩	
V-25	69	28	石 鏃	N-76	V	27	3.75×1.32×0.53	1.7	頁岩	
V-25	70	28	石 鏃	K-84	V	17	3.86×1.84×0.61	2.7	黒曜石	
V-25	71	28	石 鏃	T-6	V	1	4.33×1.32×0.45	2.2	黒曜石	
V-25	72	28	石 鏃	P-6	V	1	(4.40)×1.48×0.47	1.9	黒曜石	
V-25	73	28	石槍・ナイフ類	M-85	V	52	3.39×2.13×0.66	3.2	黒曜石	
V-25	74	28	石槍・ナイフ類	L-82	V	27	(3.25)×2.16×0.65	2.9	黒曜石	
V-25	75	28	石槍・ナイフ類	M-77	V	44	3.69×2.17×0.61	3.6	黒曜石	
V-25	76	28	石槍・ナイフ類	P-85	V	119	3.66×2.57×0.50	3.6	黒曜石	
V-25	77	28	石槍・ナイフ類	P-4	V	1	(3.97)×2.03×0.72	4.4	黒曜石	
V-25	78	28	石槍・ナイフ類	Q-41	V	2	(4.00)×(2.92)×0.55	4.0	黒曜石	
V-25	79	28	石槍・ナイフ類	Q-9	V	1	4.12×2.40×0.80	4.3	黒曜石	
V-25	80	28	石槍・ナイフ類	L-76	V	30	4.14×2.18×0.80	4.3	黒曜石	
V-25	81	28	石槍・ナイフ類	M-76	V	52	4.25×2.36×0.58	3.9	黒曜石	
V-25	82	28	石槍・ナイフ類	M-77	V	45	4.34×2.20×0.55	3.8	黒曜石	
V-25	83	28	石槍・ナイフ類	F-70	V	6	4.66×2.94×0.89	9.4	黒曜石	
V-25	84	28	石槍・ナイフ類	K-75	V	20	4.86×2.35×0.63	4.2	黒曜石	
V-25	85	29	石槍・ナイフ類	L-3	V	1	(4.89)×(2.55)×0.82	6.2	黒曜石	
V-25	86	29	石槍・ナイフ類	H-22	V	3	(5.23)×2.50×0.91	8.9	頁岩	
V-25	87	29	石槍・ナイフ類	S-68	V	1	5.38×2.03×0.71	6.2	黒曜石	
V-25	88	29	石槍・ナイフ類	I-6	V	1	5.37×3.01×1.04	10.4	黒曜石	
V-25	89	29	石槍・ナイフ類	S-13	V	11	5.47×(2.51)×0.75	6.8	黒曜石	
V-25	90	29	石槍・ナイフ類	J-4	V	1	5.50×2.36×0.81	8.2	黒曜石	
V-25	91	29	石槍・ナイフ類	P-10	V	2	5.57×2.02×0.82	6.4	黒曜石	
V-25	92	29	石槍・ナイフ類	R-9	V	1	(5.67)×2.26×0.68	6.6	黒曜石	
V-25	93	29	石槍・ナイフ類	S-25	V	7	5.67×3.12×0.68	6.7	黒曜石	
V-25	94	29	石槍・ナイフ類	K-86	V	22	5.72×2.96×0.81	11.8	黒曜石	

挿図 No.	掲載 No.	図版 No.	器種名	調査区 名	層位	遺物 No.	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
V-26	95	29	石槍・ナイフ類	M-86	V	35	5.84×2.85×0.98	12.1	黒曜石	
V-26	96	29	石槍・ナイフ類	R-10	V	2	(5.81)×2.50×1.03	12.0	黒曜石	
V-26	97	29	石槍・ナイフ類	K-82	V	26	(59.5)×2.52×0.85	8.6	黒曜石	
V-26	98	29	石槍・ナイフ類	G-5	V	1	6.16×3.45×1.08	17.1	黒曜石	接合
V-26	99	29	石槍・ナイフ類	O-80	V	43	6.30×3.29×1.12	17.0	黒曜石	
V-26	100	29	石槍・ナイフ類	S-8	V	12	6.71×(2.66)×0.65	7.9	黒曜石	
V-26	101	29	石槍・ナイフ類	L-9	V	6・7	(7.05)×3.90×1.25	24.8	黒曜石	接合
V-26	102	29	石槍・ナイフ類	S-11	V	18	7.08×(3.00)×0.88	11.2	黒曜石	
V-26	103	29	石槍・ナイフ類	R-12	V	4	(7.36)×2.86×0.87	12.2	黒曜石	
V-26	104	29	石槍・ナイフ類	S-11	V	39	(7.90)×3.71×1.36	25.1	黒曜石	
V-26	105	29	石槍・ナイフ類	K-82	V	24	(2.39)×2.69×0.68	3.7	黒曜石	
V-26	106	29	石槍・ナイフ類	P-87	V	82	(4.18)×1.86×0.48	3.2	黒曜石	
V-26	107	29	石 錐	L-36	V	7	2.79×0.86×0.48	1.3	黒曜石	
V-26	108	29	石 錐	M-37	V	13	(3.38)×(0.80)×0.52	1.4	片岩	
V-26	109	29	石 錐	S-8	V	15	5.68×2.01×1.10	9.0	黒曜石	
V-26	110	29	つまみ付きナイフ	K-15	V	1	3.64×3.05×0.60	5.0	頁岩	
V-26	111	29	つまみ付きナイフ	S-6	V	4	4.17×2.18×0.70	3.9	めのう	
V-26	112	29	つまみ付きナイフ	O-25	V	13	4.47×1.59×0.85	4.4	頁岩	
V-26	113	29	つまみ付きナイフ	O-4	V	1	4.83×2.16×0.63	6.4	頁岩	
V-26	114	29	つまみ付きナイフ	N-6	V	8	4.90×1.94×0.78	5.7	頁岩	
V-26	115	29	つまみ付きナイフ	R-31	V	11	5.17×1.92×0.72	6.2	頁岩	
V-26	116	29	つまみ付きナイフ	O-7	V	8	5.38×1.75×1.41	6.7	頁岩	
V-26	117	29	つまみ付きナイフ	M-29	V	9	5.35×2.69×1.06	12.1	頁岩	
V-26	118	29	つまみ付きナイフ	M-22	V	2	5.73×2.59×0.72	8.2	黒曜石	
V-27	119	29	つまみ付きナイフ	M-10	V	1	5.62×3.47×1.15	16.4	黒曜石	
V-27	120	29	つまみ付きナイフ	O-70	V	4	6.43×2.67×0.93	15.2	頁岩	
V-27	121	29	つまみ付きナイフ	K-85	V	33	6.78×2.28×1.00	10.9	頁岩	アスファルト
V-27	122	29	つまみ付きナイフ	G-21	V	1	7.87×2.13×1.05	11.2	頁岩	
V-27	123	29	つまみ付きナイフ	Z-98	V	1	8.52×3.40×1.20	20.8	黒曜石	
V-27	124	30	スクレイパー	S-75	V	81	2.57×2.25×9.8	4.2	黒曜石	
V-27	125	30	スクレイパー	K-78	V	21	3.29×3.52×0.96	7.6	黒曜石	
V-27	126	30	スクレイパー	Q-8	V	4	3.80×3.06×1.90	16.0	黒曜石	
V-27	127	30	スクレイパー	Q-85	V	172	3.25×4.43×1.54	15.2	黒曜石	
V-27	128	30	スクレイパー	J-11	V	2	4.68×2.89×1.53	19.2	黒曜石	
V-27	129	30	スクレイパー	J-81	V	11	3.90×4.30×1.17	15.1	頁岩	
V-27	130	30	スクレイパー	M-78	V	34	3.26×4.98×0.86	11.9	黒曜石	
V-27	131	30	スクレイパー	K-78	V	22	4.68×5.28×1.48	29.3	黒曜石	
V-27	132	30	スクレイパー	S-15	V	5	5.74×5.55×1.37	37.6	めのう	
V-27	133	30	スクレイパー	K-86	V	24	(2.83)×(2.19)×0.60	3.0	黒曜石	
V-27	134	30	スクレイパー	L-77	V	26	3.46×1.57×0.53	2.4	黒曜石	
V-27	135	30	スクレイパー	M-76	V	51	3.53×1.74×1.17	4.6	黒曜石	
V-27	136	30	スクレイパー	Q-15	V	3	4.39×1.81×1.53	9.1	黒曜石	
V-27	137	30	スクレイパー	L-2	V	1	(4.40)×1.58×0.75	5.0	黒曜石	
V-27	138	30	スクレイパー	H-11	V	1	4.78×2.77×1.19	10.4	黒曜石	
V-27	139	30	スクレイパー	R-78	V	292	4.85×2.58×1.08	12.2	黒曜石	
V-28	140	30	スクレイパー	P-77	V	109	5.01×2.86×1.02	11.0	黒曜石	
V-28	141	30	スクレイパー	K-20	V	3	(5.00)×(2.05)×0.89	7.6	黒曜石	
V-28	142	30	スクレイパー	S-15	V	4	5.36×2.40×1.65	14.2	黒曜石	

V 包含層 (第II黒色土層) 出土の遺物

挿図 No.	掲載 No.	図版 No.	器種名	調査区 層位 名	遺物 No.	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
V-28	143	30	スクレイパー	S-16	V 2	5.36×(3.18)×1.17	15.5	黒曜石	
V-28	144	30	スクレイパー	N-75	V 26	5.78×1.86×1.23	7.9	頁岩	
V-28	145	30	スクレイパー	Q-77	V 125	(5.17)×3.95×1.43	30.7	頁岩	
V-28	146	30	スクレイパー	K-75	V 24	6.29×3.71×1.31	30.9	頁岩	
V-28	147	30	スクレイパー	R-14	V 2	6.72×3.18×1.10	17.1	黒曜石	
V-28	148	30	スクレイパー	J-77	V 14	6.83×4.16×1.15	20.7	黒曜石	
V-28	149	30	スクレイパー	T-12	V 14	6.78×3.36×1.20	24.6	玄武岩	
V-28	150	30	スクレイパー	G-3	V 2	7.15×3.38×1.62	30.6	黒曜石	
V-28	151	30	スクレイパー	O-82	V 96	7.45×2.72×0.76	14.7	頁岩	
V-28	152	30	スクレイパー	L-78	V 85	7.53×2.03×1.37	15.6	頁岩	
V-28	153	30	スクレイパー	K-4	V 2	7.71×3.48×2.00	24.5	黒曜石	
V-28	154	30	スクレイパー	P-18	V 7	9.20×3.74×1.77	39.5	黒曜石	被熱
V-28	155	30	スクレイパー	S-74	V 22	9.53×4.14×1.40	38.0	黒曜石	
V-29	156	31	両面調整石器	S-74	V 23	2.58×3.46×0.93	7.4	黒曜石	
V-29	157	31	両面調整石器	M-78	V 35	2.82×3.72×0.98	8.3	黒曜石	
V-29	158	31	両面調整石器	M-85	V 51	3.65×2.75×1.02	8.8	黒曜石	
V-29	159	31	両面調整石器	L-82	V 31	7.40×3.20×1.30	24.5	黒曜石	
V-29	160	31	R 剥片	F-71	V 10	2.60×5.53×1.34	12.3	黒曜石	
V-29	161	31	R 剥片	M-85	V 66	6.57×2.52×1.30	12.2	黒曜石	
V-29	162	31	R 剥片	O-85	V 102	6.74×3.09×1.38	17.1	頁岩	
V-29	163	31	楔形石器	R-79	V 229	3.30×1.74×1.35	7.8	黒曜石	
V-29	164	31	石 核	P-67	V 10	4.15×3.60×1.50	18.3	黒曜石	
V-29	165	31	石 核	M-85	V 54	3.77×3.70×1.73	22.9	黒曜石	
V-29	166	31	石 核	L-82	V 22	3.90×4.00×1.76	20.6	黒曜石	
V-29	167	31	石 核	J-86	V 4	4.75×2.49×2.40	28.7	黒曜石	
V-29	168	31	石 核	K-80 L-78	V 86 17	2.93×6.70×1.33	23.0	黒曜石	接合
V-29	169	31	石 核	K-83	V 28	3.55×5.67×1.79	31.5	黒曜石	
V-29	170	31	石 核	J-84	V 15	4.57×4.75×2.86	60.1	黒曜石	
V-29	171	31	原 石	K-83	V 24	4.76×6.82×3.17	67.1	黒曜石	
V-29	172	31	石のみ	N-4	V 8	2.72×0.99×0.28	1.3	片岩	
V-29	173	31	石のみ	Q-9	V 17	5.70×1.64×0.48	5.2	片岩	
V-29	174	31	石のみ	P-35	V 6	(8.03)×1.69×0.55	11.5	片岩	
V-29	175	31	石のみ	S-67	V 3	10.65×1.72×1.45	48.3	泥岩	
V-30	176	31	石 斧	Q-78	V 315	(4.70)×4.13×1.33	35.5	泥岩	刃部片
V-30	177	31	石 斧	M-78	V 30	(5.20)×(4.16)×1.60	57.8	泥岩	刃部片
V-30	178	31	石 斧	J-71	V 6	(6.41)×(4.71)×2.52	122.0	泥岩	刃部片
V-30	179	31	石 斧	M-78	V 31	(7.43)×5.03×3.00	186.5	泥岩	刃部片
V-30	180	31	石 斧	F-71	V 9	(6.65)×(4.50)×2.20	97.2	泥岩	基部片
V-30	181	31	石 斧	L-86	V 20	(7.68)×3.14×1.43	63.5	泥岩	
V-30	182	31	石 斧	L-77	V 27	8.13×3.34×0.75	22.9	泥岩	
V-30	183	31	石 斧	S-13	V 22	8.15×2.71×0.90	30.0	片岩	
V-30	184	31	石 斧	R-35	V 1	8.04×4.03×0.83	45.8	泥岩	
V-30	185	31	石 斧	M-72	V 16	(8.48)×4.82×1.58	80.8	泥岩	基部片未成品
V-30	186	32	石 斧	Q-75	V 47	(7.82)×(6.08)×3.25	224.2	泥岩	刃部片
V-31	187	32	石 斧	N-75	V 28	(9.15)×5.43×2.14	139.7	片岩	刃部片
V-31	188	32	石 斧	E-8	V 9	9.03×4.00×1.65	86.3	泥岩	
V-31	189	32	石 斧	J-38	V 13	9.10×3.93×1.18	69.7	泥岩	

挿図 No.	掲載 No.	図版 No.	器種名	調査区 名	層位	遺物 No.	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
V-31	190	32	石斧	K-76	V	12	9.31×3.90×1.62	91.2	泥岩	
V-31	191	32	石斧	H-33	V	5	9.76×3.36×1.35	66.7	泥岩	
V-31	192	32	石斧	L-9	V	17	10.31×3.75×1.08	76.0	泥岩	
V-31	193	32	石斧	M-85	V	58	11.10×4.74×2.34	213.3	泥岩	
V-31	194	32	石斧	K-85	V	35	(11.21)×(6.38)×5.24	535.0	泥岩	基部片
V-32	195	32	石斧	M-72	V	17	11.65×3.45×2.38	140.5	泥岩	
V-32	196	32	石斧	K-27	V	2	(11.82)×(3.58)×2.52	180.9	泥岩	
V-32	198	32	石斧	M-72	V	18	12.07×3.82×1.90	128.9	片岩	
V-32	199	32	石斧	S-77	V	89	12.80×4.83×2.35	223.2	泥岩	
V-32	200	32	石斧	N-8	V	5	15.08×3.60×1.55	136.6	片岩	
V-33	201	33	たたき石	L-77	V	29	5.06×(4.60)×3.72	135.0	玄武岩	破片
V-33	202	33	たたき石	J-79	V	13	(6.13)×(2.60)×4.25	102.3	玄武岩	破片
V-33	203	33	たたき石	K-78	V	17	5.45×5.67×4.20	200.1	玄武岩	
V-33	204	33	たたき石	Q-32	V	16	5.75×5.59×4.72	242.2	玄武岩	
V-33	205	33	たたき石	M-78	V	33	6.77×4.13×3.85	138.0	安山岩	
V-33	206	33	たたき石	F-7	V	5	8.56×6.03×3.37	214.2	砂岩	
V-33	207	33	たたき石	K-86	V	32	(9.37)×5.88×3.52	277.5	砂岩	被熱
V-33	208	33	たたき石	L-82	V	33	10.82×5.35×4.68	350.1	砂岩	被熱
V-33	209	33	たたき石	M-77	V	40	14.50×6.19×2.74	328.6	砂岩	
V-33	210	33	北海道式石冠	N-85 P-85 -86	V	141- 117- 118	(9.72)×(11.05)×(4.22)	356.8	砂岩	破片
V-33	211	33	北海道式石冠	S-16	V	7	9.18×9.51×5.55	580.0	片麻岩	
V-34	212	33	北海道式石冠	H-21	V	3	9.63×10.43×5.94	753.0	砂岩	
V-34	213	34	北海道式石冠	M-3	V	6	9.92×11.64×5.08	825.0	砂岩	
V-34	214	34	北海道式石冠	M-12	V	8	8.54×12.93×6.46	980.0	砂岩	接合
V-34	215	34	すり石	N-25	V	3	(7.1)×(7.7)×(5.9)	385.5	安山岩	
V-34	216	34	すり石	P-78	V	196	(4.7)×(9.55)×(5.2)	218.6	砂岩	断面三角形
V-34	217	34	すり石	S-86	V	12	10.7×8.6×5.7	805.0	安山岩	
V-34	218	34	すり石	M-46	V	2	(11.0)×(8.65)×5.2	665.0	安山岩	
V-34	219	34	石鋸	T-19	V	2	5.90×7.40×0.90	45.5	砂岩	
V-34	220	34	砥石	S-10	V	16	(4.00)×(3.85)×1.50	28.4	砂岩	
V-35	221	34	砥石	S-10	V	16	5.70×7.15×2.40	100.8	砂岩	
V-35	222	34	砥石	L-84	V	14	(8.5)×(9.0)×3.3	293.7	砂岩	
V-35	223	34	砥石	M-86	V	38	(7.1)×(12.4)×4.1	381.1	砂岩	
V-35	224	34	砥石	S-27	V	6	(11.8)×8.2×4.70	513.0	砂岩	
V-35	225	34	砥石	M-85 M-85 M-85 M-85 N-85 N-87 R-85	V	60 61 67 69 121 54 54	(15.0)×(10.0)×(6.3)	932.0	砂岩	7点接合
V-35	226	35	石皿	K-86	V	40	(9.8)×(16.7)×(5.1)	1066.0	安山岩	
V-35	227	36	石皿	O-86 P-86	V	212 142	24.1×(16.0)×(7.0)	1610.0	安山岩	被熱
V-36	228	36	石製品	N-75	V	29	4.3×4.4×4.0	29.5	軽石	軽石球
V-36	229	36	石製品	O-11	V	6	(6.41)×3.73×1.28	34.0	緑泥石岩	重飾
V-36	230	12-36	石製品	R-10	V	12	6.65×3.86×0.66	18.0	緑泥石岩	岩偶
V-36	231	36	石製品	K-86	V	25	(8.1)×(13.0)×(2.1)	167.6	安山岩	オロシガネ状
V-36	232	36	石製品	J-73	V	21	(7.5)×(12.6)×1.9	(201.8)	安山岩	オロシガネ状

VI 自然科学的手法による分析

1 千歳市梅川4遺跡出土炭化材の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

梅川4遺跡は、梅川左岸と祝梅川源流右岸に挟まれた台地上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代中期・後期の住居跡、土坑、焼土、土器集中等の遺構が検出されている。今回の分析調査では、住居跡や焼土における木材利用を確認するため、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

(1) 試料

試料は、梅川4遺跡の2基の住居跡(VH-1・2)から出土した炭化材5点(試料番号1~5)、焼土(VF-2)から出土した炭化材3点(試料番号6~8)、合計8点である。

(2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にす。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にす。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、広葉樹3分類群(ハンノキ属ハンノキ亜属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・トネリコ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属(*Alnus* subgen.

Alnus) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。

道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの複合放射組織とがある。

・トネリコ属(*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状

表VI-1 梅川4遺跡の樹種同定結果

試料番号	遺構	位置	樹種
1	VH-1(住居跡)	床面	トネリコ属
2	VH-1(住居跡)	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	VH-1(住居跡)	床面	トネリコ属
4	VH-2(住居跡)	床面	トネリコ属
5	VH-2(住居跡)	床面付近	トネリコ属
6	VF-2(焼土)	焼土上面	トネリコ属
7	VF-2(焼土)	焼土上面	ハンノキ属ハンノキ亜属
8	VF-2(焼土)	焼土中	ハンノキ属ハンノキ亜属

に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

(4) 考察

住居跡から出土した炭化材は、トネリコ属を中心にコナラ節が混じる組成であった。現在本遺跡周辺では、トネリコ属は川辺林・湿地林を構成するヤチダモが河川流域の低地に、コナラ節はミズナラが台地から谷斜面にかけて広く分布している。当時の遺跡付近でもこれらの種類が生育していた可能性があり、いずれも重硬で強度が高い材質を有していることから、周辺に生育している中から強度の高い木材を選択していたことが推定される。

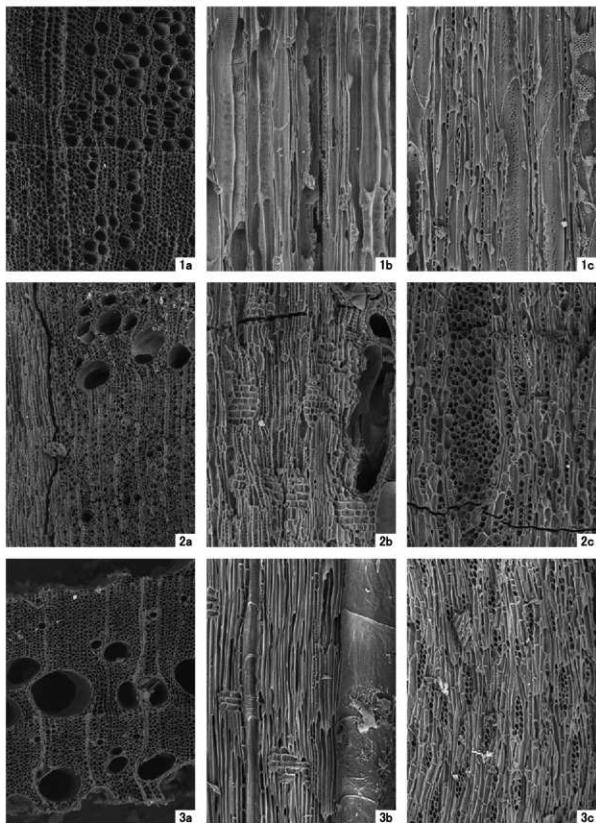
周辺地域の調査事例をみると、恵庭市の中島松5遺跡やカリンバ1遺跡で縄文時代中期の住居跡出土炭化材にトネリコ属が多い結果が報告されている(三野, 1990, 2000; 汐見・岡田, 2001)。一方、キウス4遺跡ではコナラ節、西島松9遺跡ではオニグルミやカエデ属が多い結果が報告されており(三野, 1997; バリノ・サーヴェイ株式会社, 2002)、遺跡によって多く利用される樹種には違いがある。こうした違いは、遺跡周辺の局所的な植生の違いなどが理由として考えられる。

一方、焼土から出土した炭化材はハンノキ亜属とトネリコ属であり、少なくとも2種類の木材が利用されていたことが推定される。ハンノキ亜属には、トネリコ属と同様に川辺林・湿地林を構成する種類が含まれており、周囲にハンノキ亜属やトネリコ属が生育する川辺林・湿地林が見られたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
- 三野 紀雄, 1990, 恵庭市中島松5遺跡出土の炭化木片について, 「北海道恵庭市中島松5遺跡B地点・中島松7遺跡C地点発掘調査報告書」, 恵庭市教育委員会, 38-40。
- 三野 紀雄, 1997, 竪穴住居跡 IIIH-1, 2 出土の炭化木材, 竪穴住居跡 IIIH-1 出土の木製品の分析, 「キウス4遺跡における考古学的調査」, 千歳市文化財調査報告書 XXIII, 千歳市教育委員会, 22-23。
- 三野 紀雄, 2000, 先史時代における木材の利用③-石狩低地帯における木材利用の地域的・時代的な差異について-1, 北海道開拓記念館研究紀要, 28, 北海道開拓記念館, 1-25。
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2002, 西島松9遺跡から出土した木材の年代と樹種, 「恵庭市西島松9遺跡」, 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第179集, 北海道埋蔵文化財センター, 69-74。
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p。
- 汐見 真・岡田 文男, 2001, 恵庭市出土炭化材の樹種調査結果「カリンバ1遺跡A地点」, 恵庭市教育委員会, 47。
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

図版Ⅵ-1 梅川4遺跡の炭化材



1. ハンノキ属ハンノキ亜属(試料番号7)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号2)
 3. トネリコ属(試料番号1)
- a.木口,b.柃目,c.板目

200 μ m a
200 μ m b,c

2 梅川4遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

梅川4遺跡は、北海道千歳市祝梅(北緯42° 49' 54"、東経141° 41' 26")に所在する。測定対象試料は、1号住居跡(VH-1)床面から出土した木炭2点(1:IAAA-82670、2:IAAA-82671)、2号住居跡(VH-2)床面から出土した木炭(3:IAAA-82672)、2号住居跡(VH-2)床面付近から出土した木炭(4:IAAA-82673)、2号焼土(VF-2)から出土した木炭(5:IAAA-82674)、包含層調査区E・F-3のV層から出土した木炭(6:IAAA-82675)、包含層調査区E・G-2のV層から出土した木炭(7:IAAA-82676)、包含層調査区B-98・99のV層から出土した木炭(8:IAAA-82677)、包含層調査区L・M-1のV層から出土した木炭(9:IAAA-82678)、合計9点である。

(2) 測定の意義

遺跡内の遺構の年代を知り、他の出土遺物との整合をはかる。

(3) 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA: Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。
- (2) 14C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta 13C$ によって補正された値であ

る。14C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}C/^{12}C$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (%) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}C/^{12}C$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(6) 測定結果

14C年代は、1号住居跡床面から出土した木炭2点が $3470 \pm 30yrBP$ と $3450 \pm 30yrBP$ 、2号住居跡(VH-2)床面から出土した木炭が $3520 \pm 30yrBP$ 、同床面付近から出土した木炭が $3410 \pm 30yrBP$ 、2号焼土から出土した木炭が $3520 \pm 30yrBP$ である。遺構出土試料は縄文時代後期中葉に相当する。

包含層では、調査区E・F-3のV層から出土した木炭が $3050 \pm 30yrBP$ 、調査区F・G-2のV層から出土した木炭が $2800 \pm 30yrBP$ 、調査区B-98・99のV層から出土した木炭が $2730 \pm 30yrBP$ 、調査区L・M-1のV層から出土した木炭が $2690 \pm 30yrBP$ である。

試料の炭素含有率は高く、十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題は無く、妥当な年代と判断される。

表VI-2 梅川4遺跡放射性炭素年代測定試料一覧

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-82670	1	1号住居跡(VH-1) 層位: 床面	木炭	AAA	-25.06 \pm 0.80	3,470 \pm 30	64.94 \pm 0.27
IAAA-82671	2	1号住居跡(VH-1) 層位: 床面	木炭	AAA	-23.88 \pm 0.88	3,450 \pm 30	65.07 \pm 0.28
IAAA-82672	3	2号住居跡(VH-2) 層位: 床面	木炭	AaA	-25.06 \pm 0.84	3,520 \pm 30	64.52 \pm 0.25
IAAA-82673	4	2号住居跡(VH-2) 層位: 床面付近	木炭	AAA	-26.54 \pm 0.49	3,410 \pm 30	65.38 \pm 0.26
IAAA-82674	5	2号焼土(VF-2) 層位: 焼土中	木炭	AAA	-28.66 \pm 0.61	3,520 \pm 30	64.48 \pm 0.27
IAAA-82675	6	包含層調査区E・F-3 層位: V層	木炭	AAA	-28.40 \pm 0.46	3,050 \pm 30	68.40 \pm 0.27
IAAA-82676	7	包含層調査区F・G-2 層位: V層	木炭	AaA	-27.44 \pm 0.65	2,800 \pm 30	70.57 \pm 0.28
IAAA-82677	8	包含層調査区B-98-99 層位: V層	木炭	AAA	-24.47 \pm 0.82	2,730 \pm 30	71.18 \pm 0.30
IAAA-82678	9	包含層調査区L・M-1 層位: V層	木炭	AaA	-32.17 \pm 0.77	2,690 \pm 30	71.57 \pm 0.30

[#2716]

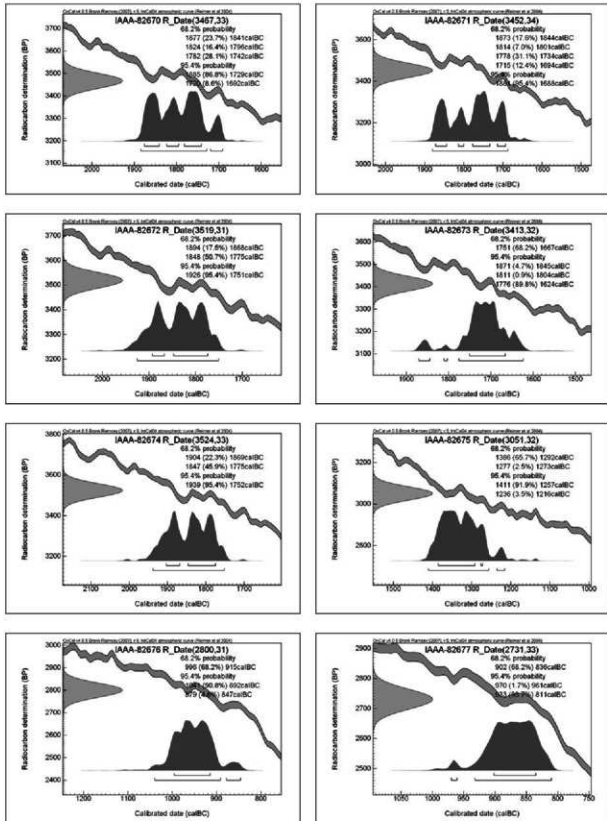
表VI-3 梅川4遺跡放射性炭素年代測定結果

測定番号	δ13C 補正なし		暦年校正 用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-82670	3,470±30	64.94±0.25	3,467±33	1877BC-1841BC(23.7%) 1824BC-1796BC(16.4%) 1782BC-1742BC(28.1%)	1885BC-1729BC(86.8%) 1720BC-1692BC(8.6%)
IAAA-82671	3,430±30	65.22±0.25	3,452±34	1873BC-1844BC(17.6%) 1814BC-1801BC(7.0%) 1778BC-1734BC(31.1%) 1715BC-1694BC(12.4%)	1881BC-1688BC(95.4%)
IAAA-82672	3,520±30	64.52±0.22	3,519±31	1894BC-1868BC(17.5%) 1848BC-1775BC(50.7%)	1926BC-1751BC(95.4%)
IAAA-82673	3,440±30	65.17±0.25	3,413±32	1751BC-1667BC(68.2%)	1871BC-1845BC(4.7%) 1811BC-1804BC(0.9%) 1776BC-1624BC(89.8%)
IAAA-82674	3,580±30	64.00±0.25	3,524±33	1904BC-1869BC(22.3%) 1847BC-1775BC(45.9%)	1939BC-1752BC(95.4%)
IAAA-82675	3,110±30	67.92±0.26	3,051±32	1386BC-1292BC(65.7%) 1277BC-1273BC(2.5%)	1411BC-1257BC(91.9%) 1236BC-1216BC(3.5%)
IAAA-82676	2,840±30	70.22±0.26	2,800±31	996BC-915BC(68.2%)	1041BC-892BC(90.8%) 879BC-847BC(4.6%)
IAAA-82677	2,720±30	71.26±0.27	2,731±33	902BC-836BC(68.2%)	970BC-961BC(1.7%) 933BC-811BC(93.7%)
IAAA-82678	2,810±30	70.52±0.28	2,686±34	893BC-877BC(14.8%) 847BC-806BC(53.4%)	902BC-801BC(95.4%)

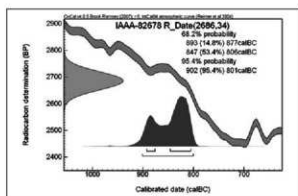
[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



図Ⅵ-1 暦年較正年代グラフ(1)



図VI-2 暦年校正年代グラフ(2)

VII 成果と問題点

1 まとめ

(1) 遺構

第Ⅱ黑色土層から検出された遺構は、平地住居跡2軒、竪穴住居跡1軒、土坑16基、Tピット7基、焼土2か所、土器集中2か所である。時期は、平地住居跡は縄文時代後期中葉、竪穴住居跡は中期後半と考えられ、土坑は中期のものが多く、土器集中は後期中葉のものである。

遺物は、中・後期の土器片のほか、石鏃、石槍・ナイフ類、たたき石、岩偶などが出ている。

(2) 自然科学的分析結果

今回は、住居跡2軒、焼土1か所から採取した炭化材について、それぞれ樹種同定と放射性炭素年代測定を依頼した。

VH-1の床面付近とみられる位置から出土した炭化材の樹種は、トネリコ属とコナラ節が同定され、炭化材2点の放射性炭素年代測定結果は、 $3,470 \pm 30$ 、 $3,450 \pm 30$ という数値であった。

VH-2の床面付近の壁際と考えられる位置で出土した炭化材2点の樹種は、トネリコ属と同定され、それぞれの放射性炭素年代測定結果は、 $3,520 \pm 30$ 、 $3,410 \pm 30$ という数値であった。

VF-2焼土中央部の上位から多量に出土した炭化材片のうち分析を依頼した3点の樹種は、トネリコ属・ハンノキ属の2種が同定され、炭化材1点の放射性炭素年代測定結果は、 $3,520 \pm 30$ という数値であった（Ⅵ章参照）。（新家）

(3) 土器

包含層V層（第Ⅱ黑色土層）からは14,676点の土器片が出土した。Ⅰ～Ⅲ群があるが、Ⅳ群6,813点（約46%）、Ⅲ群5,739点（約39%）が多く、これらで全体の8割以上を占めている。Ⅳ群は手稲式～堂林式の資料が多く、Ⅲ群は大半が北筒Ⅱ式（トコロ6類）である。

北筒Ⅱ式（トコロ6類）の土器の中には、貼付で文様帯を構成するものが見られた。貼付で文様帯を構成する土器は管見による限り道央圏に分布が限られ、北筒Ⅱ式の中でも古い属性をのこす特徴的なものである。

今回報告のV層（第Ⅱ黑色土層）調査では、北筒Ⅱ式の遺構と判断されているものが、土坑6基（VP-4・5・10～13）、Tピット1基（VTP-6）あるものの、そのいずれからも貼付帯で文様帯を構成する北筒式は出土していない。また、これらの遺構から良好な炭サンプルも得られなかったため、北筒式についての年代測定を行うことはできなかった。（影浦）

(4) 石器・石製品

包含層V層(第Ⅱ黒色土層)からは144,540点の石器が出土した。うち剥片が141,605点で、98%を占める。

石槍・ナイフ類が比較的多いが、大きく破損したのものや、製作途中の未成品がほとんどで、両面調整石器との分類に重なりがある。剥片石器は大半が黒曜石製であるが、つまみ付きナイフには頁岩製が多い。

V章で掲載した石製品の垂飾と岩偶は、いずれも調査区南側地区の、遺構や遺物の乏しい地点から出土しているが、土器分布の濃淡から見て、縄文時代中期のものと考えられる。岩偶は緑泥石岩で作られ、両腕・両腰・両脚を表現したと思われる突起と3つの貫通孔を持ち、表裏面合わせて88か所の円形のくぼみ状の文様で装飾されている。

この岩偶に比較的似た特徴を持つ出土例としては、江別市7丁目2遺跡出土のもの、千歳市美々4遺跡出土のもの、青森市三内丸山遺跡出土のもの、素材は異なるが、戸井町(現函館市)戸井貝塚出土の骨偶などがある(図Ⅷ-1)。

江別市7丁目2遺跡(江別市1996)の岩偶は、風倒木痕からの出土である。周辺に遺構がなかった点、両肩の貫通孔、片脚が欠損している点など、共通点もある。大きさは長さ7.9cm、幅5.6cm、厚さ1.3cm、重さ61gである。片面に横方向の刻線が数本施されている。石材は蛇紋岩と報告されている。出土状況に時期を特定する根拠がないが、報告では晩期の土偶と酷似するという理由で晩期末葉に位置づけられている。

千歳市美々4遺跡(北理調報第24集)出土のものは、蛇紋岩を磨いて作られ、左右の縁辺部に3対の貫通孔があり、人の上半身に似た形の垂飾(ペンダント)と分類されている。大きさは長さ4.8cm、幅3.3cm、厚さ0.7cm、重さ12.1gである。周辺地区からは北筒式土器が多く出土しており、梅川4遺跡出土のものと同通する。明瞭な四肢の表現はないが、素材や大きさなども類似する。

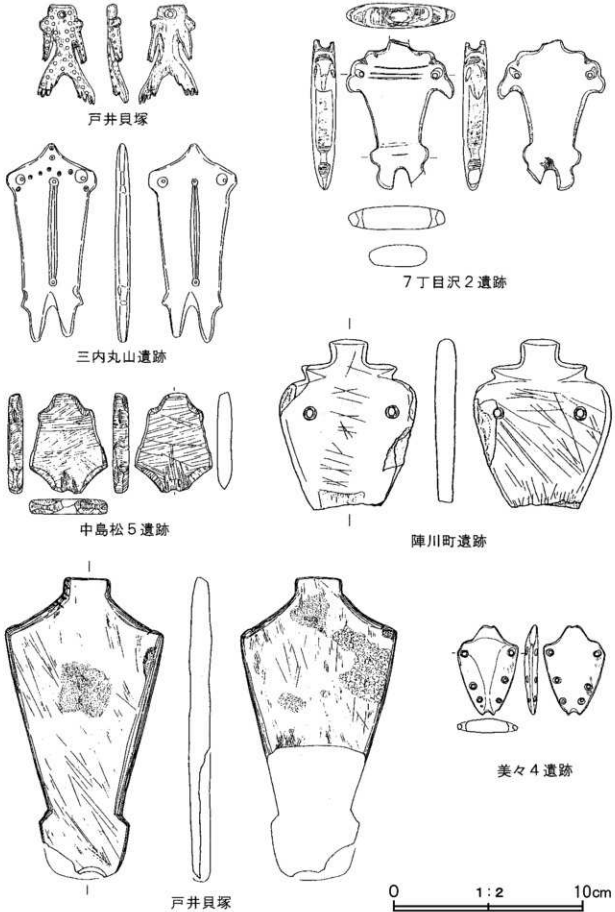
三内丸山遺跡(青森県1996)の南盛土から出土した石製人形は縄文時代中期後葉(椴林式期)のものと考えられ、梅川4遺跡出土の岩偶と時期に近い。両面の中央縦方向に刻線が入り、片面にのみ円形の刺突が胸部付近に弧状に施されている。三内丸山遺跡では多くの板状土偶や岩偶が出土したが、報告ではあえて「石偶」と呼称し、他の岩偶と区別している。石材の言及はないが、写真の状況から、蛇紋岩あるいは緑泥石岩系の軟らかい石を使っていると思われる。

戸井町戸井貝塚(戸井町1993)の骨偶は、後期初頭の貝層から出土している。鹿の角製であるので「角偶」とされ、長さは5.5cmである。くぼみ状の刺突様円形文様を報告書では「盲孔」と表現している。文様が施されているのは片面のみである。盲孔の中に微量の赤色顔料が観察されている。

これらの例は時期にばらつきがあり、今回出土した岩偶の具体的な時期を裏付ける材料にはならないが、図Ⅷ-1のように縮尺をそろえて並べてみると、江別市7丁目2遺跡出土のもの、千歳市美々4遺跡出土のもの、三内丸山遺跡出土のものが特に類似していると思われる。

このほか、中島松5遺跡(恵庭市1989)、栄浜1遺跡(八雲町1982)、白尻B遺跡(旧南茅部町1985~1988)、陣川町遺跡(函館市1989)から「岩偶」あるいは「石偶」という名称で報告されている石製品が複数ある。いずれも研磨した逆三角形の石板である。残念ながら石材に言及している報告書は少なく、石材は不明である。これらは梅川4遺跡の岩偶に比べると頭部・四肢の表現に乏しい。表面の刺突状の装飾もなく、同種の製品とは考えにくい。時期は縄文時代前期~中期(北筒式)、または時期不明と記されている。

(新家)



図Ⅶ-1 岩偶の類例

2 道央部における北筒Ⅱ式(トコロ6類)の型式幅について

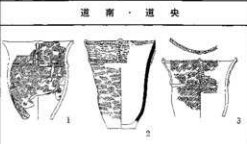
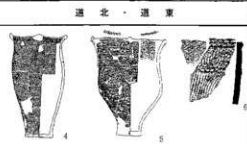
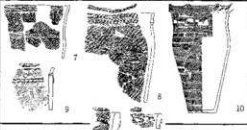
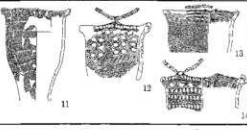
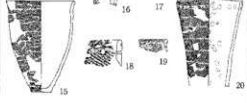
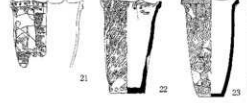
(1) はじめに

今回の調査では、BC地区から縄文時代中期の土器がまとまって出土した。口縁部に断面三角形の肥厚帯を持ち、その下に円形刺突文が施された北筒Ⅱ式(トコロ6類)相当の資料である。肥厚帯上に押引文(突引文と呼称する例もある)の圍繞するものが多く、地文は斜行縄文の他、結束第1種や綾線の羽状縄文も見られるので、北筒Ⅱ式の中でも古手の、いわゆる「第1段階」(工藤 2008)と位置づけられているものが含まれている¹⁾。

ここでは、その北筒Ⅱ式(トコロ6類)第1段階の土器について、現段階での編年的位置づけの趨勢と、その問題点を確認し、検証・考察を行うものとする。

なお、本稿では土器型式名が多出する。その都度、()で類型の型式名は付した。大略を説明すると、単に「北筒式」としたものは、北筒Ⅱ式のことで、トコロ6類に相当する。同様に天神山式は萩ヶ岡3式、柏木川式は萩ヶ岡4式・紅葉山式、道東方面ではモコト式、道南方面では大安在B式に相当する。

また、本稿で比較検討を行うに際して、各報告書における図番号ならびに掲載番号を適宜記した部分がある。以下、()でくくった図番号のうち、特に「参照」と付したものは本稿の図版番号、「参照」と付していないものは、引用した報告書中の掲載番号として区分する。

	道南・道央	道北・道東	
柏木川式			モコト式 (大森100) (大森101)
ノダラフⅡ式			北筒Ⅱ式 (1) (東洋館2) (東洋館3)
焼瓦台式			北筒Ⅱ式 (2) (トコロ6類)

1: 牛倉右岸(伊達) 2: 柏木川(悠那) 3: 萩ヶ岡(江別) 4・11: 秋通2(音威子岬) 5: 沢田の沢(東神楽) 6: 大森副室(網走)
7・8・16・17: 備後館5(伊達) 9: 千歳5(登別) 10: 美沢2(苫小牧) 12・13・14: 栄進館2(北見) 15: 厚真7(厚真)
18・19・20: 千歳6(登別) 21・22・23: トコロ具保(北見) (編尺: 不明)

2008・工藤研治「北筒式土器」『総覧 縄文土器』より引用。

図Ⅷ-2 北筒式編年細別模式図(部分)

(2) 道央部における縄文時代中期後半の編年研究の経緯

今日の道央部における縄文時代中期後半の土器型式の変遷は、大沼忠春が提示した編年案（大沼1981）が基調となっている。大沼は、道南部の見晴町式（見晴町式）に相当するものとして道央部の天神山式、大安在B式に相当するものとして柏木川式という対応関係を示した。そして従来、縄文時代中期の中頃と位置づけられていた北筒式（トコロ6類）³²を縄文時代中期末に引き下げた。

そして、大沼のこの編年案は、翌年報告書が刊行された江別市萩ヶ岡遺跡の層位的な発掘成果や、北筒Ⅱ式（トコロ6類）と縄文時代中期末の型式であるノダツプⅡ式・煉瓦台式との共伴事例が相次いだことにより、妥当であるとの評価³³を得た。

こうした状況のもと、1981年以降に刊行された道央部の報告書では、その大半が北筒式を縄文時代中期末の土器と位置づけたものになっている。序列として柏木川式（モコト式）の後ろに置いており、北筒式の細分そのものも「ノダツプⅡ式併行」か「煉瓦台式併行」のいずれかに振り分けるのが通例である（図Ⅷ-2参照）。

一方、熊谷仁志は「柏木川式の口縁部にタガ状の貼付文が廻り、切り出し状の断面をもたないものが多いこと、体部縄文は斜行縄文がほとんどで、これに対し北筒式の古い段階が結束羽状縄文・結束斜行縄文が施されることなど、スムーズな変遷を辿ることができない」（熊谷1997）、「（北筒式の）口縁部の押引文は、萩ヶ岡Ⅰ・Ⅱ式や嵐山式等に初源や変遷が認められ、柏木川式・モコト式を介さずとも北筒式へのスムーズな変遷が想定できる」（熊谷2001）等、北筒式の初源について中期の中頃に遡る可能性を示唆した³⁴。

(3) 江別市萩ヶ岡遺跡の層位的成果と問題点

江別市萩ヶ岡遺跡の調査報告書では、大沼の編年案を妥当とし、サイベ沢Ⅷ式・見晴町式→萩ヶ岡Ⅰ式→萩ヶ岡Ⅱ式→萩ヶ岡Ⅲ式（天神山式）→萩ヶ岡Ⅳ式（紅葉山式・柏木川式）→北筒式（北筒Ⅱ式・トコロ6類）→余市式という、さらなる細分案が示された。

同報告書中の「萩ヶ岡式土器の設定」（高橋1982）によれば、

- 萩ヶ岡Ⅰ式はⅡ₂文化層から出土した4群5類土器、
- 萩ヶ岡Ⅱ式はⅡ₁文化層から出土した4群5類土器、
- 萩ヶ岡Ⅲ式はⅢ₂文化層から出土した4群6類土器³⁵、
- 萩ヶ岡Ⅳ式はⅢ₁文化層から出土した4群6類土器³⁶。

そして北筒式はⅡ₂文化層から出土した4群7類土器である。

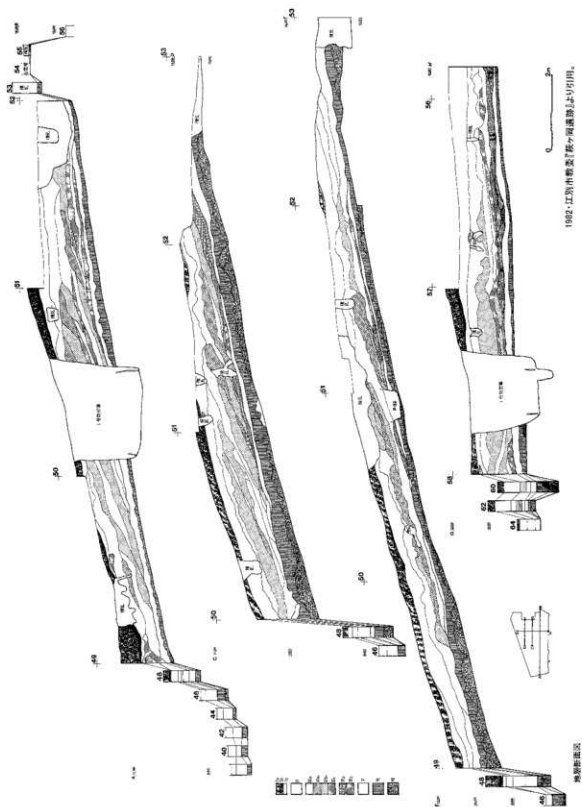
ここで土器型式変遷の根拠とされている「文化層」とは、萩ヶ岡遺跡の基本土層のことではない。土器の出土状況から、別途、設定されたものである。

同報告書中の「Ⅱ-1. 2）発掘区内の層序」（野中1982）によると、基本土層は「基盤をⅦ層としてⅠ～Ⅵ層に分離した」とあり、Ⅰ層はⅠa・Ⅰb・Ⅰc層に、Ⅲ層はⅢa・Ⅲb1・Ⅲb2・Ⅲc層に、Ⅳ層はⅣa・Ⅳb層にそれぞれ細分されている。

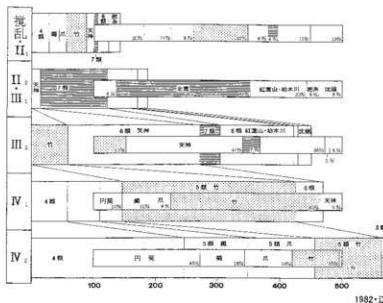
次に、土器型式変遷の根拠となった文化層と、この基本土層との対応関係であるが、

萩ヶ岡Ⅰ式（Ⅱ₂文化層出土）は、「Ⅶ層直上もしくはⅣb層中に分布する遺物群で、（中略）その広がりはⅣb層とほぼ一致する。

萩ヶ岡Ⅱ式（Ⅱ₁文化層出土）は、「Ⅳb層上面及びⅣa層中に分布する遺物群で、（中略）Ⅳa層の広がりとほぼ一致する。



図Ⅵ-3 江別市萩ヶ岡遺跡の地層断面図



1982・江別市教委『萩ヶ岡遺跡』より引用。

図Ⅶ-4 江別市萩ヶ岡遺跡の層別種別土器頻度

萩ヶ岡3式(Ⅲ₂文化層出土)は、「Ⅲa層下よりⅣ層上にかけての互層中より出土する遺物群」。

萩ヶ岡4式(Ⅲ₁文化層出土)は、「Ⅲa層中からⅡ層下部にかけて分布する」。

北筒式(Ⅱ₂文化層出土)は、「Ⅱ層の中期よりⅢ層直上の文化層」から出土すると説明がなされている。

各文化層が複数の基本土層にまたがっており、それぞれの文化層の間に無遺物の間層があるわけではない。さらに「萩ヶ岡遺跡」地層断面図(図Ⅶ-3参照)を見ると、Ⅲa層からⅢc層の間(Ⅲ₁文化層からⅢ₂文化層)は、断続的な互層を示している。萩ヶ岡3式(天神山式)、萩ヶ岡4式(柏木川式)という2つの型式の文化層に相当する部分であるが、Ⅲb2層の下にⅢa層、その下にⅢb2層→Ⅲb1層→Ⅲa層→Ⅲb1層というように、層の新旧が交互に繰り返され、互層の堆積がⅢ₁文化層に含まれているように見えるのである。

また、萩ヶ岡4式の包含層であるⅢ₁文化層と北筒式の包含層であるⅡ₂文化層であるが、堆積物(層)の一部(Ⅱ層下部からⅢ層直上)が重複している。この点について、Ⅲ₁文化層(萩ヶ岡4式)とⅡ₂文化層(北筒式)とは調査範囲の中で分布範囲が異なるのではないとも考えたが、「Ⅱ-1.2」発掘区内の層序では、Ⅲ₁文化層「斜面全域²⁷⁾に及ぶ」、Ⅱ₂文化層「丘陵上から斜面全域に及ぶ」と斜面部分に関しては重なっており、文化層の層位的根拠による分離はやや困難と思える²⁸⁾。

『萩ヶ岡遺跡』図134では、「層別種別土器頻度」(図Ⅶ-4参照)という文化層別の出土土器の割合を表したグラフも示されているが、ここでは萩ヶ岡4式(柏木川式)の包含層であるⅢ₁文化層と北筒式の包含層であるⅡ₂文化層とが1つのグラフにまとめられており、萩ヶ岡3式(天神山式)の包含層であるⅢ₂文化層との対比が示されているのみにとどまっている。さらにこの報告では、文化層を単位として型式をまとめたためか、掲載土器の抽出についても『文化層』ごとに当該土器型式でまとめている。端的に言えば、型式学的操作が優越した文化層の設定であったことが指摘できる。

『萩ヶ岡遺跡』の報告には上述のように多くの問題点があるが、報告書が刊行された同年の、伊達市南稲府5遺跡(大沼ほか1982)や登別市千歳6遺跡(大島ほか1982)の調査結果から、北筒式と縄文時代中期末の型式であるノダップⅡ式、煉瓦台式との併行・共存関係が相次いで報告され、柏木

川式の後に北筒式という序列が確認されたことで、『萩ヶ岡遺跡』は型式変遷の良好な指標として位置づけられた。そして後に、厚真町厚真7遺跡や千歳市美々3遺跡の出土例から、少なくとも道央部の太平洋岸では、北筒式の後に煉瓦台式が成立することが提案²³⁾され、現在では、

第一段階として大安在B式(道南)－柏木川式(道央)－モコト式(道東)という対応関係。

第二段階、ノダツプⅡ式(道南～道央)－北筒Ⅱ式第1段階(道央～道東)。

第三段階、煉瓦台式(道南～道央)－北筒Ⅱ式第2段階＝トコロ6類古(道央～道東)。

第四段階、余市式(Ⅰ)－北筒Ⅱ式第3段階＝トコロ6類新(道央～道東)。

第五段階、余市式(Ⅱ)・小野幌式－北筒Ⅱ式第4段階＝トコロ5類(道東)。

という対応関係(工藤 2008)が示されている。

北筒式の成立時期が柏木川式に後続する第二段階であるという認識は、高橋の「萩ヶ岡4(柏木川)式とトコロ6類土器の大部分は共伴関係になく、時間差をもって分離される」(高橋 1982)という見解の踏襲である。そして、北筒式の発生段階がどこまで遡るかという問題については、道南部におけるノダツプⅡ式の先行型式である大安在B式に対応するものとして、道央部に柏木川式がある、ということ以外、何も示されていない²⁴⁾。

ところが、北筒式の古い段階と筆者が見なしている資料を見ていくと、貼付で文様帯を構成するものや、口縁部断面が肥厚し切り出し状を呈するもの、あるいは地文に結束羽状縄文や綾線の羽状縄文を施すなど、柏木川式との連続性が窺えない要素が少なからずある。

北筒式が本当に柏木川式の後続型式と言えるのかどうか²⁵⁾、また、道央部での北筒式の型式幅は縄文時代中期末に限られるのかなどの問題が残るので、以下、これらについての再検討を行い、いくつかの問題提起をしたい。

(4) 文様の検証

まず、道央以西の古い属性である貼付文によって胴部文様帯を構成する北筒式について類例を調べた(表Ⅶ-1参照)。結果は、石狩低地帯25遺跡42件²⁶⁾(全64遺跡中25遺跡=39%)、後志地方7遺跡7件(全13遺跡中7遺跡=54%)、胆振・日高地方15遺跡16件(全34遺跡中15遺跡=44%)であり、道央部に集中していることが判明した。対照的に道東地方は0件(0%)²⁷⁾、道北・オホーツク地方は4遺跡4件(全29遺跡中4遺跡=14%)である。

もし、北筒式が柏木川式やモコト式の影響で成立したとするならば、貼付文によって胴部文様帯を構成した北筒式は道央・道東、双方の地域に同等に存在してしかるべきである。しかし、実際には道央部に集中しており、道東部との極端な地域差が現れている。であるならば、この属性に関しては、円筒土器上層式～サイベⅢ式、あるいは萩ヶ岡1・2式からの影響によるものと考えるのが妥当であろう。

余市町登町2遺跡とフゴッペ貝塚、石狩市紅葉山49号遺跡の出土土器の中に、サイベⅢ・Ⅳ式、あるいは萩ヶ岡1式に似たモチーフの文様帯を構成する北筒Ⅱ式が見られる。細い貼付文で文様帯を構成し、口縁部を円形刺突文が巡るものである(図Ⅶ-5参照)。中でもフゴッペ貝塚、紅葉山49号遺跡では円筒土器上層式～サイベⅢ式相当の資料が多出しているが、そこに北筒式との関係を想定することはできないだろうか。

次に、北筒式第1段階のメルクマルでもある連続的な押引文についてであるが、これについては柏木川式や天神山式よりも、先行型式である萩ヶ岡1・2式の段階において、そのピークが来る手法であると言える。半截竹管状の工具によるU字の突きが強調された押引文を施した北筒式の類例を調

べた結果(表Ⅶ-1参照)、106遺跡150件が数えられた。分布は道央以西(石狩低地帯・後志地方・胆振日高地方・渡島地方)が89遺跡132件と多い傾向である。ほか、道北に5遺跡5件、オホーツク海沿岸に6遺跡6件、道東部に6遺跡7件を数えるが、間隔のまばらな押し引きであり、道央部の押し引きとはやや異なったものが多い²¹⁾。

さて、ここまで貼付による胴部文様帯を構成する北筒式(図Ⅶ-5参照)、それから半截竹管状の工具によるU字の突きが強調された押し引きを示したが、さらに工藤研治(工藤 2008)によって北筒式の古い属性とされている結束第1種や綾線の羽状縄文の系譜についても考えてみたい。

道東の地文の変化を追っていくと、管見では、モコト式は斜行縄文が主体²¹⁾で、結束のものや羽状縄文はほとんど認められない。一方、工藤が提示する北筒Ⅱ式第1段階(工藤 2008)では、斜行縄文の他に、結束第1種の羽状縄文や結節(綾線)の羽状縄文が認められる²¹⁾。この結束や結節(綾線)の羽状縄文は北筒Ⅱ式の第1段階をピークとして、第2段階、第3段階と漸減し²¹⁾、第4段階、すなわちトコロロ5類²¹⁾ではほとんど認められなくなる(結束なしの羽状縄文が盛行する)。

一方、道央圏における縄文時代中期の土器で地文の変化を追うと、円筒土器上層式～サイバ沢Ⅶ式および萩ヶ岡1・2式において結束第1種や結節(綾線)の羽状縄文が多く認められ、萩ヶ岡3式(天神山式)では、「結節の縄文はほとんどなく、斜行縄文が一般的で、複節の縄文が多用される」(高橋 1982)ようになり、次の、モコト式との並行関係にあるとされる柏木川式(萩ヶ岡4式)の段階では、綾線文も見られるが、羽状を呈するものは非常に少なく、モコト式(あるいは大安在B式)同様、斜行縄文が主体である。そして、道央部の北筒Ⅱ式第1段階相当土器の地文には結束第1種の羽状縄文や結節の回転文が顕著に施されている。

柏木川式を母体にして北筒式が成立したとされているのであるが、柏木川式(モコト式)において主体的な地文は斜行縄文である。また、柏木川式(モコト式)の先行型式と位置づけられている萩ヶ岡3式(天神山式)でも「斜行縄文が一般的」であるという。北筒式の古段階で顕著である結束第1種や綾線の羽状縄文が、道央部において地文として多用されているのは「円筒土器上層式～サイバ沢Ⅶ式および萩ヶ岡1・2式」の段階なのである。

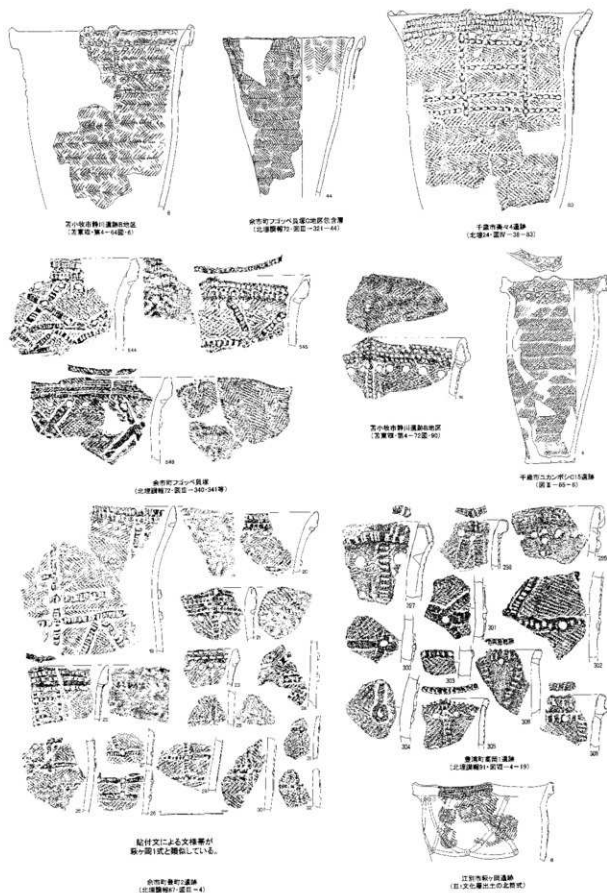
この北筒Ⅱ式第1段階と共伴、並行関係にあると位置づけられている、道南のノダツブⅡ式の地文は、結束・結節の羽状縄文は基本的に使用されておらず²¹⁾、不規則な回転方向による縄文(一部に整然とした羽状縄文²¹⁾)であり、さらに、北筒Ⅱ式第2段階(工藤 2008)と並行関係にあるとされる煉瓦台式でも羽状縄文が施されているものの、結束や綾線文はほとんど認められない。

北筒式の地文については、その先行型式(母体)であると目されている柏木川式(モコト式)からも、共伴関係が指摘されている道南部の土器からも、直接の系譜を導き出すことは困難といえる。

(5) 口縁部断面形態の検証

周知のとおり北筒Ⅱ式(トコロロ6類)の口縁部は断面三角形を基本にしたものが多く、大沼が示した「北筒式土器様式変遷模式図」(大沼 1989)を元に、オサツ15遺跡出土の北筒Ⅱ式の口縁部形態を詳細に観察分析した泉静香も「トコロロ6類の古い段階では、口縁部は肥厚し口唇部は尖るが、しだいに角張るようになり、後期もその傾向が続くように考えられる」(泉 1996)と結論している。しかしながら、モコト式(柏木川式)は、口縁部断面が角形(あるいは丸みを帯びた角形)である。

この問題については、翌1997年『オサツ15遺跡(2)』内で、泉自身により「北筒式土器の口縁部の断面形は、北筒式(トコロロ6類)より古く編年されている天神山式の点数が多い遺跡では尖っているものが多く、柏木川式土器が多く出土している遺跡でも、その傾向が続き、大沼により北筒式と併行



図VII-5 古い属性を残す北筒式

関係にあると考えられているノダツブⅡ式、煉瓦台式では角形のものが多くなる。北筒式土器の口縁部断面形態が尖っているものが多いイヨマイ6遺跡では天神山式が多く見られるが、大沼編年では、天神山式の次に柏木川式が挟まっており、直接の影響は考えづらい(泉 1997)と指摘されている。

萩ヶ岡1・2式あるいは天神山式の段階は口縁部断面形態が尖っているものも多く、北筒式(トコロ6類)の古段階も口縁部断面形態が尖っているものが多い。しかしながら、大沼編年では天神山式→柏木川式→北筒式という序列で、口唇断面が尖っている天神山式が、柏木川式で角形になり、その後、北筒式でまた口唇断面が尖ることになる。天神山式の段階から北筒式の古い段階への系譜を考えたほうがスムーズに理解できるのではないだろうか。

貼付による文様帯、地文に多用されている結束や結節の羽状縄文、口縁部の形態など北筒式の古い属性としてあげられている要素のひとつひとつを再検討してみると、柏木川式よりも、サイバ沢Ⅱ式や萩ヶ岡1・2式、天神山式などとの関連を強く見るほうが、妥当であるように映ってくる。

(6) 年代測定値の検証

ここで各型式の年代測定の結果を確認したい。

北筒Ⅱ式(トコロ6類)は遺構の調査例が蓄積されてきてはいるものの、これまでに得られた放射性炭素年代測定値については、十分とは言えない状況にある²²⁰⁾。

トコロ6類の年代としては登別市千歳4遺跡で $4,060 \pm 120$ (KSU-700)、西島松9遺跡で $4,030 \pm 40$ (Beta-164716)と $4,100 \sim 4,000$ 年前付近の数値が得られている。

次に、北筒Ⅱ式の中で新しい段階であるトコロ5類は、銅路市大薬毛1遺跡で $3,860 \pm 170$ (Gak-20434)、根室市穂香堅穴群(2)のJH-1で $3,800 \pm 40$ (IAAA-21714)、穂香川右岸遺跡のJM-1で $3,810 \pm 40$ (IAAA-41472)等、3,800年周辺に集中している²²¹⁾。

一方、北筒式の先行型式と位置づけられている、柏木川式とモコト式の年代であるが、柏木川式は、千歳市キウス4遺跡のLH-23床面炭化物で $4,200 \pm 50$ 、LH-25の床面炭化物で $4,250 \pm 50$ 、苫小牧市美沢10遺跡の4号住居炭化物 $4,160 \pm 50$ 、6号住居炭化物 $4,070 \pm 60$ 、7号住居炭化物 $4,170 \pm 60$ 、モコト式では穂香堅穴群のJH-12床直上炭化材で $4,150 \pm 40$ 、JH-13床面炭化材で $4,200 \pm 40$ と、 $4,300 \sim 4,000$ 年前の期間(最頻値は $4,240 \sim 4,160$ 年前)である。

整理すると、北筒Ⅱ式はトコロ6類が $4,100 \sim 4,000$ 年前、トコロ5類が $4,000 \sim 3,800$ 年前となり、この両者の整合性はとれている。一方、柏木川式とモコト式は $4,200$ 年前付近でまっとうっており、これらが北筒Ⅱ式の先行型式であるとする見解についても、妥当な数値が示されている。

こうした年代測定値の集成から、北筒Ⅱ式(トコロ6類)の年代幅については、近年「 $4,000 \sim 4,200$ BP 辺りにまとまる」²²²⁾(工藤 2008)、「 4050^{14}C BP から 3900^{14}C BP よりやや新しく、 $2600 \sim 2450$ CalBC 頃と考えることができる」(村本 2009)等、 $4,000$ BP 前後を妥当とした見解が、相次いで述べられている。すなわち、北筒Ⅱ式(トコロ6類)を柏木川式に後続する中期末の土器型式とした大沼忠春の編年案(大沼 1981)が、年代測定値の結果からも裏付けられたとの見方である。

しかしながら、これらの年代測定に際して、相伴している北筒Ⅱ式(トコロ6類)というのは、管見による限り、いずれも貼付による文様帯を構成していないものである²²³⁾。

新しい段階の北筒Ⅱ式(トコロ6類)の年代幅が、 $4,000$ BP 前後を示すことは妥当であるとしても、貼付によって文様帯を構成し、結束羽状縄文を地文とした、古い属性を持つ北筒Ⅱ式(トコロ6類)の年代幅に関しては明らかにされていないという点²²⁴⁾をここで確認しておきたい。

(7) おわりに

上述の検討結果から、道央部における古い段階と考えられる北筒Ⅱ式(トコロ6類)(図Ⅶ-5参照)の特徴を、以下に記す。

口縁部に断面三角形の肥厚帯を持ち、その下を中空の工具による円形刺突文が巡る。円形刺突文は径8mm~1.5cm程度のものが多い。口縁部肥厚帯の押し文上、あるいは押し文と地文の縄文との境、無文帯と縄文との境などに、円形刺突文を割り印風に付す例もある²²⁾。

口唇断面は切り出し状に尖るものが多い傾向にあるが、角形のものもいくらか認められる。

肥厚帯上を圍繞する押し引には、多段で重層的に施されたものが多く見られる。施文具はへら状工具が主体的に使われる。全体的に道央部のは器面から工具を離さずに押し引きで施すものが多い。

また、貼付で胴部文様帯を構成するものと、貼付による胴部文様帯を持たないものがある。貼付で文様帯を構成するものに関しては、貼付上に押し引・突引を加えたものがある。さらに、貼付の交点に円形刺突文を施したものと、円環状の小さな貼付を付したものもみられる(これは江別市萩ヶ岡遺跡のサイベ沢Ⅲ式や萩ヶ岡1式、同2式に共通する特徴でもある)。

本稿で検討した結果、道東部には貼付で文様帯を構成する北筒Ⅱ式(トコロ6類)が存在しない(表Ⅶ-1参照)²³⁾。したがって、貼付で文様帯を構成するものに関しては、円筒土器上層式の系譜を持つ土器からの影響が想定される²⁴⁾。貼付で胴部文様帯を構成した北筒式が、主に道央部を中心²⁵⁾として分布し、道東部にはほとんど伝播・展開しなかった可能性も考えられよう。

地文は結束第1種の羽状縄文や綾線の羽状縄文、綾線や結束を伴わない羽状縄文、綾線や結束の斜行縄文、綾線や結束を伴わない斜行縄文など多様なパターンがあるが、羽状縄文が盛行する。また、口唇内面への地文の施文が少なからず認められる。

胎土は、繊維を含むもの、砂礫を含み繊維をほとんど含まないものなど様々であるが、にぶい光沢を持ち焼きしまった資料が多い。

上述の検討結果を統合すると、北筒式は縄文時代中期の中頃に石狩低地帯で成立したと考えられる。北筒式の初源は、サイベ沢Ⅲ式、見晴町式、萩ヶ岡1式・2式との併行²⁶⁾が想定され、その型式幅が中期の中頃に遡る可能性が確認できた。

北筒Ⅱ式(トコロ6類)の年代測定のデータに関しては、縄文時代中期末葉を示す4,000BP前後の値でまとまっているが、これにはまだ本稿で取り上げたような古い属性を持つ北筒式の年代測定値が含まれておらず²⁷⁾、道央圏において、もう一段階古い年代値が与えられる可能性が高まったと考える次第である²⁸⁾。(影浦)

註

註1 工藤が示した編年細別模式図(工藤2008)は、大沼が示した8段階の細別案(大沼1989)を踏襲したものであるが、北筒Ⅱ式第1段階と第2段階とを逆転させている。ここでは工藤の第1段階という意味で用いている。

註2 当センターの分類では、1981年刊行の北埋調報第1集以来、Ⅲb-1天神山式相当、Ⅲb-2柏木川式相当、Ⅲb-3北筒式・ノダツⅡ式・煉瓦台式相当であるが、それ以前の、北海道教育委員会名義で刊行された報告書では、Ⅲb-1北筒式・天神山式相当、Ⅲb-2柏木川式・ノダツⅡ式相当、Ⅲb-3余市式・小島の沢Ⅱ式・小野模式相当という序列であった。

註3 「(萩ヶ岡遺跡では)天神山式・柏木川式・北筒式が各文化層から主体的に出土し、この順で編年されることが確認されたことも見逃せない点である」(赤石2004)、「それまで、北筒式の編年位置は円筒土器上層式との関連から中期中葉から中期後半と考えられてきたが、大沼の考え方は該期の編年観を一変させる画期的なもの

- であった」(工藤 2008)等。
- 註4 近年、熊谷は「北筒式は咲来式を母体に道北部で成立し、ノダツブⅡ式の頃に道央・道東部に拡大したようにも思える」(熊谷 2008a)と、大沼説と自説との折衷的な見解を示してきている。しかしながら、本稿で後述するように、貼付文によって胴部文様帯を構成する北筒式は道央部を中心に分布するものであり、これらが、サイベ沢Ⅱ式や萩ヶ岡Ⅰ・Ⅱ式との影響関係なしに成立したとは考えにくいことから、熊谷のこの論考には難があると言わざるをえない。
- 註5 ここで従来の天神山式を萩ヶ岡Ⅲ式とした。それまで江別市では天神山式を4群5類としていたが、それを4群6類に変更した上で、天神山式を萩ヶ岡Ⅲ式に名称変更している。
- 註6 紅葉山式・柏木川式と呼称してきたものをまとめて、萩ヶ岡Ⅳ式とした。
- 註7 無遺物の間層をはさまない斜面地形の堆積層で、出土土器の新旧が層位的に区分されるであろうかという疑問もある。「萩ヶ岡遺跡」図11からすると、地点A-B間、C-D間、E-F間は平均傾斜角約15°(距離15mで比高差4m)である。
- 註8 「柏木川式とトコロⅥ類の位置付けについて、その層位的な状況から、前後関係を明言できる例はない」(大塚 2004)という指摘もある。
- 註9 (大沼 1991)による。大沼は、「煉瓦台式末葉もしくは最初頃の「余市式」とみられる資料には胎土に海綿骨針を含むもの」がある点や、千歳市美々Ⅲ遺跡の低位部で主体的に出土した余市式的な土器に「少なからず煉瓦台式的な特色が認められる」点に着目し、「北筒式から煉瓦台式を経て、余市式が成立するものとみられる」とした。「美沢川流域の遺跡群Ⅱ」で報告されている美々Ⅲ遺跡のH-2や堅穴状遺構H-1、および包含層において北筒式土器とノダツブⅡ式・煉瓦台式が出土したことについては、双方の近接共伴事例としてとりわけ注目されたようである。しかしながらH-2は50点掲載中床面出土が3点(いずれも北筒式)、他は覆土中の出土である。堅穴状遺構H-1も56点掲載中床面出土が2点(いずれも北筒式)、他は覆土中の出土である。同じく共伴事例とされる厚真Ⅶ遺跡の内容も、9号土壇で、煉瓦台式類似のⅢ群Ⅱ類3種土器が床、Ⅲ群Ⅲ類(トコロⅥ類)が覆土から出土したという事例、4号・33号土壇の覆土から両者が出土したという事例の3例のみで、調査者は「わずか3例から判断するのは問題が残る」(『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』1987)と断定的な判断を回避している。
- 註10 たとえ萩ヶ岡遺跡の層位的な発掘成果において、サイベ沢Ⅱ式や萩ヶ岡Ⅰ・Ⅱ式相当の文化層から北筒式が出土していないとしても、それをして「古い段階の北筒式がない」という論拠にはなり得ないのではないだろうか。仮にサイベ沢Ⅱ式相当期中の中期の中頃に北筒式の型式幅が及ぶとしても、萩ヶ岡遺跡においてその時期の北筒式の担い手の活動がなかったならば、当然出土しないという結果になるであろう。「共伴した」ことで「ある」という証明は成立するが、「共伴しない」ことで「ない」と断じる論理は成立しないはずである。
- 註11 「道央部の初期の北筒式には江別市西野Ⅻ遺跡の例などのように柏木川式に円形刺突文が施されたような資料があることから、柏木川式から北筒式への変化は時間的に連続していることは明らかである」(工藤 2008)という見解が示されている。ノダツブⅡ式や煉瓦台式と北筒式との中間型が出土した例については、「共伴」として両者の時間的な近接性を証明するものとして述べられる一方、柏木川式と北筒式の中間型が出土した際には、「時間的に連続していることは明らかである」と両者の前後関係の証として述べられているわけなのだが、そのように判断されるに至った具体的な論証過程については、特に言及されているわけではない。なお、工藤は同論考中で「天神山式から柏木川式・モコト式はスムーズに移行する」とも言及しているが、最近得られた年代測定値の結果を見ていくと、天神山式は西島松5遺跡のH-7で4,050±40、4,150±50、4,210±40と、4,100年代前後を示している。実はこれは本稿で後述する柏木川式・モコト式の年代測定値4,300〜4,000年前の期間(最頻値は4,240〜4,160年前)や工藤自身が年代測定値の結果から示した北筒式の年代値「4,000〜4,200BP 辺りにまとまる」に重なるものである。天神山式、柏木川式、北筒式という3つの土器型式が、果たして同一系統の土器として本当にスムーズ変遷するのかどうか、それぞれの系統および存続期間の消長について、再度見直す余地は十分にあると考えている。註2も参照願いたい。
- 註12 北筒式が掲載された刊行報告書毎の遺跡件数である。同一報告書内に北筒式の出土した遺跡が複数に及ぶ場合、その遺跡数で数えた。また同一遺跡の報告が複数冊に及ぶものについても、北筒式掲載のものにつき件数をカウントした。表Ⅷ-1においては、報告書名・刊行年度を略称ながら記載した。掲載復元個体数等、具体的な数値での対比も考慮しなかったわけではないが、掲載量の多寡、「◎=非常に多い」「○=多い」「△=少

- ない」「ない」という主観的な基準での対比とした。佐原真の提言(佐原 2005・初出1995)を参考にしている。
- 註13 大沼によれば、「道東地方では貼付帯の施されたものは種で、貼付帯の形状もあまり似ていないようである(大沼 1991)」という。この指摘からすると、筆者が未確認なだけで、貼付帯が施された北筒式は道東地方にもあるかもしれない。しかし、仮にそうであるにせよ、貼付で胴部文様帯を構成した北筒式が、道東地方において皆無に等しい状況に変わりはないと判断される。
- 註14 表中、道東地方におけるU字の刺突欄は△が多いが、この「？」は不明瞭を意味する。
- 註15 『浜蕨神社遺跡』・『穂香壑穴群(3)』等の資料を参照。
- 註16 結束第1種や綾織の羽状縄文を地文とする北筒式は道東部にも存在するが、道央部に比べて少ない(表Ⅱ-1参照)。
- 註17 『美岬3遺跡』・『嘉多山4遺跡』・『大栗毛1遺跡』・『穂香壑穴群(2)』・『天草1遺跡』等の資料を参照。
- 註18 ノダップⅡ式と共伴したとされる北筒式やノダップⅡ式と北筒式の中間型として置かれている土器の中には、結束第1種の羽状縄文や綾織の羽状縄文のものが含まれているが、これらについては天神山式・柏木川式以前の資料の可能性が考えられる(函館市西股、登別市千歳6、七飯町桜町7遺跡等の出土資料を見る限り、ノダップⅡ式に綾織文は確認されない)。
- 註19 『西股遺跡』等の資料を参照。登別市の『千歳6遺跡』出土資料のように、整然とした羽状縄文のノダップⅡ式も存在するが、それらはより雄瓦台式に近い資料である可能性が考えられるのかもしれない。
- 註20 本稿で筆者が古手と考えている貼付で文様帯を構成した北筒式についての年代測定値は、管見では皆無である。
- 註21 穂香川右岸遺跡抽出のIAAA-41474と41475については4,200年前付近の数値であるが、土器付着物炭化物の測定なので、海洋リザーバー効果の影響を考慮し、ここでは検討対象から除外した。
- 註22 ここで工藤が示している北筒Ⅱ式(トコロ6類)の年代値「4,000~4,200BP 辺りにまとまる」は、天神山式の年代値(4,050±40、4,150±50、4,210±40)にも、柏木川式の年代値(4,200±50、4,160±50、4,070±60等)にも被るものである。
- 註23 熊谷仁志の御教示による。
- 註24 かつて上野秀一は、「トコロ6類」については、道央部において肥厚帯下に貼付文が多用される例が、札幌市N309(上野・高橋編1975、第10図、第Ⅳ群)、同T77(羽賀編 1977)、夕張郡由仁町古山(野村 1967)遺跡などで見つかっており、これらは、「トコロ6類」の中でも古いステージに位置づけられるかと考える。また、古いステージの間には円筒刺突文を欠く例(加藤ほか 1973、第21図27)も伴う可能性がある(上野 1978)と述べた。一方、藤本強もモコト式母体説を部分的に支持する立場ながら、地文の結束羽状縄文に着目して、「トコロ6類土器(古)と円筒上層c式土器はすくなくとも、ある程度平行関係にあったといえよう。(中略)トコロ6類土器は、道東部に広くみられるが、石狩低地帯にも住居地を伴って確実に分布している。しかも、この地域にみられるのは、トコロ6類(古)を主体としたものである(藤本 1981)との考えを示した。トコロ6類の新田細分の可能性に触れた藤本の見解を受け、上野は「もし正しいとすると今まで札幌市内で出土している「トコロ6類」に対応する資料群は、そのほとんどが古いタイプに相当するものと考えられる(上野 1983)と北筒式の道央起源を重ねて示唆した。
- 註25 北筒式の初源期について筆者は4,400~4,200BP くらいを想定している。センター分類ではⅢ群 a-2~3類である。
- 註26 古い属性を残す北筒Ⅱ式の確実な遺構、とりわけ壑穴住居跡の炉などから採取した炭サンプルによる分析が望ましい。

引用・参考文献

(本文関係)

- 1958 峰山巖他「入江貝塚」『北方文化研究報告』第13輯 北海道大学北方文化研究室
- 1966 桑原譲「北筒式土器」『考古学雑誌』第51巻第4号 日本考古学会
- 1968 大場利夫「北海道の石偶および岩偶」『北海道考古学』第4輯 北海道考古学会
- 1977 小林達雄「型式・様式・形式」『日本原始美術大系1 縄文土器』講談社
- 1979 南茅部町(現函館市)教育委員会『臼尻B遺跡発掘調査報告』
- 1981 藤本強「縄文中期の土器-北海道」『縄文土器大成 第2巻』講談社
- 1981 大沼忠春「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻第4号 日本考古学会
- 1982 江別市教育委員会『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書XV
- 1982 八雲町教育委員会『栄浜1遺跡発掘調査概報』
- 1984 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『タブコブ』
- 1984 宮夫靖夫「第Ⅳ章 考察 第8節 II B層の遺構と遺物について」『タブコブ』
- 1984 鷹野光行「縄文時代後半期」『北海道考古学』第20輯 北海道考古学会
- 1985 中田裕香「縄文時代中期末葉から後期初頭の土器編年について」『登別市 千歳5遺跡』北理調報21
- 1986 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』北理調報24
- 1986 大沼忠春「施文原体の変遷-東釧路式土器」『季刊 考古学』第17号 趙山閣
- 1988 遠藤香澄「第4章 総括 II 新道4遺跡における大湯系土器の編年について」『木古内町 新道4遺跡』北理調報52
- 1989 大沼忠春「北筒土器様式」『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
- 1989 田口尚「第Ⅳ章(2)忍路土場遺跡出土の後期中葉の土器について」『小樽市 忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北理調報53
- 1989 恵庭市教育委員会『中島松5遺跡A地点』
- 1989 函館市教育委員会『陣川町遺跡』
- 1990 (財)北海道埋蔵文化財センター『余市町 登町2遺跡・登町3遺跡』北理調報67
- 1991 (財)北海道埋蔵文化財センター『余市町 フゴッペ貝塚』北理調報72
- 1993 西本豊弘「表紙の図版の説明」『動物考古学』第1号 動物考古学研究会
- 1993 戸井町(現函館市)教育委員会『戸井貝塚Ⅲ』
- 1994 戸井町(現函館市)教育委員会『戸井貝塚Ⅳ』
- 1994 東奥日報社『特集 三内丸山遺跡』
- 1994 佐藤一夫「入江式土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 森田知忠「ノダップ2式土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 a 米村衛「モコト式土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 b 米村衛「トコロ6類・5類土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 c 米村衛「北筒式土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1995 三内丸山縄文発信の会『森と海の都「三内丸山」』
- 1996 青森県教育委員会『三内丸山遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
- 1996 東北歴史資料館『東北地方の土偶』(財)宮城県文化財保護協会
- 1996 江別市教育委員会『7丁目2遺跡(3)・元江別5遺跡(3)』江別市文化財調査報告書78
- 1996 上屋眞一「縄文時代後期中葉の土器について」『ユカンボシE9遺跡B地区』恵庭市教育委員会
- 1996 北海道文化財保護協会『千歳市 オサツ15・16・18遺跡』
- 1996 泉静香「4まとめ 北筒式土器の口縁部形態と文様構成の比較」『千歳市 オサツ15・16・18遺跡』
- 1997 土肥孝「縄文時代の装身具」『日本の美術』No.369 至文堂
- 1997 日本ベトロジー学会編『土壌調査ハンドブック 改訂版』博友社
- 1997 泉静香「6まとめ 遺史部における北筒式土器の文様形態にみられる新旧要素について」『千歳市 オサツ15遺跡(2)』
- 1997 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 キウス5遺跡(4) B地区・C地区』北理調報116
- 1997 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『柏原5遺跡』
- 1997 熊谷仁志「縄文時代中期の土器」『美々・美沢』(財)北海道埋蔵文化財センター
- 1999 「土偶とその情報」研究会『土偶研究の地平3』勉誠出版(株)
- 1999 宮夫靖夫「東釧路式土器の分類と編年について」『苫小牧市埋蔵文化財センター所報』1
- 2000 工藤肇「柏原1～N式土器について ～柏原5遺跡出土の縄文後期中葉の土器を主体に～」『苫小牧市埋蔵文化財センター所報』2

- 2001 土肥研誌「Vまとめ 5土器 (4)編年」『千歳市 キウス4遺跡(8)』北理調報157
- 2001 熊谷仁志「北海道の縄文土器」『旧石器・縄文文化』新・北海道の古代1 北海道新聞社
- 2001 鈴木克彦「北日本の縄文後期土器編年の研究」雄山閣
- 2002 千歳市教育委員会「梅川4遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書XXⅡ
- 2003 千歳市教育委員会「祝梅川遺跡・祝梅川矢島遺跡・梅川4遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書XXⅢ
- 2004 小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社
- 2006 厚真町教育委員会「上幌内モイ遺跡(1)」
- 2006 森岬子「北筒式土器について」『北方探求』8 北方懇話会
- 2007 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡』北理調報238
- 2008 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 キウス9遺跡』北理調報252
- 2008 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 梅川4遺跡(1)』北理調報253
- 2008 (財)北海道埋蔵文化財センター「北斗市 矢不來6遺跡(2)・矢不來9遺跡・矢不來11遺跡(2)」北理調報257
- 2008 会田容弘「器面調整」『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』刊行委員会
- 2008 阿部明義「堂林式・御殿山式土器」『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』刊行委員会
- 2008 熊谷仁志「北海道地方」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系—』同成社

(Ⅱ章2関係)

- 1958 児玉作左衛門・大場利夫・竹内収太「サイベ沢遺跡—函館郊外楢村サイベ沢遺跡発掘報告書」函館博物館
- 1962 釧路市教育委員会「東釧路」
- 1963 石川政治「函館市天佑寺貝塚」『石器時代』第6号・石器時代文化研究会
- 1963 東京大学文学部「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」上巻
- 1964 東京大学文学部「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」下巻
- 1964 栗山町教育委員会「栗山町の文化財」
- 1965 大場利夫・蛭子千代志「函館郊外棟瓦台遺跡」『北方文化研究報告』第20輯
- 1965 吉崎昌一「北海道」『日本の考古学』Ⅱ 河出書房新社
- 1966 桑原譲「北筒式土器」『考古学雑誌』第51巻第4号 日本考古学会
- 1967 夕雲東高等学校郷土研究部「夕雲川流域の先史遺跡」
- 1967 菊池俊彦「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』第3輯 北海道考古学会
- 1968 桑原譲「余市式土器—その研究史と現在、岡岡上層式土器の関連について」『考古学雑誌』第54巻第1号 日本考古学会
- 1968 斉藤保徳「嵐山遺跡」日本国有鉄道札幌工事局
- 1970 当別町教育委員会「伊達山遺跡」
- 1970 岩崎隆人他「第2章 考察」『伊達山遺跡』当別町教育委員会
- 1971 釧路開発建設部「浜別海遺跡」
- 1973 札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告書Ⅰ」
- 1973 湧別町教育委員会「二軒橋遺跡」
- 1974 札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告書Ⅲ」
- 1974 札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告書Ⅳ」
- 1974 札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告書Ⅴ」
- 1974 北海道第四紀研究会「西股」
- 1974 山田信郎「Ⅱ 関連科学による検討事項」『西股』北海道第四紀研究会
- 1975 札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告書Ⅱ」
- 1975 上野秀一・高橋和樹「結語」『札幌市文化財調査報告書Ⅱ』
- 1975 直井孝一編「小野幌遺跡の発掘調査(略報)札幌市小野幌遺跡における縄文文化早期及び中期遺物出土地点の発掘」北海道先史考古学研究会
- 1975 知内町教育委員会「森越—縄文前・中期の竪穴住居遺跡—」
- 1975 新冠町教育委員会「水川遺跡」
- 1976 江別市教育委員会「小島の沢遺跡発掘調査報告書—江別市第34号遺跡—」江別市文化財調査報告書Ⅱ
- 1976 中村齋「第7章 まとめ」『小島の沢遺跡発掘調査報告書—江別市第34号遺跡—』
- 1976 藤本強「第二節 遺物・遺構に関するいくつかの問題について」『トコロチャン南根遺跡』常呂町教育委員会
- 1976 大沼忠春編「元和」乙部町教育委員会
- 1977 釧路市立郷土博物館「釧路市興津遺跡発掘報告」
- 1977 札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告書Ⅴ」

- 1977 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書XVI』
- 1978 上野秀一「石狩砂丘地帯の遺跡群について—考古学資料からみた紅葉山砂丘、花畔砂堤列の固定年代—」『北海道考古学』第14輯 北海道考古学会
- 1978 北海道教育委員会『北海道石狩高等学校建設用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1978 北海道教育委員会『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』
- 1978 釧路市立郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ』
- 1978 釧路市立郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市東釧路第3遺跡発掘報告』
- 1978 広島町(現北広島市)教育委員会『富ヶ岡遺跡』
- 1979 釧路市立郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市興津遺跡発掘報告Ⅲ』
- 1979 門別町(現日高町)教育委員会『日高門別の先史遺跡』
- 1980 (財)北海道埋蔵文化財センター『江別市 大麻1遺跡・西野幌1遺跡・西野幌3遺跡・東野幌1遺跡』
- 1980 名寄市教育委員会『名寄市智東天塚川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』名寄市文化財調査報告書Ⅱ
- 1980 標茶町教育委員会『茅沼遺跡群Ⅱ』
- 1980 斜里町教育委員会『知床国立公園・梶別川口遺跡』
- 1980 藤本強「モコト貝塚表面採集の土器」『ライトコロ川口遺跡』
- 1981 藤本強「縄文中期の土器—北海道」『縄文土器大成 第2巻』講談社
- 1981 大沼忠春「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻第4号 日本考古学会
- 1981 江別市教育委員会『東野幌4』江別市文化財調査報告書XII
- 1981 佐藤訓敏「Ⅲ考察 4土器群について」『東野幌4』江別市教育委員会
- 1981 高橋正勝「Ⅲ考察 4土器群について 註中コメント」『東野幌4』江別市教育委員会
- 1981 江別市教育委員会『元江別遺跡群』江別市文化財調査報告書XIII
- 1981 (財)北海道埋蔵文化財センター『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』北理調報1
- 1981 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』北理調報3
- 1981 永峯光一「大別としての中期」『縄文土器大成 第2巻』講談社
- 1982 野中一宏「Ⅱ-1. 2)発掘区内の順序」『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書XV
- 1982 江別市教育委員会『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書XV
- 1982 高橋正勝「Ⅲ. 考察 3. 萩ヶ岡式土器の設定」『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書XV
- 1982 江別市教育委員会『札幌台地の縄文時代集落址 北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書』
- 1982 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書XXV』
- 1982 (財)北海道埋蔵文化財センター『岩見沢市 東山5遺跡』北理調報4
- 1982 (財)北海道埋蔵文化財センター『江別市 吉井の沢の遺跡』北理調報5
- 1982 常呂町(現北見市)教育委員会『岐阜第二遺跡』
- 1983 北海道文化財保護協会『南樺府5遺跡』
- 1983 (財)北海道埋蔵文化財センター『三石町 旭町1遺跡』北理調報10
- 1983 (財)北海道埋蔵文化財センター『登別市 千歳5遺跡』北理調報12
- 1983 (財)北海道埋蔵文化財センター『登別市 川上B遺跡』北理調報13
- 1983 苫小牧市教育委員会『静川16遺跡—縄文時代の環濠と集落—』
- 1983 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書XXVI』
- 1983 上野秀一「第5章発掘区出土遺物 第1節土器群について」『札幌市文化財調査報告書XXVI』
- 1983 江別市教育委員会『大麻6 旧豊平河畔』江別市文化財調査報告書XVI
- 1983 千歳市教育委員会『メボシ川2遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書Ⅲ
- 1983 高橋正勝「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』第4巻 雄山閣
- 1983 豊原照司「北海道東部の土器」『縄文文化の研究』第4巻 雄山閣
- 1983 佐藤訓敏「猿別C遺跡の土器に関する若干の考察」『猿別C遺跡の考古学的調査』幕別町教育委員会
- 1983 後藤秀彦「猿別C遺跡出土の土器とモコト式土器」『猿別C遺跡の考古学的調査』幕別町教育委員会
- 1984 中野裕香「縄文時代後半期」『北海道考古学』第20輯 北海道考古学会
- 1984 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書XXVII』
- 1984 江別市教育委員会『旧豊平河畔 七丁目沢7』江別市文化財調査報告書XVIII
- 1984 村越潔『増補 円筒土器文化』雄山閣
- 1985 (財)北海道埋蔵文化財センター『礼文島幌泊段丘の遺跡群 東上泊・上泊3・上泊4遺跡』北理調報19
- 1985 (財)北海道埋蔵文化財センター『登別市 千歳5遺跡』北理調報21
- 1985 中田裕香「縄文時代中期末葉から後期初頭の土器編年について」『登別市 千歳5遺跡』北理調報21
- 1985 静内町(現新ひだか町)教育委員会『静内町清水丘における考古学的調査』
- 1985 美幌町教育委員会『ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡』

- 1985 湧別町『湧別市川Ⅱ遺跡』
- 1986 虻田町(現洞爺湖町)教育委員会『入江貝塚 北海道虻田町入江遺跡における詳細分布調査の概要報告』
- 1986 室蘭市教育委員会『水元遺跡』
- 1986 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』北埋調報24
- 1986 (財)北海道埋蔵文化財センター『登別市 川上B遺跡・C地区』北埋調報27
- 1986 江別市教育委員会『高砂遺跡』江別市文化財調査報告書XXI
- 1986 江別市教育委員会『旧豊平河畔』江別市文化財調査報告書二三
- 1986 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』
- 1986 赤石慎三『第7章 厚真1遺跡 第4節 A地区包含層出土遺物 1土器』『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』
- 1986 工藤肇・赤石慎三『第7章 厚真1遺跡 第6節 小括』『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』
- 1986 千歳市教育委員会『梅川3遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書ⅩⅡ
- 1986 大沼忠春『北海道の押型土器』『考古学ジャーナル』第267号 ニュー・サイエンス社
- 1986 網走市教育委員会『嘉多山遺跡』
- 1986 富良野市教育委員会『鳥沼遺跡』富良野市文化財調査報告第1輯
- 1987 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書XXXⅡ N295遺跡』
- 1987 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』
- 1987 門別町(現日高町)教育委員会『エサンスップ4遺跡』
- 1987 恵庭市教育委員会『カリンバ2遺跡』
- 1987 江別市教育委員会『高砂遺跡』江別市文化財調査報告書25
- 1987 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅹ・フレバツ遺跡群Ⅱ・ベンケンナイ川流域の遺跡群Ⅰ』北埋調報35
- 1987 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 ママチ遺跡Ⅲ』北埋調報36
- 1987 (財)北海道埋蔵文化財センター『江別市 西野幌3遺跡』北埋調報39
- 1987 (財)北海道埋蔵文化財センター『砂川市 空知太2遺跡』北埋調報41
- 1987 澤四郎『銅路の先史』銅路叢書24
- 1987 音更町教育委員会『段原2』
- 1988 宇田川洋『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
- 1988 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅶ・ベンケンナイ川流域の遺跡群Ⅱ』北埋調報44
- 1988 (財)北海道埋蔵文化財センター『江別市 西野幌11遺跡・西野幌13遺跡・西野幌14遺跡・下学田遺跡』北埋調報48
- 1988 (財)北海道埋蔵文化財センター『深川市 音江2遺跡』北埋調報49
- 1988 (財)北海道埋蔵文化財センター『深川市 国見2遺跡』北埋調報50
- 1988 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書XXXⅤ M67遺跡』
- 1988 江別市教育委員会『高砂遺跡(4)』江別市文化財調査報告書26
- 1988 名寄市教育委員会『日連33遺跡』
- 1988 門別町(現日高町)教育委員会『エサンスップ2・3遺跡』
- 1988 富良野市教育委員会『無頭川遺跡』富良野市文化財調査報告第4輯
- 1989 (財)北海道埋蔵文化財センター『小樽市 忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北埋調報53
- 1989 (財)北海道埋蔵文化財センター『江別市 西野幌12遺跡』北埋調報54
- 1989 (財)北海道埋蔵文化財センター『深川市 国見2遺跡(Ⅱ)』北埋調報56
- 1989 (財)北海道埋蔵文化財センター『深川市 納内3遺跡』北埋調報60
- 1989 熊谷仁志『Ⅷ. 成果と問題点 2. 押型土器・刺突土器・押引文土器について』『深川市 納内3遺跡』北埋調報60
- 1989 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書XXXⅧ T151遺跡南側地点』
- 1989 江別市教育委員会『高砂遺跡(5)』江別市文化財調査報告書30
- 1989 江別市教育委員会『元江別10遺跡』江別市文化財調査報告書32
- 1989 江別市教育委員会『西野幌3遺跡』江別市文化財調査報告書33
- 1989 恵庭市教育委員会『中島松5遺跡A地点』
- 1989 恵庭市教育委員会『カリンバ2遺跡 第1地点における調査』
- 1989 銅路市埋蔵文化財調査センター『銅路市 材木町5遺跡』
- 1989 大沼忠春『北筒土器様式』『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
- 1989 門別町(現日高町)教育委員会『エサンスップ2遺跡 エサンスップ3遺跡』
- 1989 杉浦重信『第Ⅴ章 考察 第1節 富良野地方の北筒式土器について』『西達4遺跡』富良野市文化財調査報告書第5輯
- 1990 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ』北埋調報62
- 1990 大沼忠春『Ⅷ 美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査 4まとめ』『美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ』北埋調報62

- 1990 (財)北海道埋蔵文化財センター『余市町 登町2遺跡・登町3遺跡』北理調報67
- 1990 江別市教育委員会『高砂遺跡(6)』江別市文化財調査報告書36
- 1990 江別市教育委員会『高砂遺跡(7)』江別市文化財調査報告書37
- 1990 江別市教育委員会『元江別10遺跡(2)』江別市文化財調査報告書38
- 1990 北海道文化財研究所『茶津貝塚』
- 1990 千歳市教育委員会『イヨマイ6遺跡における考古学的調査(2)』千歳市文化財調査報告書XV
- 1990 標津町教育委員会『伊茶仁チシネ第3 竪穴群遺跡』
- 1990 門別町(現日高町)教育委員会『ベサウンコツ遺跡 ユクウンコツ2遺跡』
- 1991 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群 XV』北理調報69
- 1991 大沼忠春「7まとめ(2)土器」『美沢川流域の遺跡群 XV』北理調報69・pp252～pp254
- 1991 (財)北海道埋蔵文化財センター『余市町 フゴッベ貝塚』北理調報72
- 1991 a 熊谷仁志「V まとめ 2土器(5)フゴッベ式土器の設定」『余市町 フゴッベ貝塚』北理調報72
- 1991 b 熊谷仁志「シュノツナイ式土器に関する一考察」『北海道考古学』第27集 北海道考古学会
- 1991 江別市教育委員会『高砂遺跡(8)』江別市文化財調査報告書44
- 1991 江別市教育委員会『高砂遺跡(9)』江別市文化財調査報告書46
- 1992 八雲町教育委員会『コタン温泉遺跡』
- 1992 北海道文化財研究所『泊村 榎株1・2遺跡』
- 1992 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』
- 1992 恵庭市教育委員会『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』
- 1992 江別市教育委員会『高砂遺跡(10)』江別市文化財調査報告書52
- 1992 江別市教育委員会『西野榎3遺跡(2)』江別市文化財調査報告書53
- 1992 江別市教育委員会『7丁目沢2遺跡』江別市文化財調査報告書55
- 1992 (財)北海道埋蔵文化財センター『音威子府村 咲来2遺跡・咲来3遺跡』北理調報73
- 1992 (財)北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群 XV』北理調報77
- 1992 釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市北斗遺跡Ⅱ』
- 1993 (財)北海道埋蔵文化財センター『身室町 北明1遺跡(2)・音更町 西昭和2遺跡・池田町 十日町5遺跡』北理調報82
- 1993 恵庭市教育委員会『西島松14遺跡・西島松15遺跡』
- 1993 江別市教育委員会『高砂遺跡(11)』江別市文化財調査報告書58
- 1993 江別市教育委員会『7丁目沢2遺跡(2)』江別市文化財調査報告書60
- 1993 釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市北斗遺跡Ⅲ』
- 1993 釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市北斗遺跡第1地点調査報告書』
- 1993 常呂町(現北見市)教育委員会『史跡 常呂遺跡』
- 1993 網走市教育委員会『嘉多山3遺跡・嘉多山4遺跡』
- 1993 熊谷仁志「押型文土器の変遷と縄文文化への位置付け吉崎昌一先生選集記念論集 先史学と関連科学」吉崎昌一先生選集記念論集刊行会
- 1994 江別市教育委員会『7丁目沢6遺跡』江別市文化財調査報告書65
- 1994 網走市教育委員会『美岬3遺跡』
- 1994 斜里町教育委員会『シュマトカリベツ9遺跡発掘調査報告書』
- 1994 佐原真「おわりに」『発掘を科学する』岩波新書 赤版355・pp223(6行目)～pp224(7行目)
- 1994 戸沢充則編『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 高橋正勝「サイベ沢式土器(中期)」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 a 米村衛「モコト式土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 b 米村衛「トコロ6類・5類土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1994 c 米村衛「北筒式土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 1995 八雲町教育委員会『栄浜1遺跡』
- 1995 (財)北海道埋蔵文化財センター『豊浦町 高岡1遺跡(2)』北理調報91
- 1995 藤原秀樹「Ⅱ.成果と問題点 2.川西地区の縄文時代中期の土器」『豊浦町 高岡1遺跡(2)』北理調報91
- 1995 (財)北海道埋蔵文化財センター『ベンケナイ川流域の遺跡群Ⅲ』北理調報95
- 1995 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』
- 1995 江別市教育委員会『高砂遺跡(13)』江別市文化財調査報告書75
- 1995 釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市北斗遺跡Ⅴ』
- 1995 釧路市埋蔵文化財調査センター『釧路市東釧路貝塚調査報告書』
- 1995 門別町(現日高町)教育委員会『ベサウンコツ遺跡Ⅱ』
- 1996 豊原照司「北筒式土器の型式認識について」『北海道考古学』第32輯 北海道考古学会

- 1996 高橋理「『余市式土器』再考」『北海道考古学』第32輯 北海道考古学会
- 1996 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書51 T276遺跡』
- 1996 江別市教育委員会『高砂遺跡(14)』江別市文化財調査報告書79
- 1996 江別市教育委員会『7丁目沢2遺跡(3)・元別5遺跡(3)』江別市文化財調査報告書78
- 1996 恵庭市教育委員会『ユカンボシE9遺跡B地区』
- 1996 北海道文化財保護協会『夕張市 十三哩遺跡・滝の上4遺跡』
- 1996 北海道文化財保護協会『千歳市 ポンオサツ遺跡・ケネフチ5遺跡』
- 1996 北海道文化財保護協会『千歳市 オサツ15・16・18遺跡』
- 1996 泉静香『4まとめ 北筒式土器の口縁部形態と文様構成の比較』『千歳市 オサツ15・16・18遺跡』
- 1996 (財)北海道埋蔵文化財センター『豊浦町 高岡1遺跡(3)・高岡2遺跡』北理調報106
- 1997 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『美沢10遺跡』
- 1997 長万部町教育委員会『栄原2遺跡(1)』
- 1997 北海道文化財保護協会『千歳市 オサツ15遺跡(2)』
- 1997 泉静香『6まとめ 道央部における北筒式土器の文様形態にみられる新旧要素について』
『千歳市 オサツ15遺跡(2)』
- 1997 北海道文化財保護協会『千歳市 ポンオサツ遺跡(2)・オサツ18遺跡(2)・ケネフチ5遺跡(2)』
- 1997 江別市教育委員会『7丁目沢2遺跡(4)・元野幌5遺跡(4)』江別市文化財調査報告書83
- 1997 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 キウス5遺跡(4) B地区・C地区』北理調報116
- 1997 熊谷仁志『縄文時代中期の土器』『美々・美沢』(財)北海道埋蔵文化財センター
- 1997 小樽先史懇話会『大谷地貝塚と五十嵐遺一余市式土器をめぐって』
- 1997 大島秀俊・川内基『5.余市式土器研究の問題点』『大谷地貝塚と五十嵐遺一余市式土器をめぐって』
小樽先史懇話会
- 1997 門別町(現日高町)教育委員会『シノタイII遺跡』門別町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 1998 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『美沢東遺跡群』
- 1998 赤石慎三『第6章 第3節 美沢東6遺跡』『美沢東遺跡群』
- 1998 恵庭市教育委員会『カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』
- 1998 余市町教育委員会『登川右岸遺跡』
- 1998 余市町教育委員会『大谷地貝塚』
- 1998 武田修『北海道常呂川河口出土の平底押型文土器について』『野村崇先生還暦記念論集 北方の考古学』
野村崇先生還暦記念論集刊行会
- 1998 江別市教育委員会『高砂遺跡(15)』江別市文化財調査報告書86
- 1998 江別市教育委員会『7丁目沢6遺跡(5)』江別市文化財調査報告書87
- 1998 北海道文化財保護協会『千歳市 ケネフチ5遺跡(3)』
- 1998 (財)北海道埋蔵文化財センター『芦別市 滝里遺跡群Ⅳ』北理調報123
- 1999 七飯町教育委員会『桜町6遺跡・7遺跡』
- 1999 白老町教育委員会『虎杖浜2・ボンアヨロ4遺跡』
- 1999 余市町教育委員会『入舟遺跡における考古学的調査』
- 1999 (財)北海道埋蔵文化財センター『恵庭市 ユカンボシE7遺跡』北理調報132
- 1999 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 ユカンボシC15遺跡(2)』北理調報133
- 1999 (財)北海道埋蔵文化財センター『芦別市 滝里遺跡群Ⅳ』北理調報137
- 1999 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書60 K496遺跡』
- 1999 江別市教育委員会『高砂遺跡(16)』江別市文化財調査報告書93
- 1999 網走市教育委員会『浜藪琴神社遺跡』
- 1999 赤石慎三『苫小牧地方の円筒上層式について』『苫小牧市埋蔵文化財センター所報』1
- 2000 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 キウス4遺跡(5)』北理調報144
- 2000 江別市教育委員会『高砂遺跡(17)』江別市文化財調査報告書95
- 2000 常呂町(現北見市)教育委員会『常呂川河口遺跡(2)』
- 2000 武田修『第ⅩⅦ章 まとめ』『常呂川河口遺跡(2)』
- 2000 幕別町教育委員会『礼内N遺跡』
- 2000 礼文町教育委員会『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書』
- 2001 (財)北海道埋蔵文化財センター『鶴川町 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡』北理調報153
- 2001 熊谷仁志『北海道の縄文土器』『旧石器・縄文文化』新・北海道の古代1 北海道新聞社
- 2001 広田良成『Ⅲ 調査の方法 6 遺物の分類 (1)土器』『八雲町 山崎4遺跡』北理調報162
- 2001 網走市埋蔵文化財センター『網走市大家毛1遺跡調査報告書1』
- 2001 東京大学大学院人文社会系研究科『トコロチャシ跡遺跡』
- 2002 立田理『Ⅳ 成果と問題点 1 山越3遺跡のⅢ群a-3類土器の編年的位置と放射性炭素年代について』
『八雲町 山越3遺跡・山越4遺跡』北理調報166

- 2002 千歳市教育委員会『梅川4遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書XXVII
- 2002 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』
- 2002 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』
- 2002 江別市教育委員会『大麻6遺跡(3)』江別市文化財調査報告書103
- 2003 (財)北海道埋蔵文化財センター『根室市 徳香堅穴群(2)』北埋調報184
- 2003 (財)北海道埋蔵文化財センター『鶴川町 米原4遺跡(2)・宮戸4遺跡(2)』北埋調報185
- 2003 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 キウス4遺跡(10)』北埋調報187
- 2003 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 オルイカ2遺跡』北埋調報189
- 2003 江別市教育委員会『大麻6遺跡(4)・七丁目6遺跡(9)』江別市文化財調査報告書107
- 2003 千歳市教育委員会『祝梅川遺跡・祝梅川矢島遺跡・梅川4遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書XXX
- 2003 門別町(現日高町)教育委員会『チャシコツバナクシナイ遺跡』門別町埋蔵文化財調査報告書第11集
- 2004 (財)北海道埋蔵文化財センター『根室市 徳香堅穴群(3)』北埋調報198
- 2004 (財)北海道埋蔵文化財センター『鶴川町 米原4遺跡(3)・宮戸4遺跡(3)』北埋調報202
- 2004 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 チブニー2遺跡(2)』北埋調報207
- 2004 江別市教育委員会『七丁目6遺跡(10)』江別市文化財調査報告書110
- 2004 網走市教育委員会『美幌3遺跡』
- 2004 (財)北海道埋蔵文化財センター『遺跡が語る北海道の歴史—(財)北海道埋蔵文化財センター25周年記念誌—』
- 2004 赤石慎三『石狩低地帯南部における縄文時代中期後葉の土器』『東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題』海峽土器編年研究会第2回
- 2004 大森司純『縄文文化前・中期』『北海道考古学』第40輯 北海道考古学会
- 2005 (財)北海道埋蔵文化財センター『根室市 徳香川右岸遺跡』北埋調報212
- 2005 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 オルイカ2遺跡(2)』北埋調報221
- 2005 恵庭市教育委員会『カリバ2遺跡 第Ⅲ地点』
- 2005 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書79 M459遺跡』
- 2005 石狩市教育委員会『石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書』
- 2005 幕別町教育委員会『札幌K遺跡Ⅱ』
- 2005 a 佐原真『原始・古代の考古資料』『佐原真の仕事1 考古学への案内』岩波書店・pp48(5行目)～pp50(1行目)
(初出・1995「原始・古代の考古資料」『岩波講座 日本通史』別巻3 史料論・岩波書店)
- 2005 b 佐原真『考古学を語る』『佐原真の仕事1 考古学への案内』岩波書店
(初出・1988「総論(原題)」『弥生文化の研究』第10巻・雄山閣)
- 2006 厚真町教育委員会『上幌内モイ遺跡(1)』
- 2006 (財)北海道埋蔵文化財センター『恵庭市 西島松5遺跡(4)』北埋調報234
- 2006 (財)北海道埋蔵文化財センター『早来町 大町2遺跡』北埋調報238
- 2006 鶴居村教育委員会『下幌呂15遺跡発掘調査報告書』
- 2006 森岬子『土器について』『北方探求』8 北方懇話会
- 2006 立田理『円筒土器上層b式からサイベリツ式土器の編年方法について』『北海道考古学』第42輯 北海道考古学会
- 2007 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡』北埋調報238
- 2007 江別市教育委員会『高砂遺跡(18)・江別市内遺跡分布調査(4)』江別市文化財調査報告書117
- 2007 江別市教育委員会『七丁目6遺跡(11)』江別市文化財調査報告書118
- 2008 樺太町教育委員会『ウライヤ遺跡越前地点調査報告書』
- 2008 (財)北海道埋蔵文化財センター『恵庭市 西島松3遺跡・西島松5遺跡(5)』北埋調報248
- 2008 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 キウス9遺跡』北埋調報252
- 2008 (財)北海道埋蔵文化財センター『千歳市 梅川4遺跡(1)』北埋調報253
- 2008 (財)北海道埋蔵文化財センター『網路町 天塚1遺跡』北埋調報254
- 2008 小笠原雅行『円筒上層式土器』『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』刊行委員会
- 2008 工藤研治『土器式土器』『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』刊行委員会
- 2008 a 熊谷仁志『北海道地方』『縄文時代の考古学2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系—』同成社
- 2008 b 熊谷仁志『北海道埋蔵文化財センター』『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』刊行委員会
- 2008 矢野健一『縄文時代の編年』『縄文時代の考古学2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系—』同成社
- 2009 厚真町教育委員会『ニタツナイ遺跡(1)』
- 2009 村本周三『北海道における縄文時代中・後期の「平地住居跡」とその暦年代』『考古学研究』第56巻第2号 考古学研究会
- 2009 名寄市教育委員会『智北6』名寄市文化財報告書X
- 2009 北沢実・大島居千鶴『十勝地域の縄文土器概観』『帯広百年記念館』第27号 帯広百年記念館



H9区第Ⅱ黒色土層調査状況



H~K35区第Ⅱ黒色土層調査状況

図版 2



C地区東側メインセクション



C地区西側メインセクション



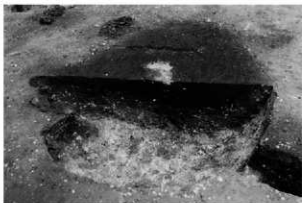
B地区メインセクション



VH-1 検出状況



VH-1HF-1 土層断面



VH-1HP-1 土層断面



VH-1 炭化材出土状況



VH-1HP-3 土層断面



VH-1HP-4 土層断面

図版 4



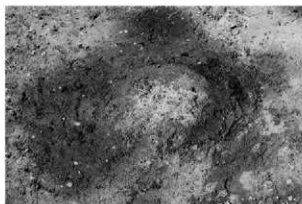
VH-2 検出状況



VH-2 HF-1 土層断面



VH-2 炭化材出土状況



VH-2 粘土出土状況



VH-2 HP-1 土層断面



VH-2 HP-3 土層断面



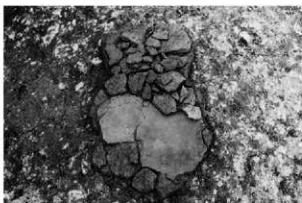
VH-3 土层断面



VH-3 完掘



VH-3 HF-1 土层断面



VH-3 床面土器出土状况



VP-1 土层断面



VP-1 完掘

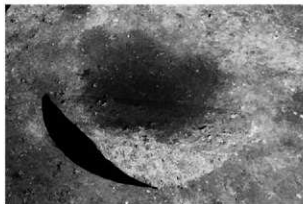


VP-2 土层断面



VP-2 完掘

图版 6



VP-3 土层断面



VP-3 完掘



VP-4 完掘



VP-5 土层断面



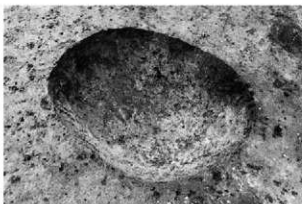
VP-5 遺物出土状況



VP-5 完掘



VP-6 土层断面



VP-6 完掘



VP-7 土层断面



VP-7 完掘



VP-8 土层断面



VP-8 完掘

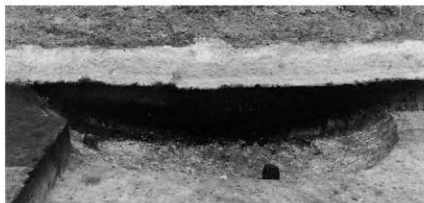


VP-9 土层断面



VP-9 完掘

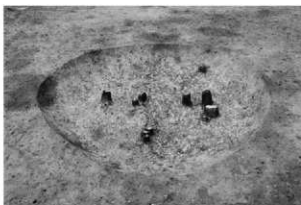
图版 8



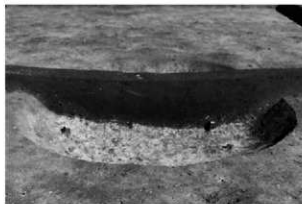
VP-10土层断面



VP-11土层断面



VP-11完掘



VP-12土层断面



VP-12完掘



VP-13土层断面



VP-13完掘



VTP-1 完掘



VTP-2 土层断面



VTP-3 土层断面



VTP-4 完掘

图版10



VTP-5 土层断面



VTP-5 完掘



VTP-6 土层断面



VTP-6 完掘



VTP-7 土层断面



VTP-7 完掘



VF-1 土层断面



VF-2 土层断面



土器集中3 検出状況



土器集中2 検出状況



C 9区第Ⅱ黑色土层土器出土状况



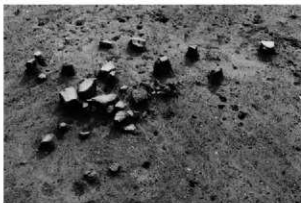
R 10区第Ⅱ黑色土层板状岩偶出土状况



H 35区第Ⅱ黑色土层土器出土状况



I 38区第Ⅱ黑色土层土器出土状况



M 43区第Ⅱ黑色土层土器出土状况



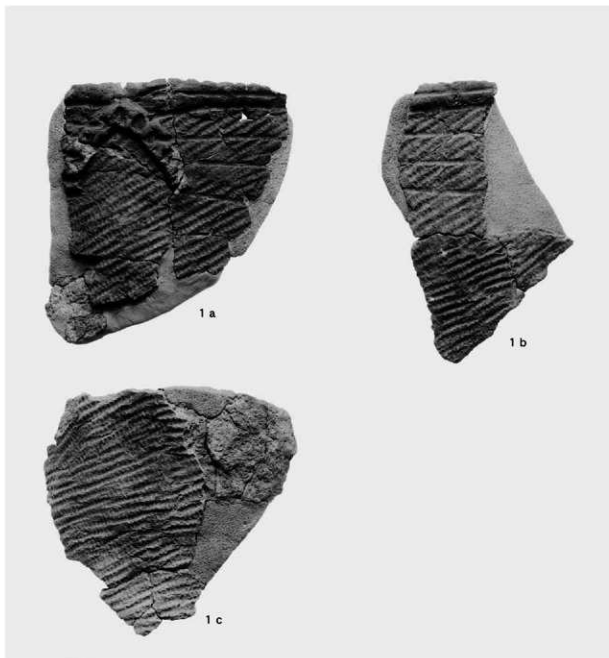
R 35区第Ⅱ黑色土层土器出土状况



N · O 43区第Ⅱ黑色土层土器出土状况



VH-2の土器



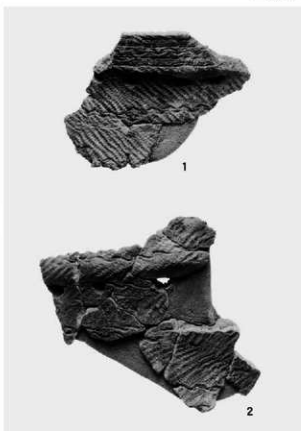
VH-3の土器



VH-3の土器



VP-4の土器



VP-10の土器

VP-5の土器



VP-5の土器

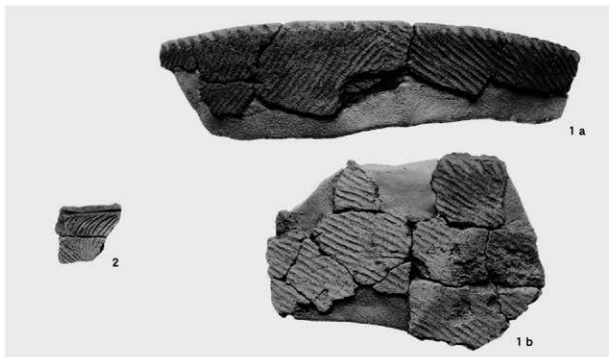


VP-5の土器

図版16



土器集中2の土器



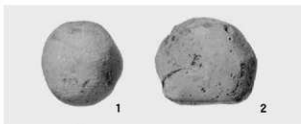
土器集中3の土器



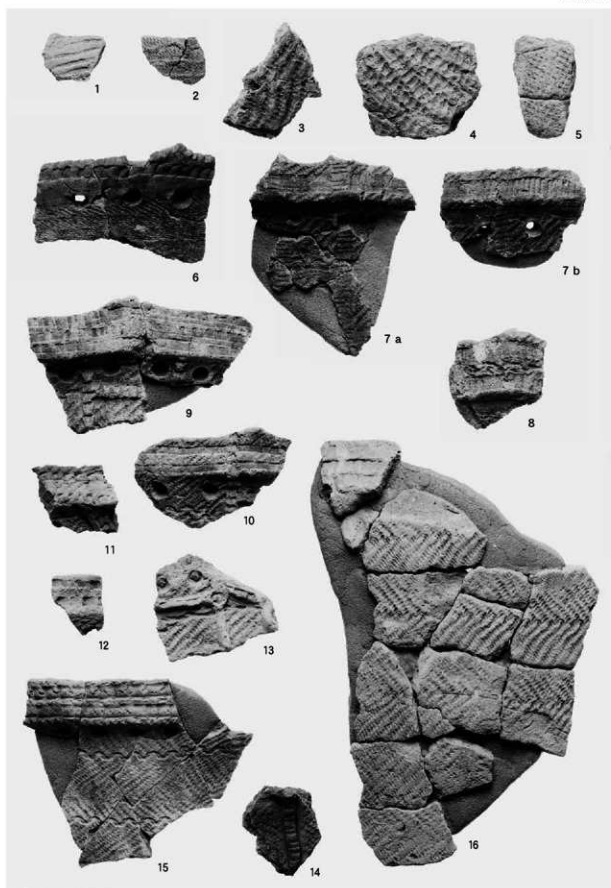
VH-1の石器



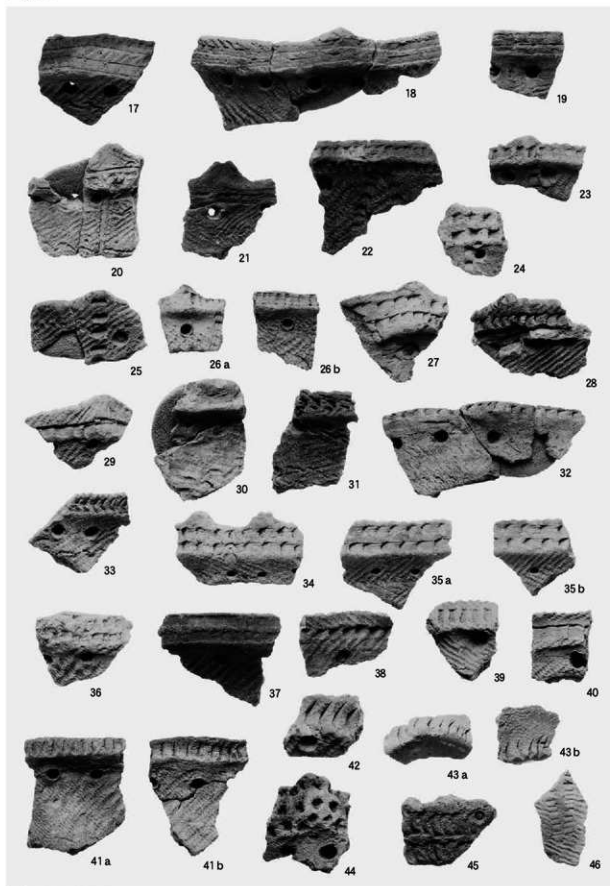
VH-2の石器



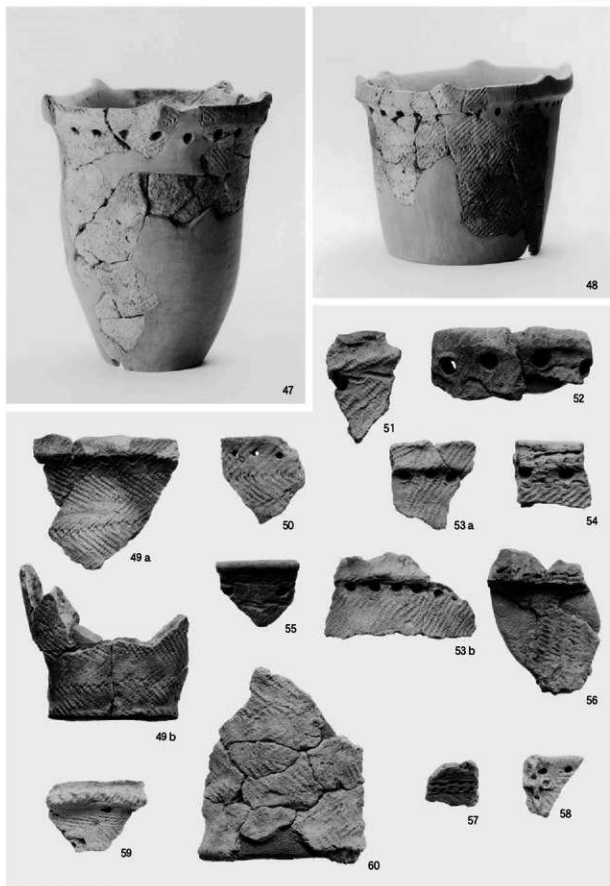
VP-4の石器



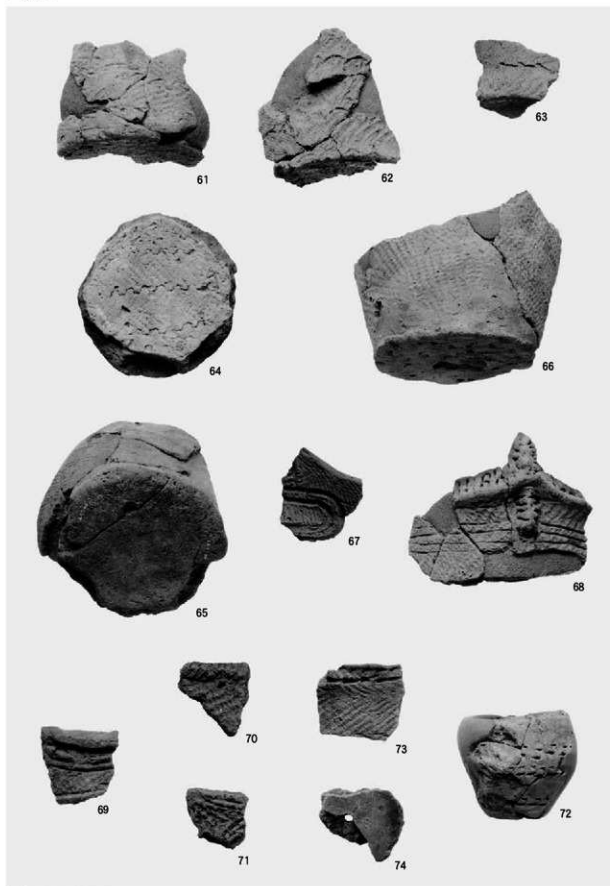
包含層の土器(1)



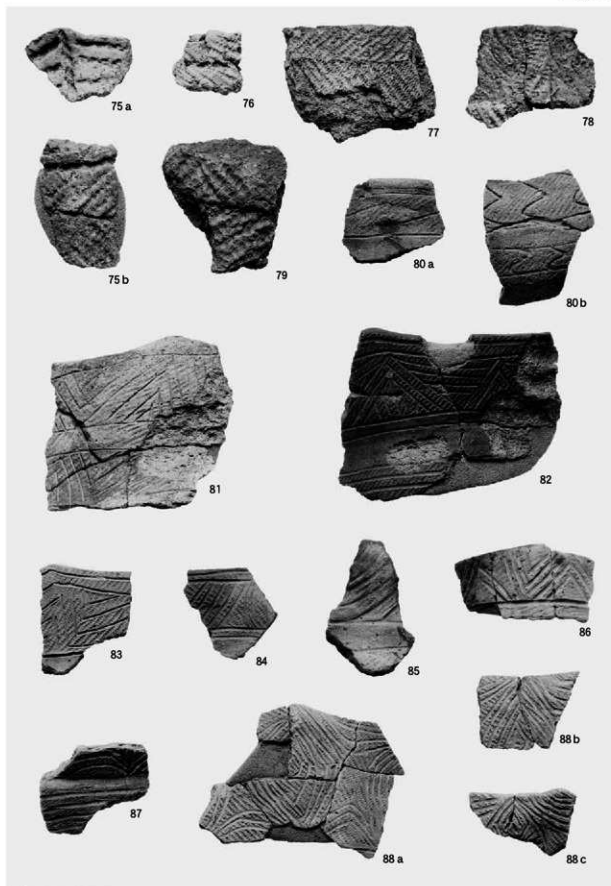
包含層の土器(2)



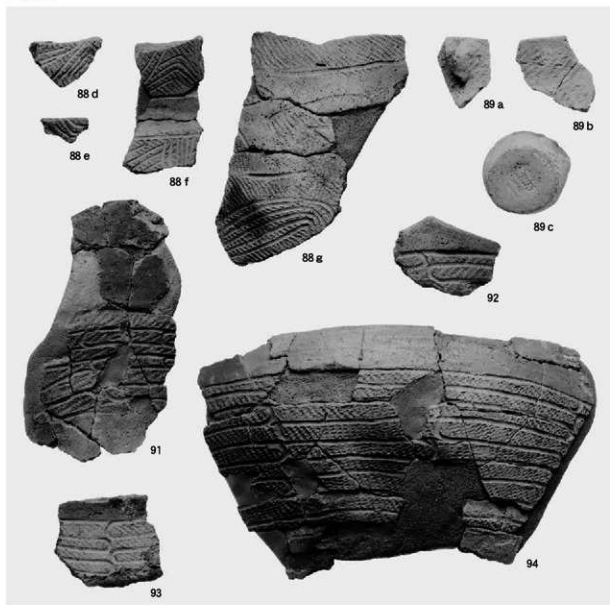
包含層の土器(3)



包含層の土器(4)



包含層の土器(5)





96



98 a

98 b

98 c



97



102 a

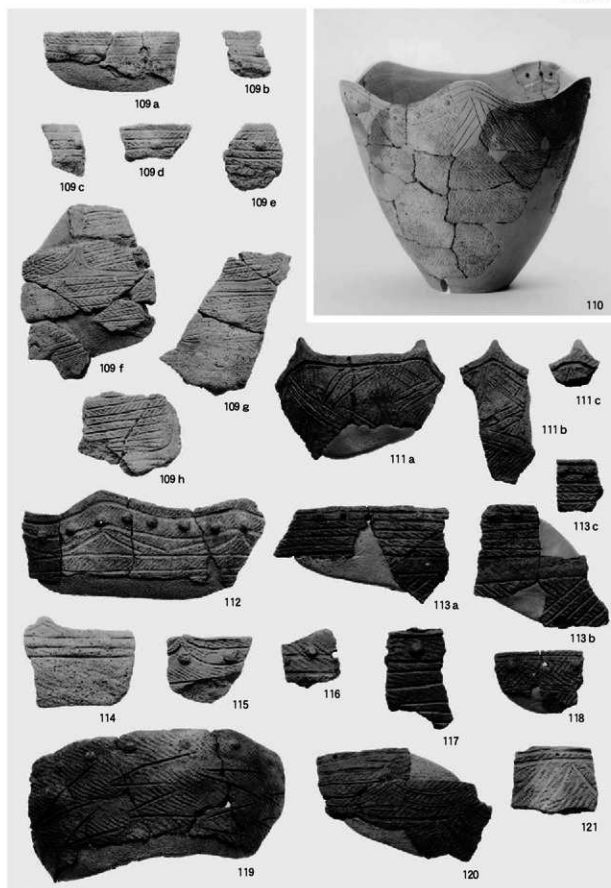


99

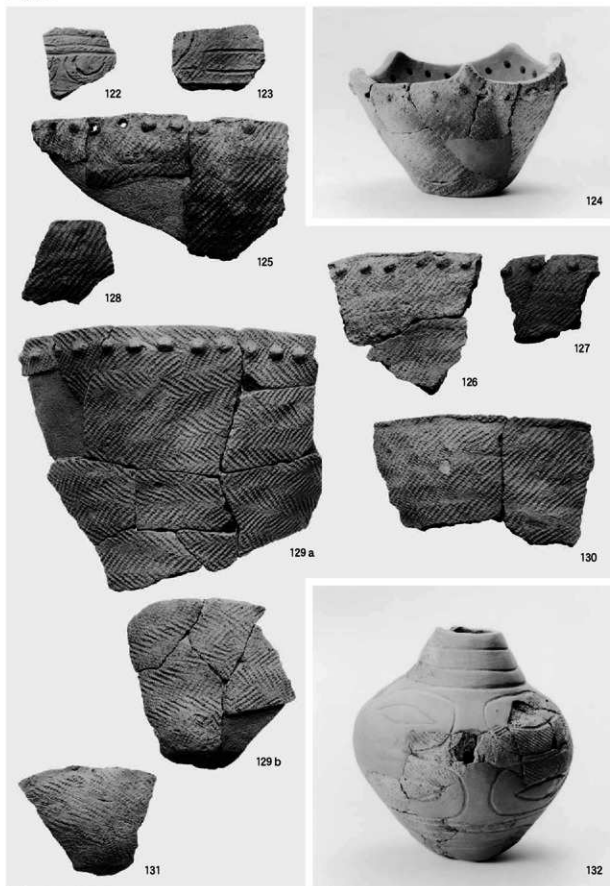


102 b

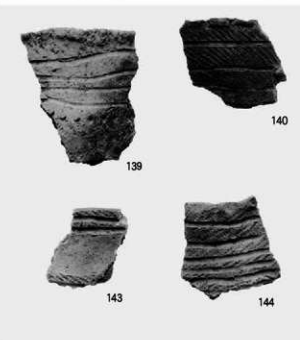
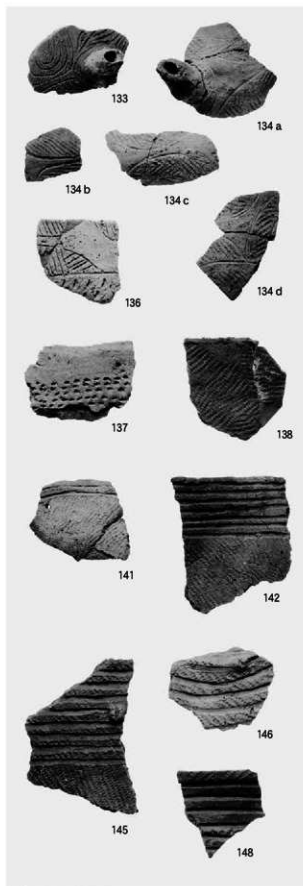




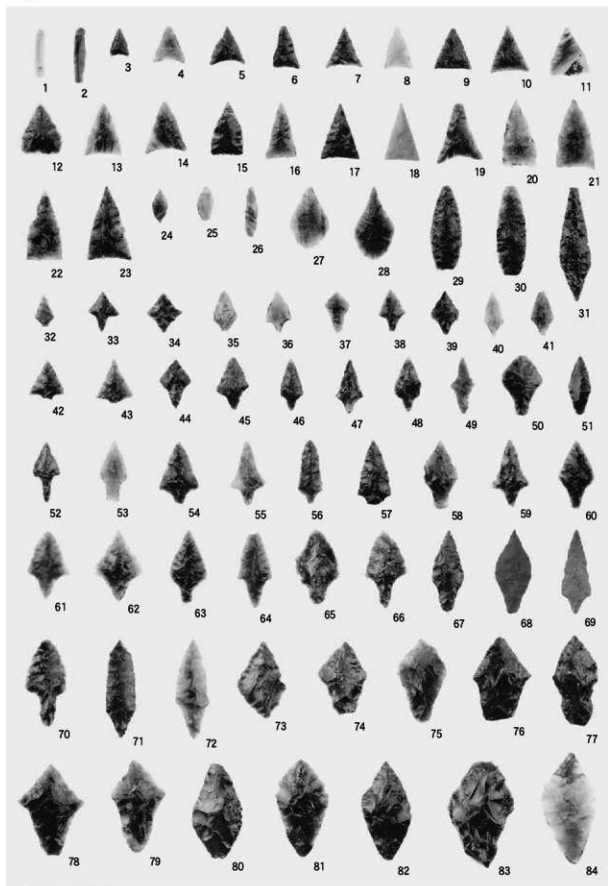
包含層の土器(9)



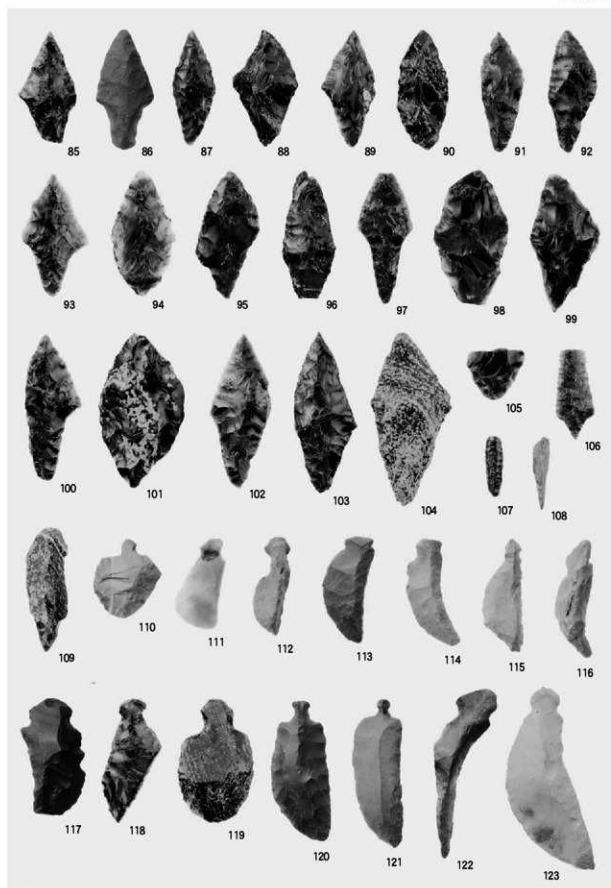
包含層の土器(10)



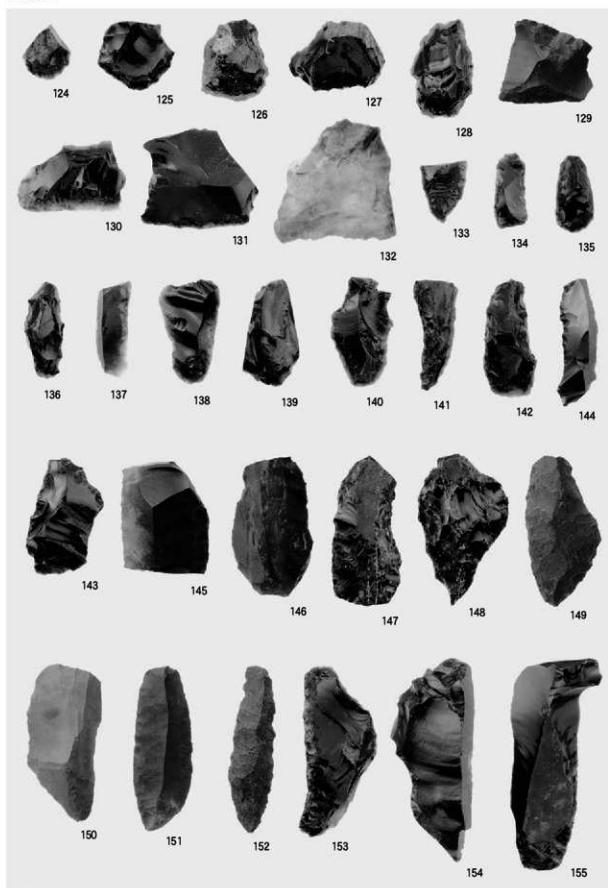
包含層の土器(11)



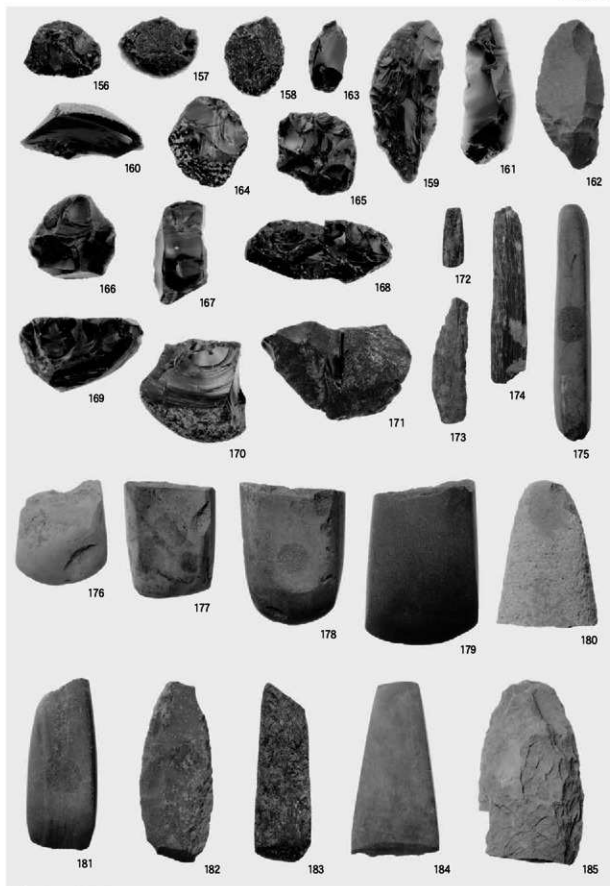
包含層の石器(1)



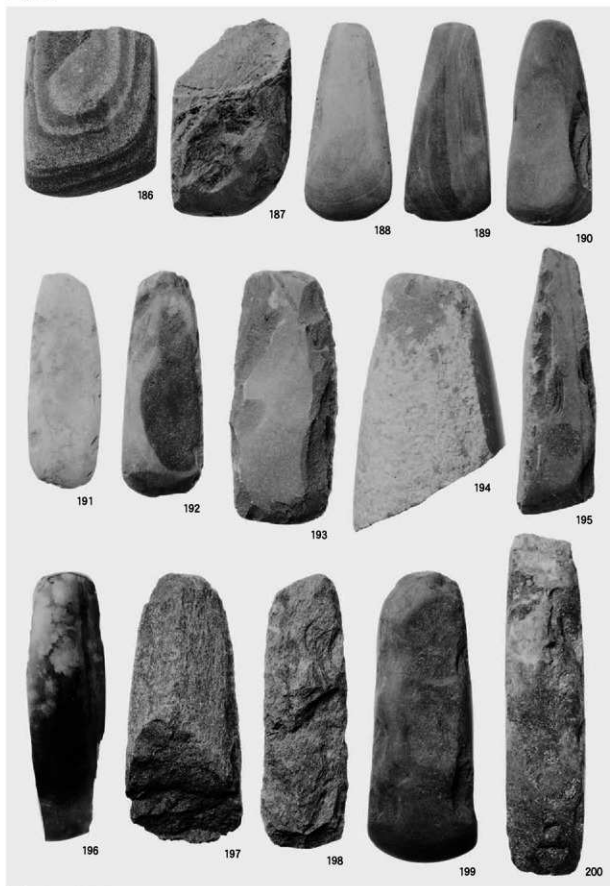
包含層の石器(2)



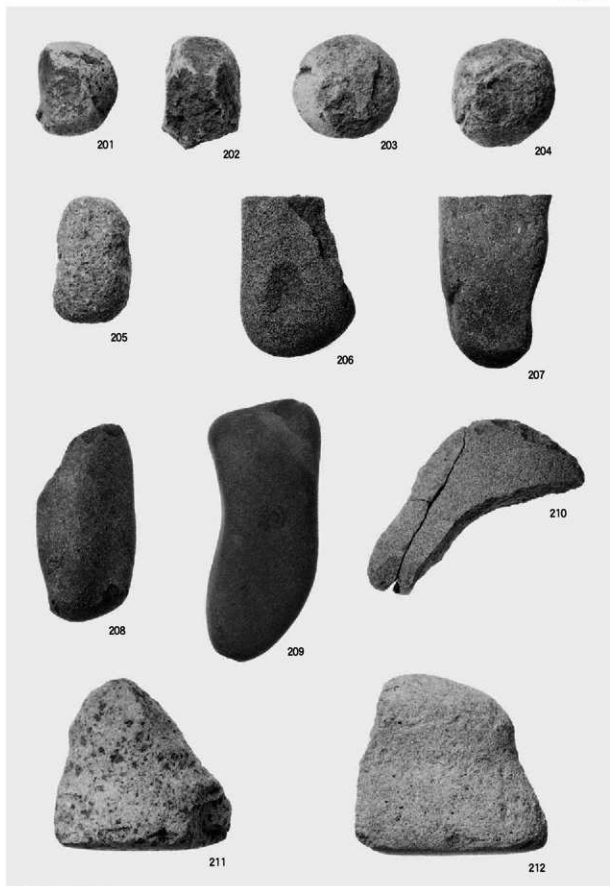
包含層の石器(3)



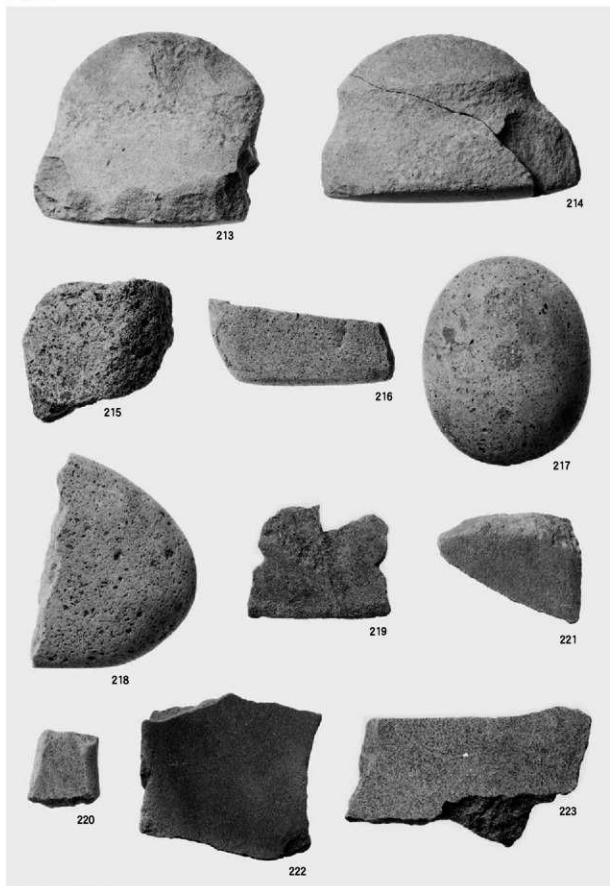
包含層の石器(4)



包含層の石器(5)



包含層の石器(6)



包含層の石器(7)



224



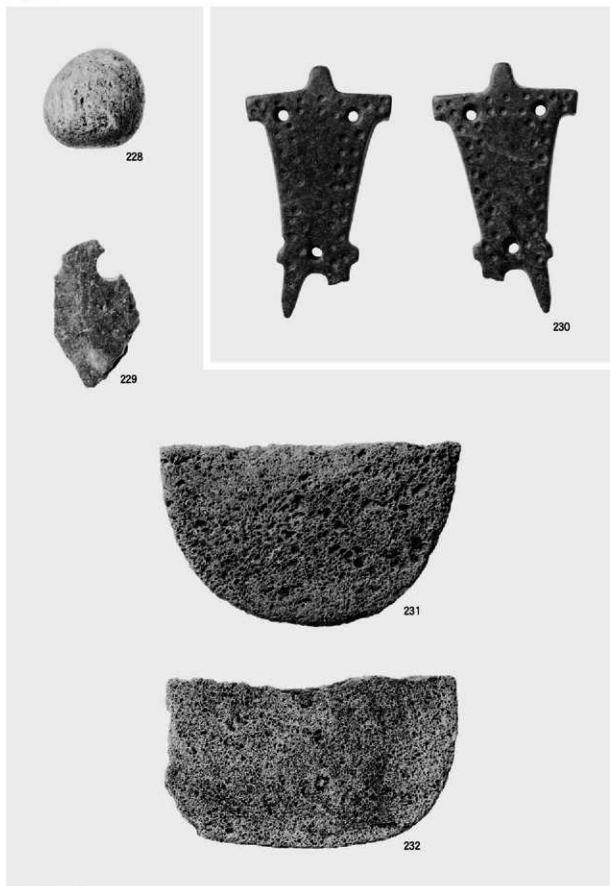
226



225



227



包含層の石製品

報告書抄録

ふりがな	ちとせし うめかわ4いせき かつこ2							
書名	千歳市 梅川4遺跡(2)							
副書名	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第269集							
編著者名	新家水奈・影浦 覚							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238 E-mail mail@domaibun.or.jp ホームページ http://www.domaibun.or.jp							
発行年月日	平成22年(西暦2010)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
梅川4遺跡	北海道千歳市 祝梅2042-27・ 56・64・80・81、 祝梅2047 -55・57	01224	A-03-59	42° 49' 46"	141° 41' 24"	20070508 ～ 20071027 20080507 ～ 20081031	22,205㎡	道路建設 (一般国道 337号千歳 市新千歳空 港関連工 事)に伴う 記録保存
種別	集落・遺物包含地(第Ⅱ黒色土層)							
主な時代	縄文時代中期、後期、晩期後葉							
主な遺構	住居跡3軒、土坑16基、Tピット7基、焼土2か所、土器集中2か所							
主な遺物	縄文時代中期(北筒式)、後期、晩期後葉の土器・石器等。 表裏面に凹みがある板状岩偶が1点出土している。							
要 約								
<p>梅川4遺跡は、石狩低地帯の南端に位置し、祝梅川源流部の右岸、標高15mの平坦な台地から斜面にかけて所在する。今回報告する調査区は、前回報告(北埋調報第253集)の地区を挟んで南北に隔たる。</p> <p>本書は、そのうち第Ⅱ黒色土層出土の遺構・遺物についての報告である。</p> <p>本調査地点の主要な時期は、南側の地区(BC地区)が縄文時代中期から後期、北側の地区(A地区)が縄文時代後期と晩期後葉である。</p> <p>主要な遺構は、縄文時代中期後葉(柏木川式)の住居跡(VH-3)と後期中葉の住居跡(VH-1・2)、縄文時代中期(北筒式)の構築と推定される土坑、Tピット等である。他、縄文時代後期中葉の土器集中がある。</p>								

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第269集

千歳市 ^{うめ かわ}梅川4遺跡(2)

—一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成22年3月26日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL (011) 386-3231 (代表)

FAX (011) 386-3238

E-mail mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 株式会社 北海道機関紙印刷所

〒060-0806 札幌市北区北6条西7丁目

TEL (011) 716-6141 (代表)

FAX (011) 717-5431